

# 福満遺跡

## 第 26・30 次発掘調査報告書

－彦根市スポーツ・文化交流センター等建設付帯工事に伴う発掘調査－



令和 6 年 3 月

彦根市

# 福満遺跡

## 第 26・30 次発掘調査報告書

－彦根市スポーツ・文化交流センター等建設付帯工事に伴う発掘調査－

令和 6 年 3 月

彦根市



## 例 言

1. 本書は彦根市小泉町・西今町に所在する福満遺跡の第26・30次発掘調査報告書である。
2. 調査に関する調整、現地調査ならびに整理調査は彦根市が行った。所在地・調査期間等については以下のとおりである。

第26次現地調査 所在地：彦根市小泉町・西今町 地先  
調査原因：彦根市スポーツ・文化交流センター等建設付帯工事  
期間：平成30年9月1日～平成31年1月31日

第30次現地調査 所在地：彦根市小泉町 地先  
調査原因：彦根市スポーツ・文化交流センター等建設付帯工事  
期間：令和2年4月13日～令和2年11月30日

第26・30次整理調査 期間：令和5年4月10日～令和6年3月31日

3. 本調査は、彦根市文化財課（～平成31年3月31日：彦根市教育委員会文化財部文化財課、平成31年4月1日～：彦根市市長直轄組織文化財課、令和2年4月1日～：彦根市歴史まちづくり部文化財課、令和5年4月1日～：彦根市観光文化戦略部文化財課）が実施した。各年度の調査の体制は下記のとおりである。

### 【平成30年度】（第26次現地調査）

教育長：善住喜太郎  
文化財部長：高田秀樹  
文化財課長：松宮智之  
課長補佐兼管理係長：北坂 崇  
文化財係長：三尾次郎  
主査：林 昭男  
主査：田中良輔  
副主査：渡邊 輝（～平成30年11月）  
主任：下高大輔（平成30年4月1日～熊本市経済観光局派遣）  
主事：秋篠功二（平成29年4月1日～文化庁派遣）  
主事：西坊仁志（平成30年12月～）  
臨時職員：沖田陽一  
臨時職員：飯島由紀子

文化財部次長：広瀬清隆  
主幹兼歴史民俗資料室長：井伊岳夫  
副主幹兼史跡整備係長：北川恭子  
主査：深谷 覚  
主査：戸塚洋輔  
主査：小林圭一  
主任：斎藤一真  
技師：船山友祐  
技師：内藤 京  
臨時職員：樋口杏奈

### 【令和2年度】（第30次現地調査）

市長：大久保 貴  
歴史まちづくり部長：広瀬清隆  
副参事兼文化財課長：松宮智之  
主幹兼史跡整備係長：鈴木康弘  
副主幹：小川有紀  
文化財係長：三尾次郎  
主査：林 昭男  
主査：田中良輔  
主任：斎藤一真  
主事：西坊仁志  
主事：船山友祐

歴史まちづくり部次長：久保達彦  
主幹兼歴史民俗資料室長：井伊岳夫  
主幹：辰巳 清  
課長補佐兼管理係長：牧田 歩  
主査：多賀公一  
主査：戸塚洋輔  
副主査：門西靖子  
主任：鈴木達也  
主事：北村双葉  
技師：内藤 京



会計年度任用職員：沖田陽一  
会計年度任用職員：岡田ひとみ  
会計年度任用職員：豊村たまき  
会計年度任用職員：阿部春香

会計年度任用職員：樋口杏奈  
会計年度任用職員：久保亮二  
会計年度任用職員：小野直子

【令和5年度】（第26・30次整理調査）

市長：和田裕行  
観光文化戦略部長：久保達彦  
副参事兼文化財課長：井伊岳夫  
課長補佐兼管理係長：西崎和則  
副主幹兼文化財係長：林 昭男  
副主幹：戸塚洋輔  
史跡整備係長：大橋 圭  
主任：佐々木香会  
主任：内藤 京  
技師：岡 智康  
会計年度任用職員：宮崎幹也  
会計年度任用職員：久保亮二  
会計年度任用職員：小野直子  
会計年度任用職員：佐藤利江

観光文化戦略部次長：山岸将郎  
副参事兼世界遺産推進室長：小林 隆  
副主幹兼世界遺産推進室長補佐：三尾次郎  
副主幹：深谷 覚  
副主幹：田中良輔  
副主査：斎藤一真  
主任：鎌田希来  
技師：川村峻太

会計年度任用職員：樋口杏奈  
会計年度任用職員：岡田ひとみ  
会計年度任用職員：春名英行

4. 現地調査と整理調査は林が担当し、以下の諸氏が参加した。

第26次現地調査：市直雇用の作業員

久保亮二（調査補助員）

第30次現地調査：公益社団法人彦根市シルバー人材センターから作業員を派遣いただく。

久保亮二、小野直子（会計年度任用職員）

第26・30次整理調査：宮崎幹也、樋口杏奈、久保亮二、岡田ひとみ、小野直子、佐藤利江  
（以上、会計年度任用職員）

5. 本書で使用した遺構実測図は、林、久保亮二が作成し、遺物実測図は、宮崎幹也、沖田陽一、樋口杏奈、久保亮二、小野直子が作成した。遺構と遺物の写真撮影は、林が行った。
6. 本書の執筆及び編集は、林が行った。
7. 本書で使用した方位は真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。
8. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市で保管している
9. 本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。

土師器・陶器  須恵器

# 目 次

---

巻頭図版

例言

## 第1章 序 論

第1節 調査に至る経緯と経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 発掘調査の経過と方法	2
(3) 整理調査の経過と方法	3
第2節 地理的・歴史的環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	7
(3) 福満遺跡の概要と既往調査	9

## 第2章 第26次調査の成果

第1節 調査区の概要	13
第2節 検出遺構と遺物	13
(1) 第1調査区	13
(2) 第2調査区	19
(3) 第3調査区	21
(4) 小 結	25

## 第3章 第30次調査の成果

第1節 調査区の概要	26
第2節 基本土層	26
第3節 検出遺構と遺物	28
(1) 概 要	28
(2) 包含層出土遺物	28
(3) 竪穴建物	28
(4) 掘立柱建物	28
(5) 道路遺構	45
(6) 溝	45
(7) 井 戸	47
(8) 土 坑	47
(9) 小 穴	48
(10) 小 結	51

## 第4章 総括

第1節 第26～30次調査の成果と課題	53
(1) はじめに	53
(2) 第26・30次調査の成果	53
(3) 第26～30次調査成果の整理と今後の課題	53

図版

報告書抄録

---

# 第1章 序 論

## 第1節 調査に至る経緯と経過

### (1) 調査に至る経緯

本書は、公共事業により実施した福満遺跡第26・30次（彦根市西今町、小泉町 地先）発掘調査の成果をまとめたものである。

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に所在する縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。犬上川下流域右岸、同河川が形成する扇状地下方の湧水帯の標高約95mに位置する。当該遺跡の東方約600mの位置にJR琵琶湖線が南北に縦貫しており、南彦根駅へのアクセスにも適した立地である。このような利便性の高い地域ゆえに、周辺地域は商業施設や宅地造成、集合住宅などの開発が進んでおり、市内でも市街地化が進んでいる地域の一つである。今回の調査地点に関しても、開発計画以前は造成地としての土地利用がなされていた場所である。

今回の記録保存を目的とする発掘調査は、彦根市が計画した彦根市スポーツ・文化交流センター（プロシードアリーナHIKONE）等建設工事及びその付帯工事に先立ち提出された文化財保護法第94条の通知（平成28年9月27日付け）及び調査依頼（平成28年9月27日付け）に基づくものである。通知の提出に伴い、開発予定地における遺構・遺物

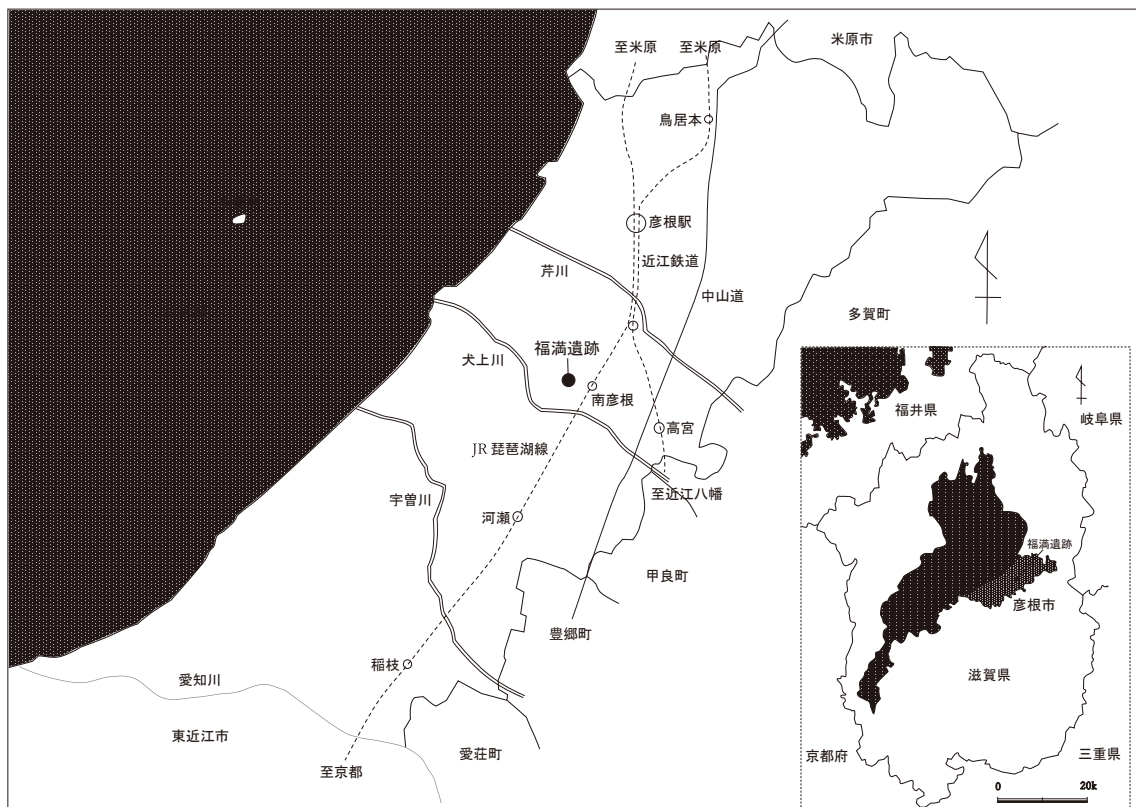


図1 福満遺跡の位置図

の有無を確認するため、平成28年11・12月に試掘調査を実施した。試掘調査は、開発予定面積約31,500㎡を対象として試掘トレンチを53箇所(2m×2m)設定してバックホーにて掘削、細部は人力による掘削・検出作業を行い、遺構・遺物の確認を行った。

試掘調査の結果、開発予定地全域の試掘トレンチで遺構・遺物が確認されたため、市開発担当部局と対応に関する協議を行った。協議の結果、スポーツ・文化交流センター本体部分と付帯工事(第26次:防火水槽建設工事・オイルタンク槽建設工事、第30次:雨水貯留槽建設工事・市道改良工事)に関しては、遺構面までの保護層を確保することができなく、計画変更も困難であるため、今回の記録保存調査の対象範囲とした。スポーツ・文化交流センター本体部分に関しては、彦根市を調査主体とし、公益財団法人滋賀県文化財保護協会が調査(福満遺跡第23次発掘調査)を実施し、付帯工事部分に関しては彦根市が調査(福満遺跡第26・30次発掘調査)を実施した。本書は、彦根市が調査を実施した福満遺跡第26・30次発掘調査の成果をまとめたものである。第26次調査の対象面積は約66㎡で、現地の発掘調査は平成30年9月1日に着手し、平成31年1月31日まで実施した。第30次調査の対象面積は約641㎡で、現地の発掘調査は令和2年4月13日に着手し、令和2年11月30日まで実施した。整理調査に関しては、令和5年4月10日～令和6年3月31日まで行い本報告書の刊行となった。

調査にあたっては、市の開発担当部局・近隣住民を始めとする関係者にご理解とご協力を賜った。厚くお礼を申し上げたい。

## (2) 発掘調査の経過と方法

現地の発掘調査実施にあたり、市の開発担当部局と調査担当部局間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書(第26次:平成30年9月1日付け、第30次:令和2年4月13日付け)を取り交わし、契約締結後に現地調査を開始した。

調査は、試掘調査の成果に基づき、遺構面直上まで重機による掘削を行い、その後の調査は人力により行った。調査に伴うグリッド設定については、第27～30次調査(第27～29次調査も公共事業に伴い発掘調査を実施した。本書とは別報告)が近隣で実施されたため共通で設定した。図化作業の効率を勘案して掘削範囲の平面形状に沿う任意の方位でグリッド設定を行い、グリッドの基準となる複数点に平面直角座標値を落とした。グリッド番号は北西端から南東側に向かってアルファベットを付け、北東端から南西側に向かって数字を付した。遺物は基本的に遺構・土層ごとに取り上げたが、遺構を伴わない遺物の取り上げはグリッドごとに行い、北隅にあるグリッド杭の番号を代表させた。遺構図はグリッドを基準に、1/100の遺構分布図と1/20の遺構平面図を基本とし、状況に応じて1/10の遺物出土状況図等を作成したほか、1/20の調査区および遺構の土層断面図を手実測により作成した。遺構の名称については、文化庁発行の『発掘調査の手引き―集落遺跡発掘編―』記載の略号を用いている。これと遺構番号の組み合わせで遺構名とするが、遺構番号は遺構の種別ごとに番号を与えるのではなく、種別に関わらず1から通し番号を付した(今回の場合は、各次数の各調査区ごとに1から通し番号を与えている。ただし、30次調査に関

しては、第1調査区は1から、第2調査区は201から通し番号を与えている)。これにより、各遺構に固有の番号を与えることになり、調査の途上、あるいは整理の過程で遺構の種類に関わる解釈の変更があった場合にも、略号のみを変更し、番号を変更することなく対応できる。ただし、掘立柱建物や柵、道路遺構など複数の遺構が一体で構成されるものについては、その遺構種別ごとに1から通し番号を付与した。現地の発掘調査だが、第26次調査は平成30年9月1日から平成31年1月31日まで、第30次調査は令和2年4月13日から令和2年11月30日まで実施した。

### (3) 整理調査の経過と方法

整理調査の実施にあたり、市の開発担当部局と調査担当部局間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書（令和5年4月10日付け）を取り交わし、契約締結後に整理調査を開始した。

遺構図は原図作成ののちトレースを行い、図版の作成を行った。遺物は、洗浄・注記・接合・選別・実測、そして原図作成ののちトレースを行い図版の作成を行うとともに、遺物の写真撮影を行った。同時に調査成果の検討・文章作成・全体の編集作業を行い報告書の刊行となった。

整理調査に関しては、現地調査終了後の令和5年4月10日に着手、令和6年3月31日まで実施した。これらの一連の発掘調査・整理調査によって得られた資料および成果物については彦根市で保管している。

## 第2節 地理的・歴史的環境

### (1) 地理的環境 (図1・2)

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に位置する縄文時代前期から中世の遺跡である。遺跡は鈴鹿山系から琵琶湖に注ぐ犬上川の下流右岸に位置する。犬上川は滋賀県東部を流れる流域面積105.3km<sup>2</sup>、流路長27.3kmを測る一級河川である。源を鈴鹿山中の鞍掛峠と角井峠に発し、湖東平野を潤して彦根市中央部で琵琶湖にそそぐ。標

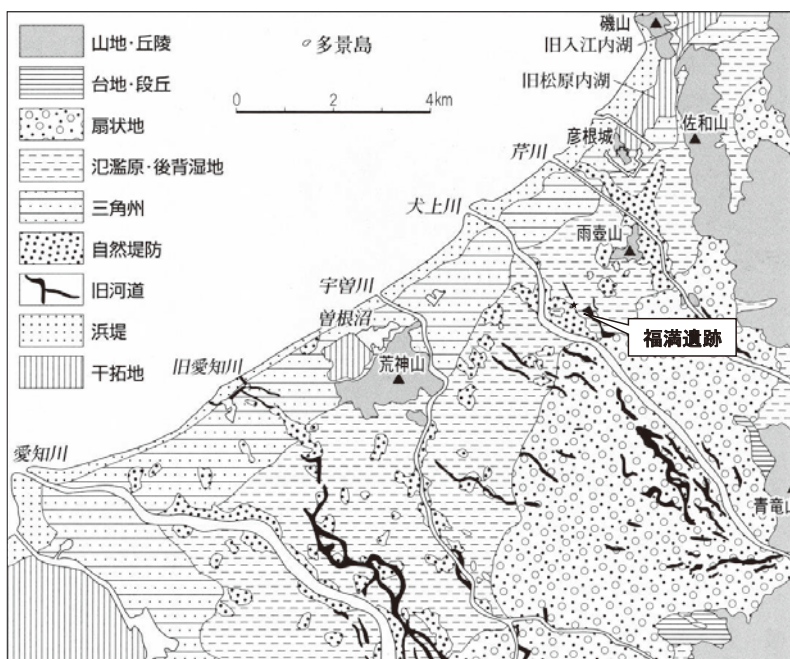


図2 彦根市の自然地形（『新修彦根市史』第1巻より）

高130mから100mにかけて多賀町檜崎付近を扇頂とする扇状地を形成しており、降水量の



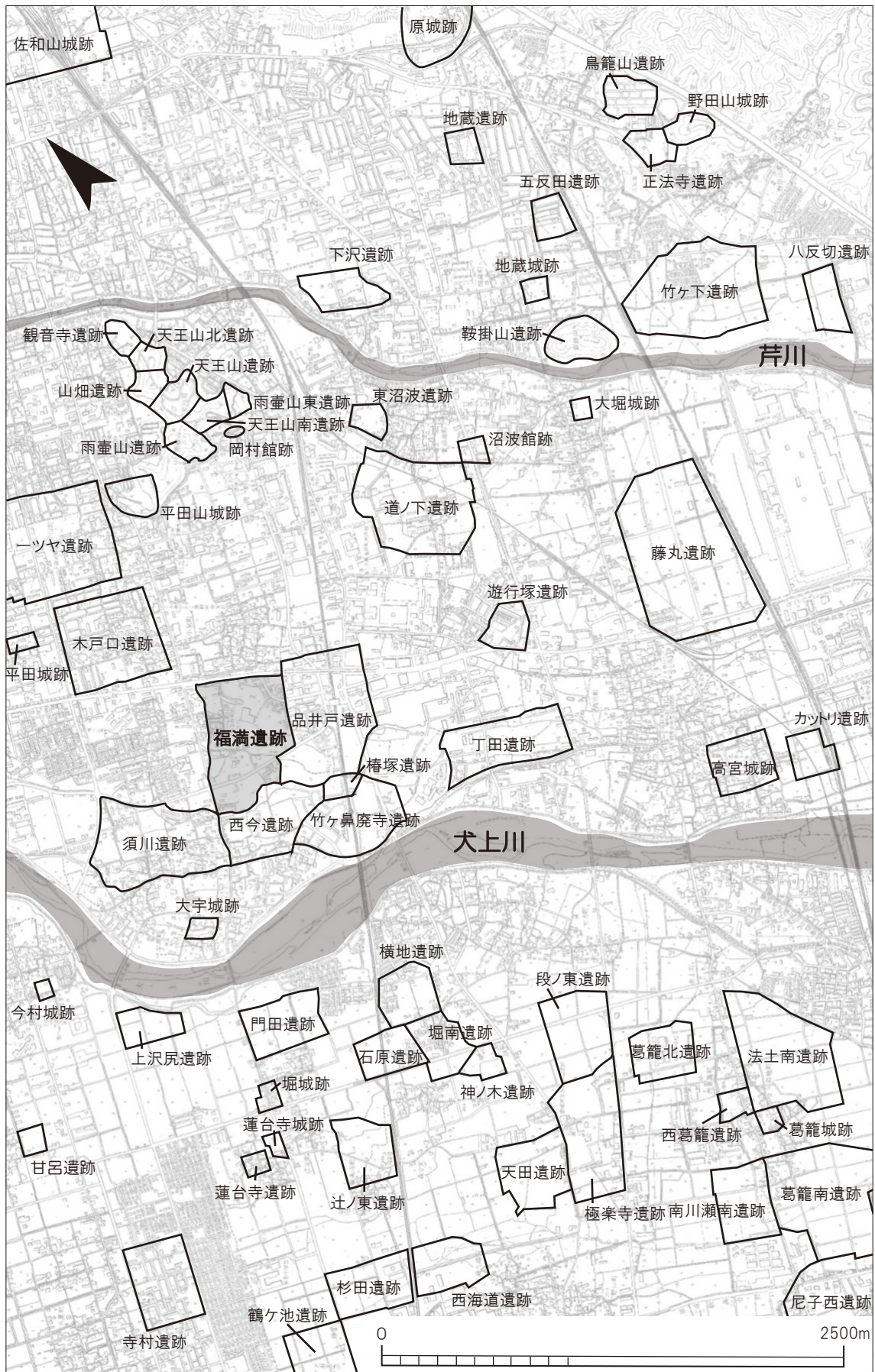


図3 福満遺跡と周辺の遺跡分布図





写真1 福満遺跡周辺の航空写真（平成21年12月1・2日撮影）



表1 福満遺跡周辺の主要遺跡一覧

市番号	県番号	遺跡の名称	所在地		種類	時代	立地	現状	備考
	202-								
11	090	佐和山城跡	彦根市	佐和山町	城館跡	中世	山頂・山麓・平地	山林・水田	石垣・曲輪・土塁
31	031	観音寺遺跡	彦根市	芹川町	散布地	中世	山頂	山林	
32	032	天王山北遺跡	彦根市	芹川町	散布地	古墳～平安	山頂	山林	
33	010	山畑遺跡	彦根市	和田町	散布地	古墳	山頂	山林	古墳？
34	033	天王山遺跡	彦根市	芹川町	散布地	中世	山腹	山林	
35	034	天王山南遺跡	彦根市	芹川町	散布地	中世	山麓	山林	古墳？
36	038	雨壺山遺跡	彦根市	山之脇町	散布地	古墳	山頂	山林	古墳？
37	039	雨壺山東遺跡	彦根市	山之脇町	散布地	中世	山麓	山林	古墳？
42	007	一ツヤ遺跡	彦根市	平田町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
43	006	木戸口遺跡	彦根市	平田町	散布地	縄文～中世	平地	水田・宅地	
44	037	山之脇遺跡	彦根市	山之脇町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
45	044	下沢遺跡	彦根市	西沼波町	散布地	古墳	平地	水田・宅地	
46	046	地蔵遺跡	彦根市	地蔵町	古墳	古墳	平地	水田・宅地	円墳
47	047	五反田遺跡	彦根市	正法寺町	散布地	古墳	平地	水田	
48	048	鳥籠山遺跡	彦根市	正法寺町	窯跡	奈良	山麓	山林・水田・宅地	瓦窯跡
49	049	正法寺遺跡	彦根市	正法寺町	古墳	古墳	平地	水田	
51	018	須川遺跡	彦根市	野瀬町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
52	015	福満遺跡	彦根市	西今町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	竪穴建物・土坑・溝・古墳
53	016	西今遺跡	彦根市	西今町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	旧西今東遺跡
54	012	品井戸遺跡	彦根市	小泉町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	掘立柱建物・石帯
55	013	椿塚遺跡	彦根市	竹ヶ鼻町	古墳	古墳	平地	水田・宅地	古墳か？
56	014	竹ヶ鼻廃寺遺跡	彦根市	竹ヶ鼻町	寺院・集落跡	弥生～奈良	平地	水田・宅地	
57	043	道ノ下遺跡	彦根市	東沼波町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地・工場地	
58	139	丁田遺跡	彦根市	高宮町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	埋設土器・翡翠大珠
59	042	東沼波遺跡	彦根市	東沼波町	古墳	古墳	平地	畑地	
60	138	遊行塚遺跡	彦根市	高宮町	散布地	奈良	平地	宅地	高宮廃寺跡？
61	052	竹ヶ下遺跡	彦根市	野田山町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
62	041	藤丸遺跡	彦根市	大堀町・高宮町	集落跡	古墳～中世	平地	水田・宅地	
63	053	八反切遺跡	彦根市	野田山町	散布地	古墳～中世	平地	水田	
64	140	高宮遺跡	彦根市	高宮町	城館跡	中世	平地	宅地・学校用地	
65	141	カットリ遺跡	彦根市	高宮町	散布地	古墳～平安	平地	水田	(多賀町)
69	055	甘呂遺跡	彦根市	甘呂町	寺院跡	古墳～中世	平地	水田	甘露寺跡伝承
70	019	上沢尻遺跡	彦根市	野瀬町	散布地	古墳～中世	平地	水田	
71	129	門田遺跡	彦根市	堀町	散布地	古墳～奈良	平地	水田	
72	127	蓮台寺遺跡	彦根市	蓮台寺町	城館跡	中世	平地	畑地・宅地	
73	063	寺村遺跡	彦根市	日夏町	散布地	古墳～平安	平地	水田・宅地	
76	130	横地遺跡	彦根市	堀町	集落跡	古墳～平安	平地	水田・宅地	円墳
77	124	石原遺跡	彦根市	辻堂町	散布地	古墳～平安	平地	水田・宅地	
78	125	辻ノ東遺跡	彦根市	辻堂町	散布地	古墳～奈良	平地	水田・畑地・校地	
79	123	神ノ木遺跡	彦根市	金剛寺町	集落跡	縄文～奈良	平地	水田・社地	円墳
81	117	鶴ヶ池遺跡	彦根市	川瀬馬場町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畑地・道路	
82	118	杉田遺跡	彦根市	川瀬馬場町	散布地	古墳～平安	平地	水田・工場用地	
83	119	西海道遺跡	彦根市	川瀬馬場町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畑地	
84	120	天田遺跡	彦根市	極楽寺町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畑地・宅地	
85	121	極楽寺遺跡	彦根市	極楽寺町	集落跡	古墳～奈良	平地	水田・宅地	
86	122	段ノ東遺跡	彦根市	森堂町	集落跡	古墳～平安	平地	水田・宅地	
87	110	葛籠北遺跡	彦根市	西葛籠町	古墳群・集落跡	古墳～中世	平地	水田・畑地・校地	円墳
88	111	西葛籠遺跡	彦根市	西葛籠町	古墳	古墳	平地	宅地	円墳
140	131	堀南遺跡	彦根市	堀町	集落跡	弥生～奈良	平地	水田・宅地	
141	109	法士南遺跡	彦根市	葛籠町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
142	115	南川瀬南遺跡	彦根市	川瀬馬場町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	
143	108	葛籠南遺跡	彦根市	葛籠町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
146	197	尼子西遺跡	彦根市	出町	集落跡	奈良・平安	平地	宅地	
153	008	平田城跡	彦根市	平田町	城館跡	中世	平地	宅地	
154	009	平田山城跡	彦根市	平田町	城館跡	中世	平地	宅地・社地	
155	011	小泉城跡	彦根市	小泉町	城館跡	中世	平地	宅地	
156	021	大字城跡	彦根市	宇尾町	城館跡	中世	平地	水田・宅地	
159	035	沼波館跡	彦根市	東沼波町	城館跡	中世	平地	水田	
160	036	岡村館跡	彦根市	岡町	城館跡	中世	平地	山林・宅地	
161	040	大堀城跡	彦根市	大堀町	城館跡	中世	平地	水田	
162	045	地蔵城跡	彦根市	地蔵町	城館跡	中世	平地	水田	
163	051	野田山城跡	彦根市	野田山町	城館跡	中世	平地	山林	瓦窯跡
165	056	今村城跡	彦根市	開出今町	城館跡	中世	平地	水田・宅地	
174	094	原城跡	彦根市	原町	城館跡	中世	山頂	その他	
180	107	葛籠城跡	彦根市	葛籠町	城館跡	中世	平地	宅地	
182	126	蓮台寺城跡	彦根市	蓮台寺町	城館跡	中世	平地	宅地	
183	128	堀城跡	彦根市	堀町	城館跡	中世	平地	水田	
203	200	鞍掛山遺跡	彦根市	正法寺町	古墳	古墳	山頂	山林	埴輪片表採の報告あり

少ないときには、扇頂である標高 130 m のあたりから標高 100 m のあたりまでの中流域で伏流し、水無川となる。また、標高 100 m から 90 m にかけて再び水が湧出しているが、必ずしも河道に沿って元来の河川水が湧き出しているのではない。調査地は、犬上川扇状地の外側にあたり、標高約 94 m の湧水帯に位置し、豊かな水に恵まれた地域である。調査地の南東約 1 km の標高 97 m 付近にある扇状地の扇端には伏流水が自噴した湧水池がみられ、南西約 0.4 km の西今町旧集落の中央にあたる朝鮮人街道の交差点南角に『十王の水』と呼ばれる湧水池がみられる。これらの湧水池からでる犬上川の伏流水が下流の用水となっている。犬上川は扇状地上で度々流路を変えていたとみられ、自然堤防あるいは氾濫平野に位置する福満遺跡でも旧河道が過去の調査で確認されている。

## (2) 歴史的環境 (図 3・表 1、写真 1)

**縄文時代** 屋中寺廃寺で早期の高山寺式土器、福満遺跡で前期の大歳山式土器が確認されている。このように早期より遺物の出土は確認されるが、遺構を伴い、遺物量が増加するのは中期末から晩期に入ってからである。犬上川流域では福満遺跡を中心に、土田遺跡・敏満寺遺跡 (多賀町)・小川原遺跡・北落遺跡・金屋遺跡 (甲良町) などが当該期に当る。土田遺跡・小川原遺跡では、甕棺墓や集石遺構などが確認されている。

**弥生時代** 前期の様相は不明瞭だが、芹川流域の大岡遺跡 (多賀町) や犬上川流域の尼子遺跡・北落遺跡・金屋遺跡 (甲良町) などの扇状地で土器が出土している。これらは、縄文時代後・晩期から継続している立地であるが、これ以降継続するものではない。市域では竹ヶ鼻廃寺遺跡や稲里遺跡で前期の土器の出土が確認されている。中期以降は、琵琶湖側の沖積低地部に遺跡の分布は移動する。宇曾川流域には、中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡、同じく集落遺跡で中期から後期にまで及ぶ妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で竪穴住居を伴った福満遺跡がある。このように、中期以降宇曾川・犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が開発する傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌漑利用との関係が考えられる。また、愛知川流域の稲部遺跡・稲部西遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代初頭を中心とする拠点集落が確認されている。

**古墳時代** 古墳時代では、前期末に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。同時期の湖東平野北部に広がる集落遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段の東遺跡・木曾遺跡 (多賀町)・土田遺跡 (多賀町) などがある。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山などに古墳が築造されるようになる。南部では、愛知川と宇曾川に挟まれた沖積地で集落の形成が顕著となる。下流域の普光寺遺跡では初頭から前期、芝原遺跡では前期を中心に確認されており、中流域の稲部遺跡や長野遺跡 (愛荘町) でも同時期の集落が形成される。これらの遺跡は中期になると衰退し、この時期の遺跡数は少ない。後期になると、芝原遺跡で再び集落が形成され、なまず遺跡 (愛荘町) で 6 世

紀末頃の切妻大壁造建物が検出されていることは特筆され、渡来系氏族との関係が推測される。

**白鳳～奈良時代** 7世紀後半になると、新しく伝来した仏教の影響の下に、権力の象徴が古墳から寺院へと変化する。彦根市域でもこれら古代寺院の比定地が6箇所想定されている。犬上川流域の高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂東遺跡、愛知川流域の屋中寺廃寺・下岡部廃寺・普光寺廃寺である。彦根市域における白鳳期の集落遺跡の状況は、未だ明らかになっていないが、奈良・平安時代に入ると、品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺遺跡・福満遺跡・法士南遺跡・丁田遺跡などで掘立柱建物跡が検出されているため、これらのなかに前代の遺構が含まれている可能性がある。奈良時代においては、竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東2km付近に、畿内と東国を結ぶ推定東山道が通過しており、交通・流通面において重要な地域であったといえる。この時期、竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡では、大型の掘立柱建物や、硯・石帯・銅匙などの官衙的遺構・遺物が確認されており、これらより現在のJR南彦根駅周辺は犬上郡の郡衙比定地となっており、古代犬上郡における中心地であったと考えられている。また、前述の古代寺院への瓦の供給が想定される、瓦陶兼業窯の鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡）や、製鉄遺跡であるキドラ遺跡などの生産遺跡も確認されている。

宇曾川以南では、奈良時代の遺跡は顕著でなく、愛知川に近い国領遺跡で確認される程度である。しかし、荒神山北側の東大寺領覇流荘の存在は特筆されるであろう。正倉院に残る墾田地図によると、愛知、犬上両郡にまたがる70町が東大寺に施入され、覇流荘が成立した。また、延久2（1070）年の『近江国弘福寺領庄田注進状』により愛知郡2条7里・8里・3条16里に弘福寺領平流荘が存在したことが記されており、さらに和銅2（709）年の『弘福寺水陸田目録』に「依智郡田壱拾壱町壱段参拾陸歩」とみえることから、弘福寺領平流荘は8世紀初頭には成立していたものと考えられている。具体的な所在地としては、荒神山南麓の下岡部廃寺と屋中寺廃寺に挟まれた地と推定されている。また、この時期の宇曾川流域では、少し上流側の長野遺跡・なまず遺跡・杓掛遺跡（愛荘町）を中心に遺跡は展開する。これらの遺跡の近くには古代東山道に比定される近世中山道が通り、愛知郡衙の存在も想定されており、当該期の中心的役割をなした地域と考えられている。平安時代になると国領遺跡で前代に引き続き集落が営まれるが、普光寺廃寺や芝原遺跡でも遺構・遺物が確認されるようになる。特に、芝原遺跡では京都産緑釉陶器皿・畿内産黒色土器碗・灰釉陶器皿の転用硯がまとまって出土しており、一般集落とは異なる様相がみてとれる。

**中世** 中世では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落が国領遺跡、普光寺廃寺遺跡、市遺跡で営まれる。また、湖上交通が活発化し、市域では松原・薩摩・柳川・三津屋・石寺・須越・八坂が営まれる。そのような中であって、宇曾川流域に立地する妙楽寺遺跡では室町時代を中心とする遺構が検出され、15世紀末から16世紀後半には、条里地割に方位を揃える水路と道路によって整然と区画された屋敷地が検出されている。貿易陶磁や茶道具も多く出土し、琵琶湖と宇曾川の水運によって繁栄した商業を生業とする都市的空間であったと考えられている。この妙楽寺遺跡と宇曾川を隔てた対岸には古屋敷遺跡が位置す

る。道路や土塁で区画された屋敷地が確認され、存続時期が妙楽寺遺跡と一致することから、両遺跡は一体のものと捉えられている。しかし、妙楽寺遺跡が水路によって区画されているのに対し、古屋敷遺跡では、道路や土塁で区画されている点や古屋敷遺跡では妙楽寺遺跡に比べて茶器よりも、日常雑器の占める割合が高いなどの違いも認められる。

中世後半期では、北の京極・浅井氏と南の六角氏の軍事的衝突が活発化し、市域一帯は、ちょうど両勢力がぶつかり合う地理的關係上、佐和山城や肥田城などの城館が活発に営まれ、佐和山城に関してはその地理的・軍事的的重要性より、その後も織田勢力、豊臣勢力へと引き継がれていく。

### (3) 福満遺跡の概要と既往調査 (図4、表2)

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に所在する縄文時代から中世の複合遺跡である。鈴鹿山系から流れる犬上川右岸の標高94mの扇状地の扇端部に立地している。遺跡周辺は、国道8号線とJR琵琶湖線南草津駅にも近接しており利便性も高いため、近年、宅地化や集合住宅建設などの開発が進んでいるが、開発に伴い過去に25度調査が実施されている。

福満遺跡の調査を振り返ると、第2次調査(城南小学校プール)・第3次調査(宅地造成)で縄文時代前期の大歳山式土器が出土しているほか、中期末から晩期の土器が流路から大量に出土し、包含層も確認されている。いまだ明確な遺構は確認されていないが、当時の集落がこの地にあったことがうかがえる。

弥生時代以降では、第23次調査(彦根市スポーツ・文化交流センター本体建設)で前期の竪穴建物が、第25次調査(宅地造成)では中期の方形周溝墓群が確認されている。第4次調査(城南幼稚園改築)や第7次調査(城南小学校校舎増築)、福満遺跡東隣にあたる品井戸遺跡では、第1次調査(団地造成)で庄内式並行期の土器が出土しており、第4次調査(市道改良)では竪穴建物も検出されていることから当時の集落が福満遺跡にもあった可能性は高い。なお、福満遺跡第5次調査(産業振興センター:燦ぱれす)・第8次調査(集合住宅)・第18次調査(集合住宅)で弥生時代後期から古墳時代初頭とみられる方形周溝墓が検出されており、品井戸遺跡でも第2次調査(市道建設)で方形周溝墓が検出されていることから、弥生時代後期以降の集落と墓域がセットで確認されている。また、福満遺跡第13次調査(個人住宅)でも時期は判然としないが方形周溝墓が確認されている。第23次調査地では、古墳時代前期から竪穴建物が確認されているが、後期に入ると遺構が大規模に展開される状況が確認されている。同時期の竪穴建物は第1・4次調査でも確認されており、第1次調査では子持ち勾玉が土坑から須恵器とともに出土している。同時期の古墳だが、今回の調査地の北隣で実施された第12次調査(宅地造成)で土坑墓が2基、第18次調査で古墳の周濠が確認されており、古墳時代後期においても集落と墓域がセットで確認されている。

奈良・平安時代には福満遺跡の位置は犬上郡の高宮卿あるいは寶田卿に含まれていた。第1次調査で奈良時代後半の須恵器が土坑から出土しており、第4次調査では平安時代頃とみられる掘立柱建物が数棟検出されている。第23次調査では、倉庫を含む掘立柱建物が複数棟整然と並ぶ状況が確認されており、一般集落とは異なる様相を示し、役人や位の高





図4 福満遺跡の各調査区位置図

表2 福満遺跡の発掘調査一覧

次敷	調査地 / 調査原因	現地調査期間	調査主体	主な時代	主な検出遺構・遺物	文献
1	西今町 380 番地 市立城南小学校増改築工事	1981年4月 ～ 1981年7月	彦根市教育委員会	縄文時代後期末・晩期後半 古墳時代後期、平安時代	河道、竪穴建物、溝、土坑、小穴 縄文土器、土師器、須恵器、石器、石製品 子持勾玉	1・2・3
2	西今町 380 番地 市立城南小学校プール改築工事	1982年10月 ～ 1982年12月	彦根市教育委員会	縄文時代後期末～晩期前半・晩期後半 奈良～平安時代	河道、掘立柱建物、小穴 縄文土器、石器、石製品・土師器、須恵器、 灰釉陶器	1・2
3	西今町字久保田 386 宅地造成工事	1982年12月 ～ 1983年3月	彦根市教育委員会	縄文時代中期末～後期前葉	落ち込み状遺構 縄文土器	1・2
4	西今町 285-1 城南保育園改築工事	1986年6月 ～ 1986年7月	彦根市教育委員会	弥生時代後期後半～古墳時代初頭 古墳時代後期、平安時代	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、小穴 土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、山茶碗	4
5	小泉町字福満 640 ほか 産業振興センター建設工事	1988年7月 ～ 1988年9月	彦根市教育委員会	弥生時代後期～古墳時代初頭	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、小穴、 方形周溝墓 土師器、須恵器	—
6	小泉町字福満 640 ほか 産業振興センター建設工事	1989年12月 ～ 1990年3月	彦根市教育委員会	奈良時代	小穴 土師器	—
7	西今町 380 番地 市立城南小学校増改築工事	1990年6月 ～ 1990年6月	彦根市教育委員会	古墳時代前期	掘立柱建物、溝、土坑 土師器	5
8	西今町字九文目 370-1 集合住宅建設工事	1993年7月 ～ 1993年8月	彦根市教育委員会	弥生時代後期～古墳時代初頭 古墳時代後期	掘立柱建物、溝、土坑、小穴 土師器、須恵器	—
10	西今町 380 番地 市立城南小学校増改築工事	2005年11月 ～ 2005年11月	彦根市教育委員会	古墳時代初頭・後期	柵、溝、小穴 縄文土器、土師器、須恵器、土製品、瓦	6
11	西今町 380 番地 市立城南小学校増改築工事	2006年12月 ～ 2007年3月	彦根市教育委員会	古墳時代初頭・後期	溝、土坑、小穴 土師器、須恵器、緑釉陶器、土製品	6
12	西今町字小橋か板 298-1,298-2,299 宅地造成工事造成工事	2007年6月 ～ 2013年6月	彦根市教育委員会	古墳時代後期	土坑墓、溝、小穴 縄文土器、須恵器、石器	7
13	西今町字小橋か板 298 番 1 個人住宅建設工事	2013年11月 ～ 2013年12月	彦根市教育委員会	古墳時代、 奈良～平安時代	竪穴建物、掘立柱建物、溝、土坑、小穴、 方形周溝墓 土師器、須恵器、石器、銅尺	8
14	西今町字小橋か板 298 番 13 個人住宅建設工事	2014年4月 ～ 2014年5月	彦根市教育委員会	奈良時代か	柵、小穴 土師器	9
15	西今町字九文目 371-6 ほか 集合住宅建設工事	2014年6月 ～ 2014年8月	彦根市教育委員会	古墳時代、奈良時代	河道、古墳の周溝 土師器、須恵器、韓式土器、石器	10
16	西今町字小橋か板 299 番 15 個人住宅建設工事	2015年1月 ～ 2015年2月	彦根市教育委員会	奈良時代	溝、小穴 縄文土器、土師器、須恵器、石器	9
17	西今町字小橋か板 306-1 ほか 店舗建設工事	2015年10月 ～ 2015年11月	彦根市教育委員会	奈良時代	掘立柱建物、柵、溝、小穴 土師器、須恵器	11
18	小泉町字天王 679 番 集合住宅建設工事	2015年7月 ～ 2015年11月	彦根市教育委員会	弥生時代終末～古墳時代初頭 古墳時代中期後葉～末頃	竪穴建物、小穴、方形周溝墓、古墳の周濠 土師器、須恵器、埴輪	12
19	西今町字小橋か板 298 番 12 ほか 個人住宅建設工事	2015年12月 ～ 2016年1月	彦根市教育委員会	弥生時代終末、奈良時代	小穴 土師器	—
20	西今町 298-2 個人住宅建設工事	2016年10月 ～ 2016年11月	彦根市教育委員会	古墳時代後期	竪穴建物、小穴 土師器、須恵器	—
21	西今町 298 番 2 ほか 個人住宅建設工事	2016年10月	彦根市教育委員会	古墳時代後期	小穴 土師器、須恵器	—
22	西今町字小橋か板 298 番 14 個人住宅建設工事	2017年2月 ～ 2017年3月	彦根市教育委員会	古墳時代後期	小穴 土師器	—
23	小泉町 地先 彦根市スポーツ・文化交流センター 建設付帯工事	2017年8月 ～ 2019年3月	彦根市教育委員会	縄文時代後期、弥生時代後期、 古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、 平安時代、鎌倉時代	河道、竪穴建物、掘立柱建物、柵、溝、井戸、 土坑、小穴 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、 二彩陶器、緑釉陶器、白磁、灰釉陶器、石器、 石製品、木製品、漆器、金属製品	13
24	小泉町字八王子 620 番 41 個人住宅建設工事	2017年11月 ～ 2017年12月	彦根市教育委員会	古墳時代後期 奈良時代	掘立柱建物 土師器、須恵器	—
25	西今町字小橋か板 303 番ほか 宅地造成工事	2018年5月 ～ 2018年10月	彦根市教育委員会	弥生時代中期、 奈良時代～平安時代前期、 中世以降	方形周溝墓、掘立柱建物、柵、溝、井戸、土坑、 小穴 弥生土器、土師器、須恵器、石器、灰釉陶器、 石製品、木製品	14
26	西今町、小泉町 地先 彦根市スポーツ・文化交流センター 建設付帯工事	2018年9月 ～ 2019年1月	彦根市教育委員会	弥生時代後期、 古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、 平安時代、鎌倉時代	河道、掘立柱建物、溝、小穴 弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、 木製品	—
27	小泉町 市道改良工事	2019年4月 ～ 2019年6月	彦根市教育委員会	古墳時代	落ち込み状遺構、溝、土坑、小穴 土師器、須恵器	本書
28	小泉町 市道改良工事	2019年7月 ～ 2019年10月	彦根市教育委員会	弥生時代後期～終末期、 古墳時代	竪穴建物、掘立柱建物、溝(周溝)、土坑、小穴 土師器、須恵器、金属製品、石製品	本書
29	小泉町 市道改良工事	2020年4月 ～ 2020年6月	彦根市	奈良時代	掘立柱建物、溝、土坑、小穴 土師器	本書
30	小泉町地先 彦根市スポーツ・文化交流センター 建設付帯工事	2020年4月 ～ 2020年11月	彦根市	奈良時代、平安時代、鎌倉時代	竪穴建物、掘立柱建物、道路遺構、溝、土坑、 小穴 土師器、須恵器、山茶碗	—

文献

- 彦根市 2007『新修彦根市史』第1巻通史編 古代・中世
- 彦根市史考古部会 2004『『新修彦根市史』編さんにもなう彦根市内遺跡・遺物調査報告書
- 彦根市教育委員会 1982『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 彦根市教育委員会 1987『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 彦根市教育委員会 1991『福満遺跡第7次調査』彦根市埋蔵文化財調査報告書第20集
- 彦根市教育委員会 2008『福満遺跡X・XI』彦根市埋蔵文化財調査報告書第40集
- 彦根市教育委員会 2015『福満遺跡第12次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第59集
- 彦根市教育委員会 2015『平成25年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第63集
- 彦根市教育委員会 2019『平成26年度彦根市内遺跡発掘調査報告書2』彦根市埋蔵文化財調査報告書第76集
- 彦根市教育委員会 2016『福満遺跡第15次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第65集
- 彦根市教育委員会 2017『福満遺跡XVII』彦根市埋蔵文化財調査報告書第69集
- 彦根市教育委員会 2015『福満遺跡発掘調査現地説明会』
- 彦根市教育委員会 2018『福満遺跡(第23次)発掘調査説明会資料』
- 彦根市教育委員会 2020『福満遺跡第25次発掘調査報告書』

い人の出入りするような施設、また物資の集約とともにそれらを管理するような施設が周辺一帯に広がっていたと推定されている。

以上の状況から福満遺跡について、縄文時代後期・晩期については遺物だけではなく具体的な建物などの遺構の確認、弥生時代後期から古墳時代前期、そして後期にかけては東隣の品井戸遺跡も含めた集落・墓域の範囲の確認などが課題となろう。また、奈良・平安時代には第23次調査成果を中心に、当時の犬上郡衙である可能性が極めて高い竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡との関係をも展望に入れた、継続的な調査・研究が必要になると思われる。

#### 参考文献

- 滋賀県立安土城考古博物館 2006『扇状地の考古学』  
彦根市 1960『彦根市市』上冊  
彦根市 2002『彦根 明治の古地図』二  
彦根市 2007『新修彦根市史』第1巻通史編 古代・中世  
彦根市教育委員会 1982『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第4集  
彦根市教育委員会 1987『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第13集  
彦根市教育委員会 1991『福満遺跡第7次調査』彦根市埋蔵文化財調査報告第20集  
彦根市教育委員会 2008『福満遺跡X・XI』彦根市埋蔵文化財調査報告書第40集  
彦根市教育委員会 2015『福満遺跡第12次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第59集  
彦根市教育委員会 2015『福満遺跡発掘調査現地説明会』  
彦根市教育委員会 2015『平成25年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第63集  
彦根市教育委員会 2016『福満遺跡第15次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第65集  
彦根市教育委員会 2017『福満遺跡XVII』彦根市埋蔵文化財調査報告書第69集  
彦根市教育委員会 2018『福満遺跡（第23次）発掘調査説明会資料』  
彦根市教育委員会 2019『平成26年度彦根市内遺跡発掘調査報告書2』彦根市教育委員会文化財調査報告書第76集  
彦根市 2020『福満遺跡第25次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書82集  
琵琶湖流域研究会 2003『琵琶湖流域を読む 上 ―多様な河川世界へのガイドブック―』



## 第2章 第26次調査の成果

### 第1節 調査区の概要 (図5)

福満遺跡第26次調査は、彦根市スポーツ・文化交流センター（プロシードアリーナHIKONE）等建設付帯工事に伴い実施されたものである。前述したように、同施設本体部分に関しては、彦根市を調査主体、公益財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として調査（第23次調査）を実施し、付帯工事部分に関しては彦根市が直営で調査（第26次調査）を実施した。本書で取り扱う第26次調査は、付帯工事である防火水槽2基（第1・3調査区）とオイルタンク槽1基（第2調査区）の建設に伴うもので、各施設建設予定地全域である約66㎡を対象として3つの調査区を設定して実施した。図5に各調査区の位置を示したが、その位置について第23次調査区との関係を把握しやすいように、第23次調査現地説明会資料の平面図と合成する形で作成した。なお、合成図には第23次調査の現地説明会資料を使用した。第23次調査の正式な報告は、別報告があるためそちらを参照いただくとして、ここでは、あくまで第23次調査との大凡の位置を把握するためのものとしてご理解いただきたい。

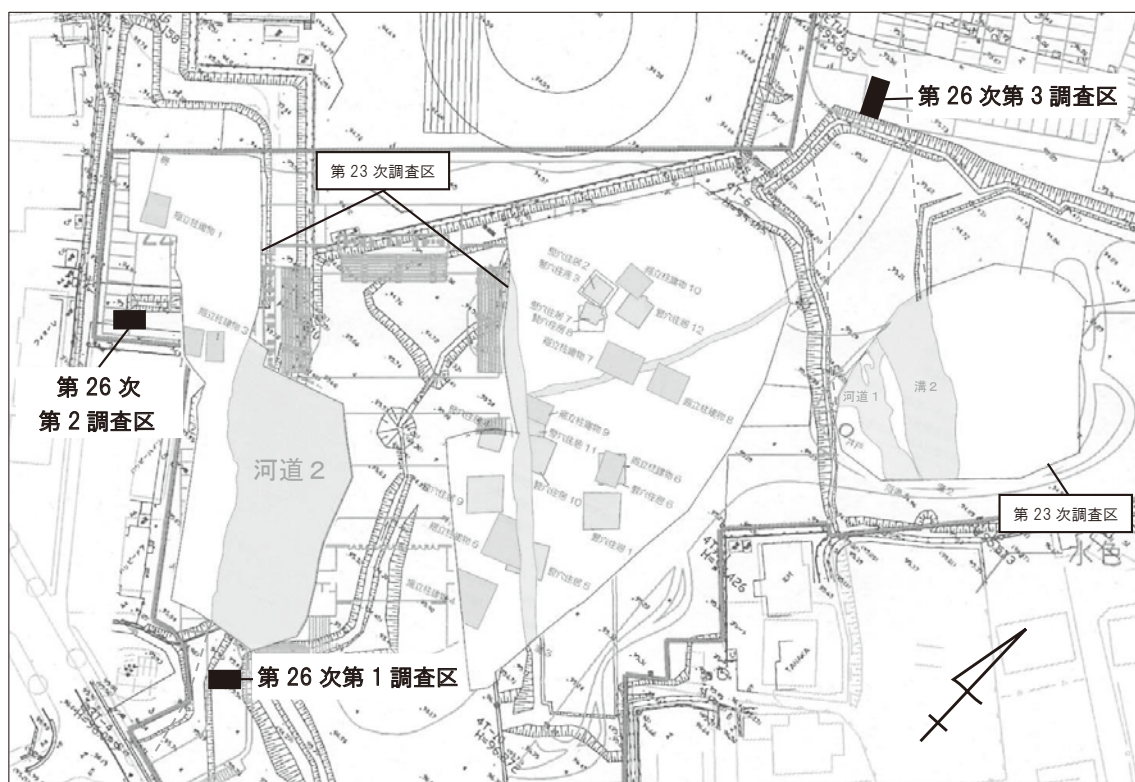


図5 福満遺跡第26次調査区位置図（『福満遺跡（第23次）発掘調査説明会資料』に追記）

### 第2節 検出遺構と遺物

#### (1) 第1調査区 (T1、図5～10、表3・4)

防火水槽建設に伴って設定したのが第1調査区である。第1調査区は、第23次調査区で



検出された河道2の南東延長線上に位置していることより、同様の河道の検出が想定された。調査の結果、地表面から約1.20 m掘り下げたところで、想定通り河道NR1を検出した。

なお、本調査区は、河道跡ということで湧水が激しく軟弱地盤であった。さらに、現代の流路を断ち切る形の調査区であるため、同流路からの湧水も激しい調査区であった。このように湧水が激しく軟弱地盤の調査区であったため、安全面を配慮して作業員による人力掘削は最低限に止め、バックホーによる掘削がメインにならざるを得なかった。そのため、河道の遺物は層位ごとの詳細な取り上げができず、河道埋土という大枠での取り上げとなった。

基本層位だが、I～V層に分類できる。I層：暗灰色礫（近現代造成土）、II層：灰オリーブ色粘質土（近現代造成土）、III層：暗緑灰色粘質土（遺物包含層）、IV層：暗緑灰色粘質

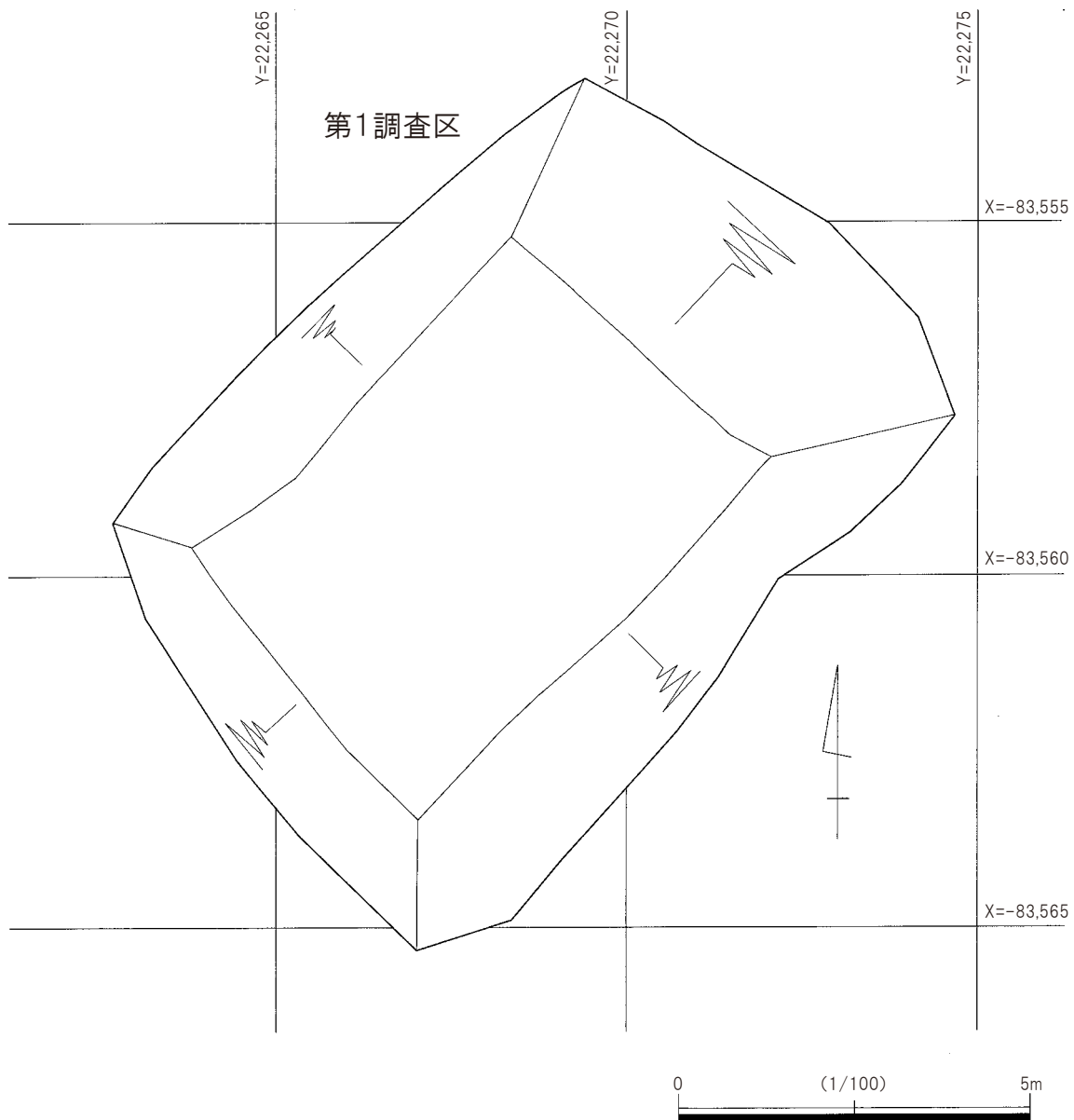


図6 第26次第1調査区遺構全図

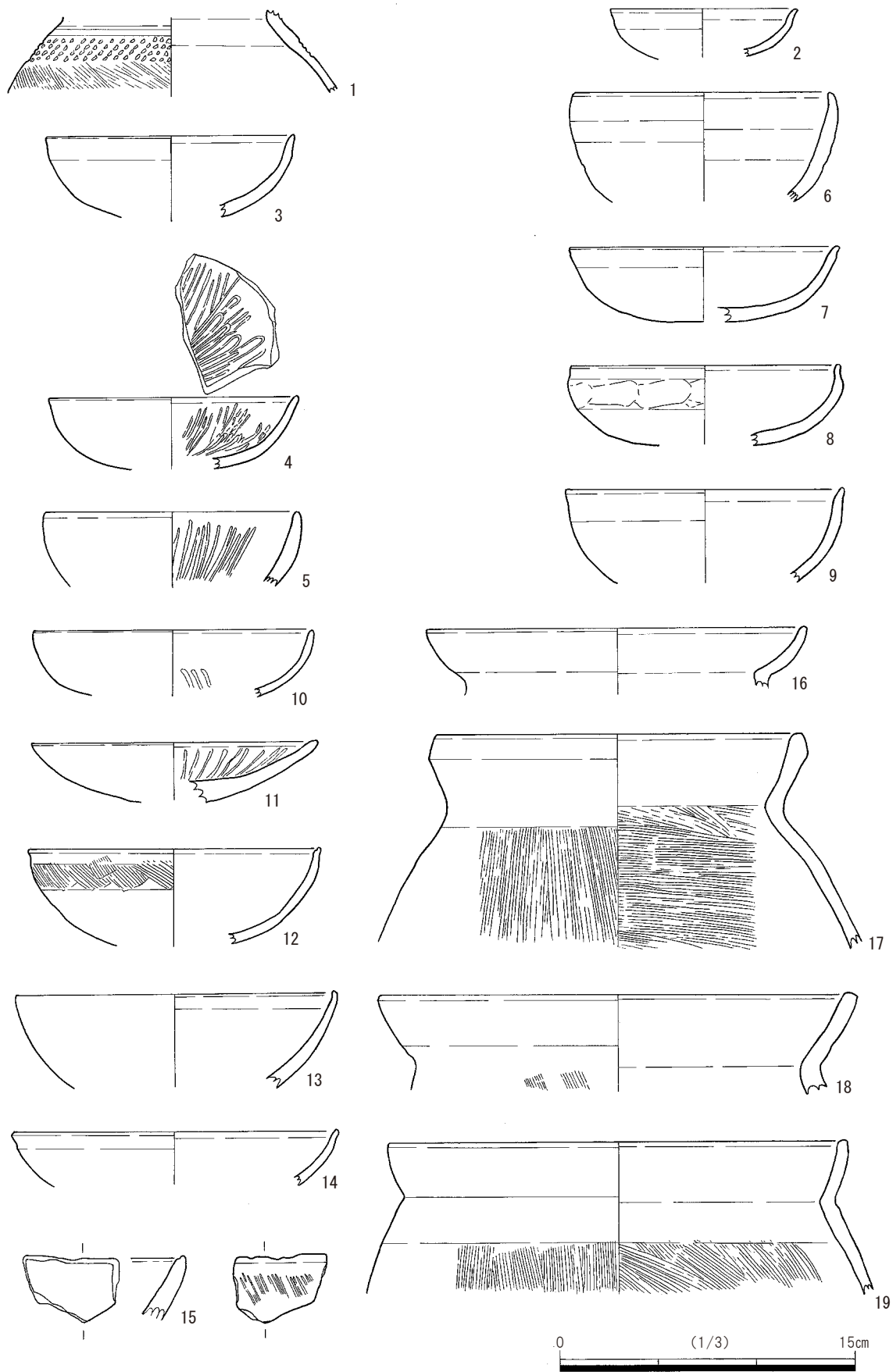


图7 第26次調査区出土遺物実測図(1)

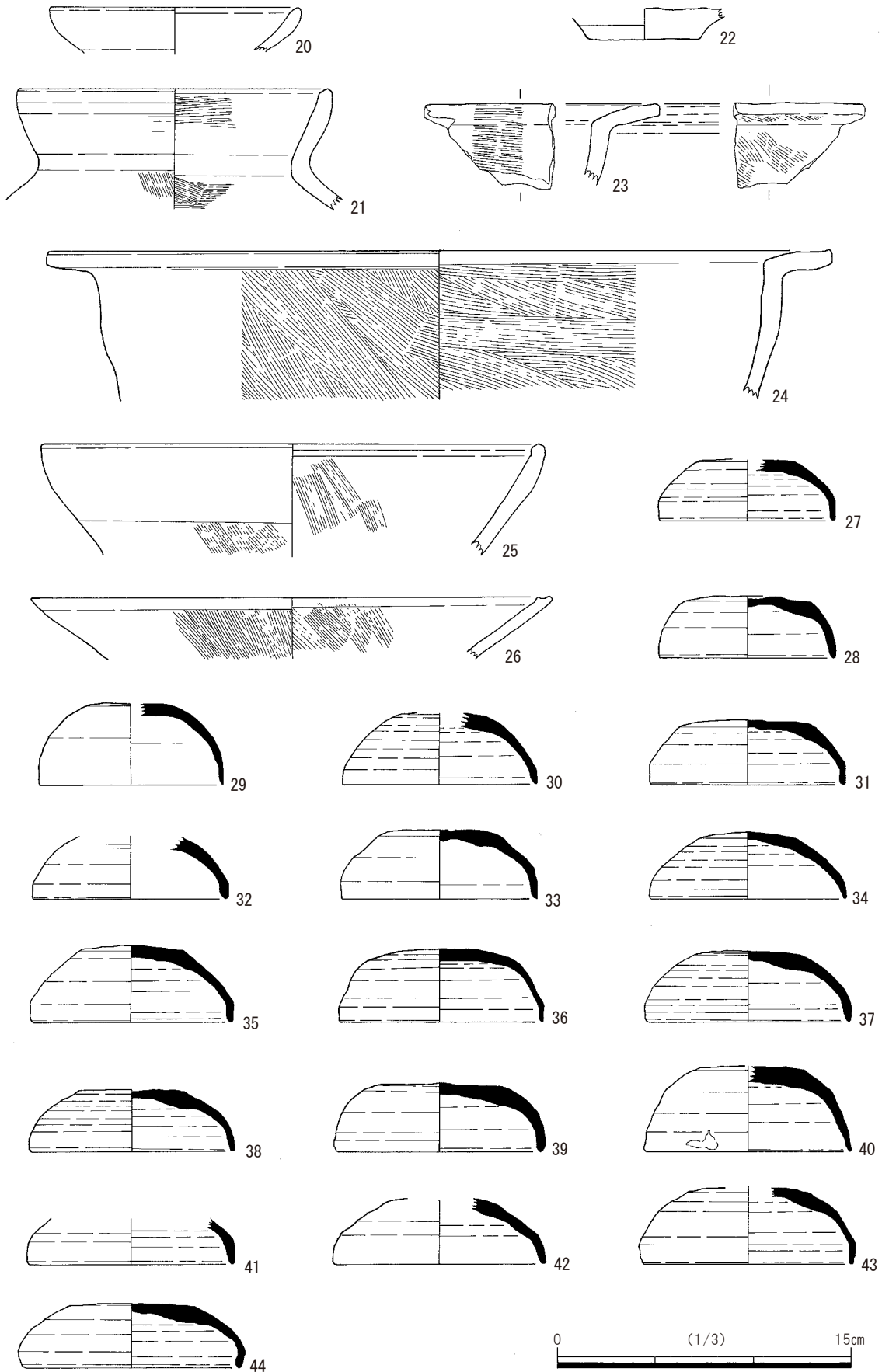


图8 第26次調査区出土遺物実測図(2)

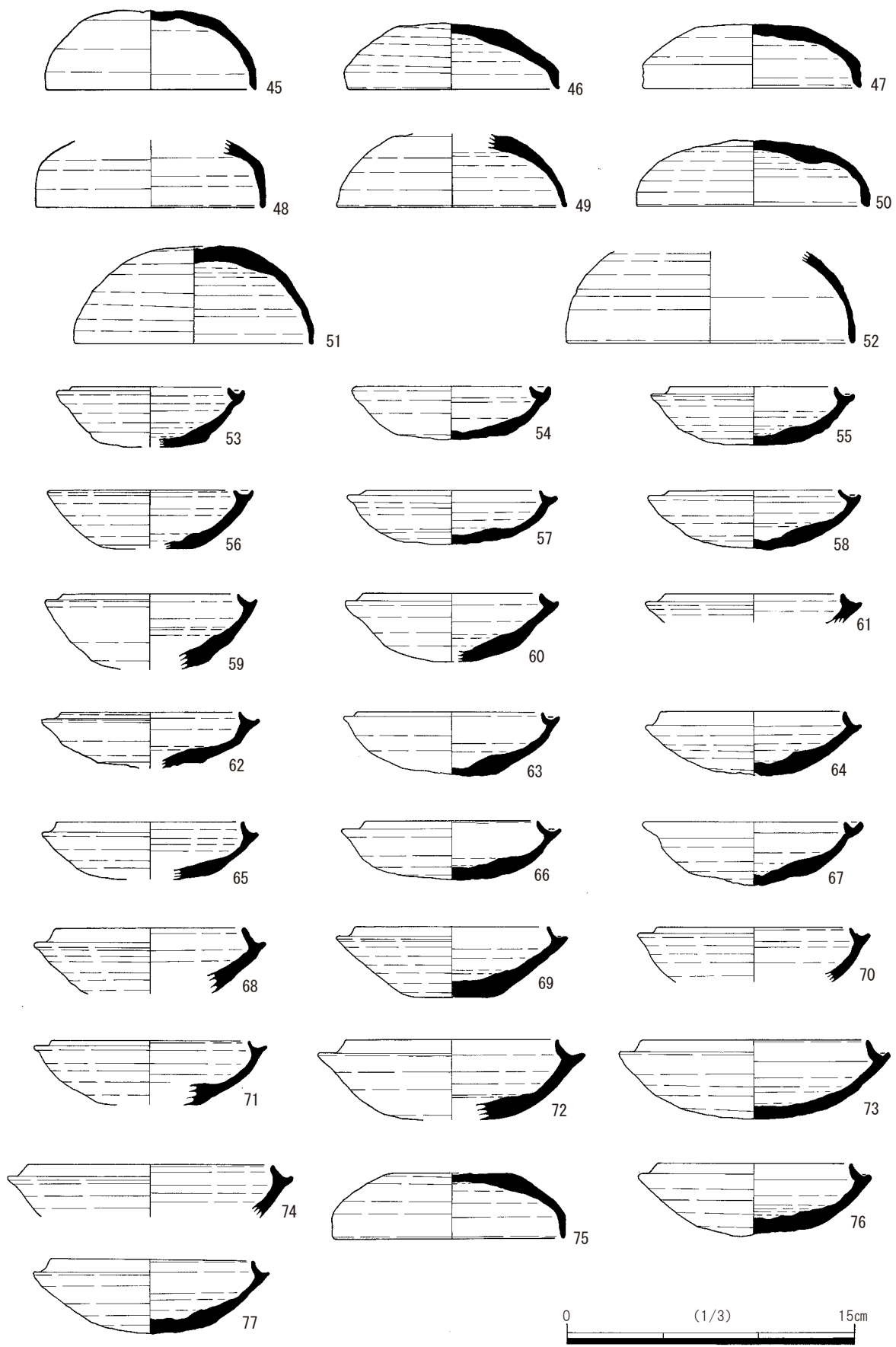


图9 第26次調査区出土遺物実測図(3)

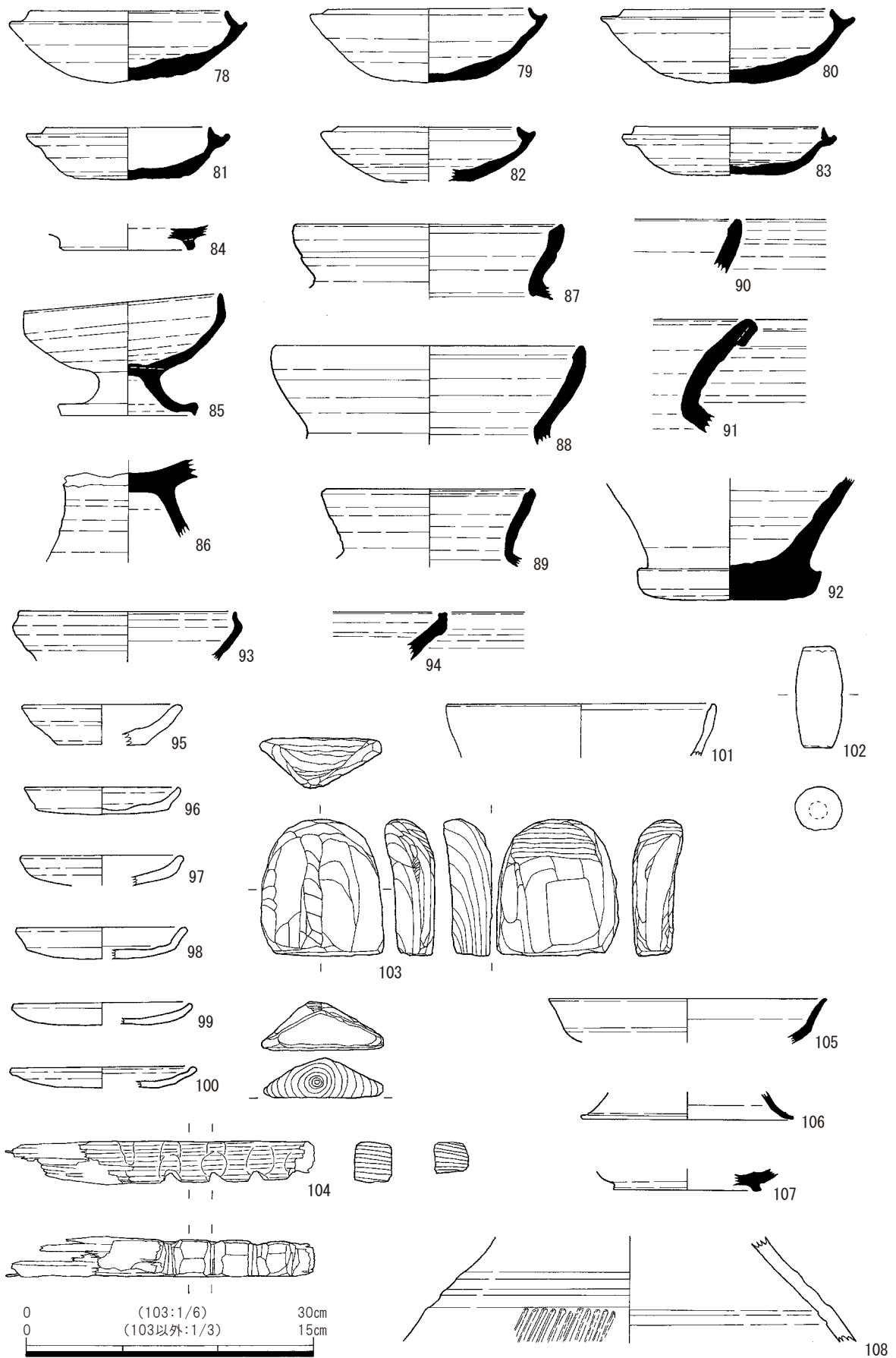


图 10 第 26 次調査区出土遺物実測図 (4)

土・砂礫互層（河道埋土）、V層：青灰色砂礫（河道底部）の5層を確認し、IV層上面で遺構（河道上面）を検出した。河道埋土であるIV層は、粘質土と砂礫層が幾層にも互層状に堆積しており、多量の遺物が包含されていたため、遺物を随時取り上げつつ河道底部まで掘削を行った。今回、完掘した河道底部の最深部は調査区の北東端にあたり、その地点での河道深度は約1.50mを測る。そこから南西側に向かうにつれて底部が上がっていく状況だが、河道の肩部は調査区で検出できなかったことより、調査区外の南西側に位置すると想定される。調査区北東端の河道最深部の標高は約92.17m、南西端の立ち上がった河道底部の標高は約93.60mを測る。

出土遺物は、弥生土器の壺（1）、土師器の坏（2・3・5・8～15）、鉢（6）・甕（16～21・25・26）・壺（22）・鍋（23・24）・皿（96～100）、黒色土器の椀（4・7・101）、須恵器の坏蓋（27～52・75）・坏身（53～74・76～84）・高坏（85・86）・甕（87・90・91）・壺（88・89・94）・鉢（92・93）、山茶椀（95）、土錘（102）、木製品の火きり臼（104）・不明品（103）が出土した。

多様な遺物が出土したが、7世紀代の遺物の比率が高く、土器もあまり摩耗を受けていないのが特徴である。また、あまり明瞭ではないが、土器の内面に75には煤、77～80には墨の付着が認められる。81・82の内面には明瞭に漆の付着が認められる。以上のことより、河道NR1の近隣に7世紀代の比較的拠点的な集落が存在した可能性が推測される。

## （2）第2調査区（T2、図5・10～12、表4、写真2）

オイルタンク槽建設に伴って設定したのが第2調査区である。調査の結果、地表面から約0.9m掘り下げたところで遺構面を検出した。

基本層位は、I～III層に分類できる。I層：灰黄褐色砂礫混じり粘質土（近現代造成土）、II層：暗灰黄色粘質土（旧耕作土）、III層：黄褐色粘質土（基盤層）の3層を確認し、III層上面で遺構を検出した。検出遺構は、掘立柱建物のほか、溝や土坑、小穴などであった。

掘立柱建物SB1は、調査区に限られているため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では、東西3間（約4.00m）以上×南北1間（約1.2m）以上の規模を持つ掘立柱建物で、建物の主軸はN-22°-Wの方位をとる。柱間は東西側では約1.20～1.60m、南北側では約1.20mで床面積や約4.80㎡以上を測る。柱穴は、SP6・SP8・SP11・SP12・SP18で構成され、



写真2 第2調査区南東壁（A-A'）土層断面

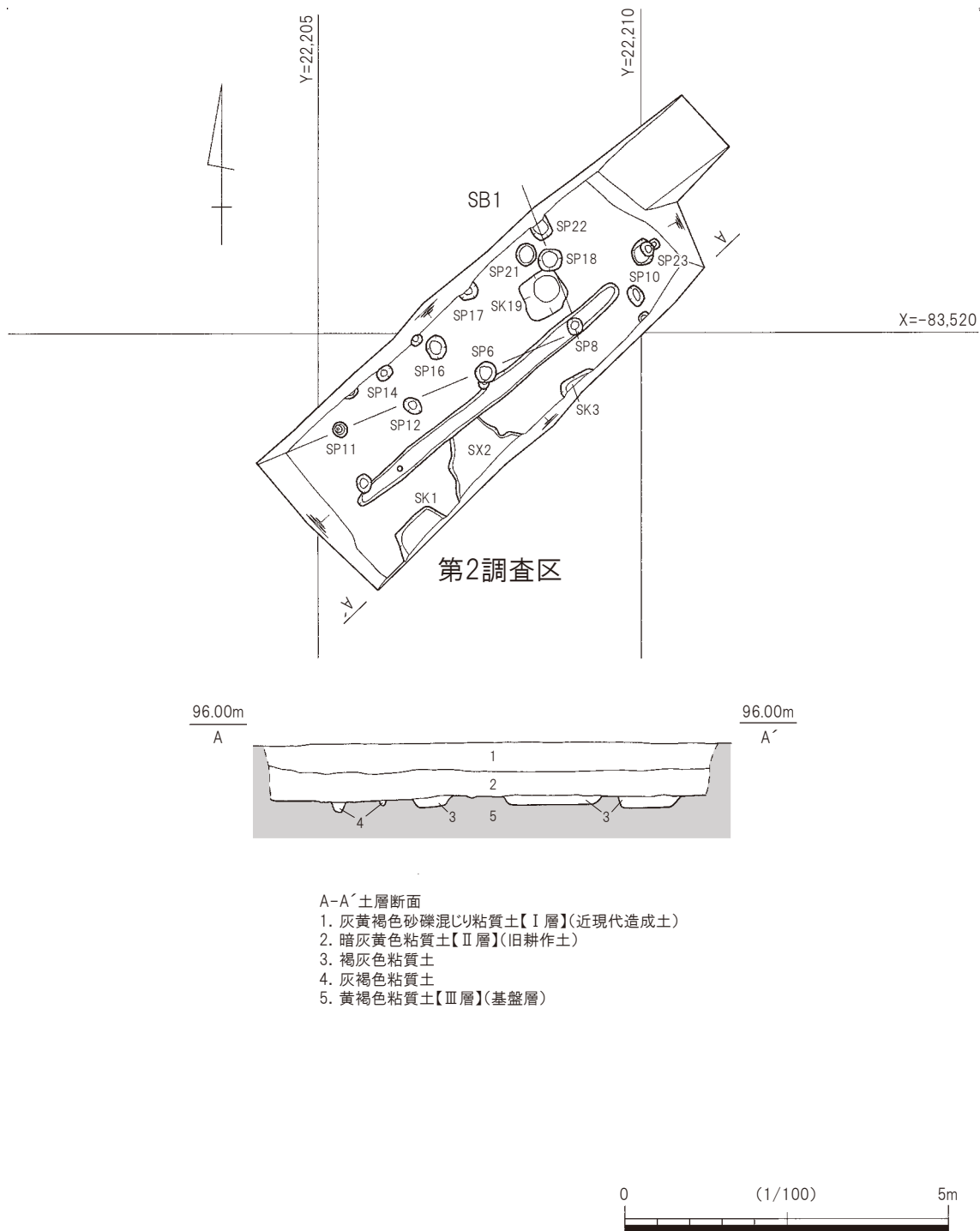


図 11 第 26 次第 2 調査区遺構全図・南東壁 (A-A') 土層断面図

掘り方の平面形は円形で、直径は約 0.25 ～ 0.39 m、深さは約 0.16 ～ 0.34 m を測る。遺物は、出土していない。

土坑 SK1 は、調査区の南端で検出された土坑である。調査区端にかかるため全体を検出できていない。残存部の長辺は約 0.90 m、短辺は約 0.37 m、深さは約 0.16 m を測る。埋土は褐灰色砂礫混じり粘質土の 1 層である。遺物は、須恵器の高坏 (105) が出土した。



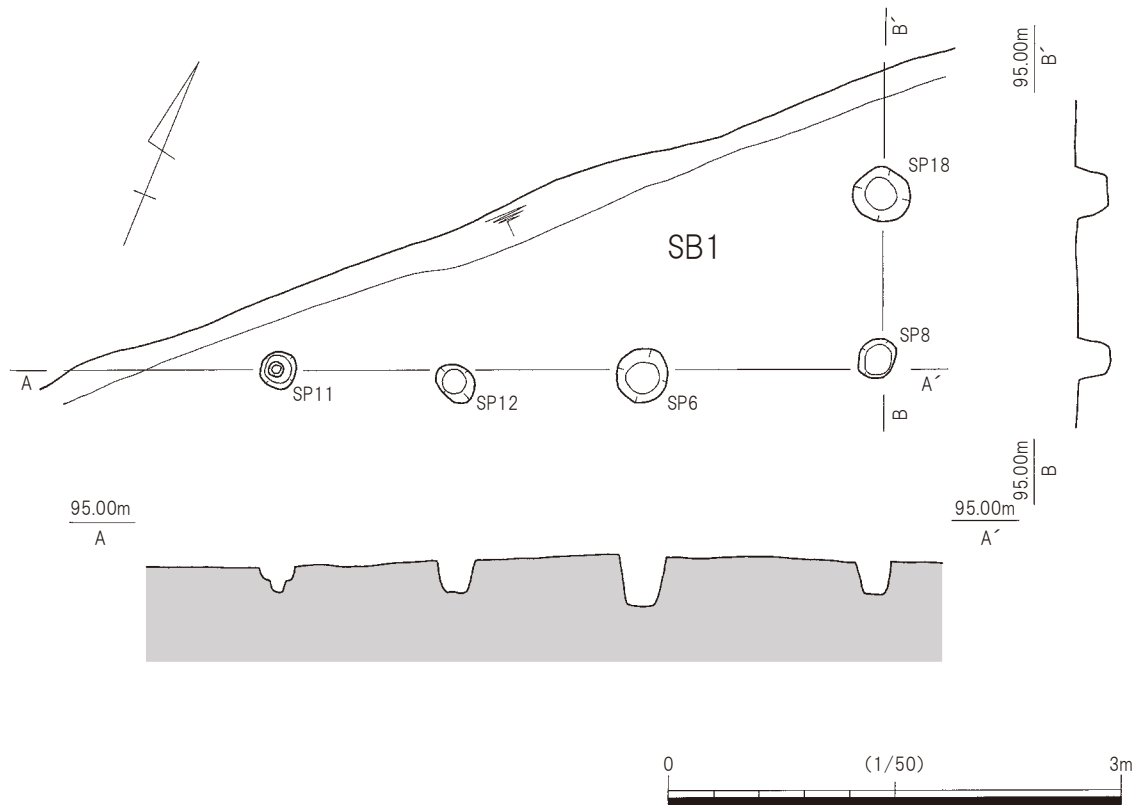


図 12 第 26 次第 2 調査区掘立柱建物 (SB1) 平面図・断面図

小穴 SP14 は、調査区の西側で検出された小穴である。長辺は約 0.26 m、短辺は約 0.22 m、深さは約 0.14 m の平面楕円形の小穴である。埋土は、褐灰色砂礫混じり粘質土の 1 層である。遺物は、須恵器の高坏 (106) が出土した。

### (3) 第 3 調査区 (T3、図 5・10・13、表 4、写真 3)

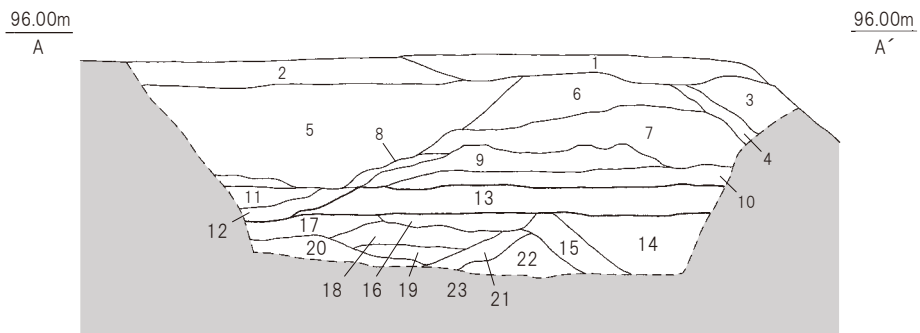
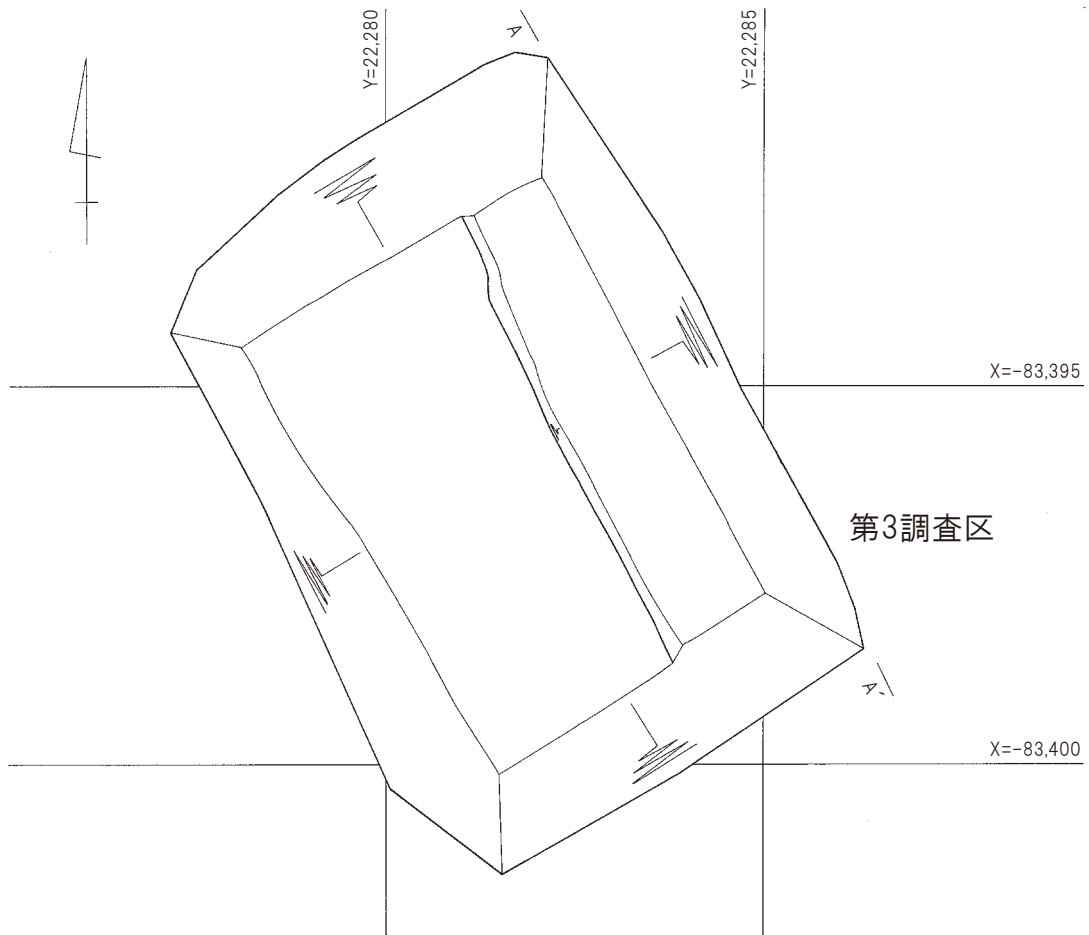
防火水槽建設に伴って設定したのが第 3 調査区である。第 3 調査区は、第 23 次調査区で検出された河道 1 または溝 2 の北西延長線上に位置していることより、同様の遺構の検出が想定された。調査の結果、地表面から約 170 cm 掘り下げたところで、想定通り河道 (または溝) NR1 を検出した。

基本層位は、I～IV 層に分類できる。I 層：第 1～8 層 (近現代造成土)、II 層：第 8～10 層、III 層：第 11～22 層 (河道埋土)、IV 層：第 23 層 (河道底部) の 4 層を確認し、III 層上



写真 3 第 3 調査区北東壁 (A-A') 土層断面





A-A'土層断面

- |                       |                   |                  |
|-----------------------|-------------------|------------------|
| 1. 黄灰色礫層(近現代造成土)      | 9. 灰色礫混じり粘質土(旧表土) | 17. 暗緑灰色細砂混じり粘質土 |
| 2. にぶい黄褐色礫(近現代造成土)    | 10. 灰色粘質土         | 18. 暗灰色粘土        |
| 3. にぶい黄褐色礫(近現代造成土)    | 11. オリーブ灰色粘質土     | 19. 暗青灰色砂礫       |
| 4. 灰色礫(近現代造成土)        | 12. 灰色粘質土         | 20. 青灰色砂         |
| 5. 灰黄褐色礫(近現代造成土)      | 13. 暗灰黄色粘質土       | 21. 暗オリーブ灰色礫     |
| 6. にぶい黄褐色礫(近現代造成土)    | 14. 灰色粘土          | 22. 緑灰色礫混じり砂     |
| 7. 黄灰色礫混じり粘質土(近現代造成土) | 15. オリーブ灰色粘質土     | 23. 暗緑灰色礫        |
| 8. 暗灰色礫混じり粘質土(近現代造成土) | 16. 暗青灰色砂礫        |                  |

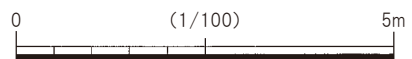


図 13 第 26 次第 3 調査区遺構全図・北東壁 (A-A') 土層断面図

表3 第26次調査区出土遺物一覧(1)

掲載No.	出土地点	器種	器形	部位	残存率	法量 (cm)				胎土	焼成	色調				備考
						口径	最大径	底部径	器高			外面		内面		
						(長さ)	(幅)	(厚さ)								
1	T1-NR1	弥生土器	壺	肩部～体部	10%以下	—	(16.8)	—	(4.3)	やや粗	硬質	灰白	10YR8/2	灰白	7.5YR8/2	胎土：直径5mm以下の砂粒を含む
2	T1-NR1	土師器	坏	口縁部～体部	10%以下	(9.4)	—	—	(2.5)	密	硬質	灰白	5Y7/1	淡黄橙	10YR8/3	
3	T1-NR1	土師器	坏	口縁部～体部	10%以下	(12.4)	—	—	(4.1)	緻密	硬質	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	5YR7/6	
4	T1-NR1	黒色土器	椀	口縁部～体部	20%	(12.6)	—	—	(3.7)	密	硬質	明褐灰	5YR7/2	淡黄橙	7.5YR8/3	内面に暗文
5	T1-NR1	土師器	坏	口縁部	10%以下	(13.1)	—	—	(3.8)	密	硬質	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい褐	7.5YR5/4	内面に暗文
6	T1-NR1	土師器	鉢	口縁部	10%以下	(13.6)	—	—	(5.5)	密	やや軟質	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR6/3	胎土：直径2mm以下の砂粒を少量含む
7	T1-NR1	黒色土器	椀	口縁部～体部	10%	(13.6)	—	—	(3.8)	密	硬質	灰白	10YR8/2	にぶい橙	5YR7/3	
8	T1-NR1	土師器	坏	口縁部～体部	20%	(13.4)	—	—	(4.0)	緻密	硬質	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	7.5YR8/6	
9	T1-NR1	土師器	坏	口縁部～体部	10%以下	(13.8)	—	—	(4.8)	密	硬質	灰白	2.5Y7/1	淡橙	5YR8/4	
10	T1-NR1	土師器	坏	口縁部～体部	10%以下	(14.0)	—	—	(3.4)	密	硬質	明褐灰	7.5YR7/2	明褐灰	7.5YR7/1	
11	T1-NR1	土師器	坏	口縁部～底部	10%以下	(14.4)	—	—	(3.0)	緻密	硬質	淡黄橙	7.5YR8/4	淡橙	5YR8/4	
12	T1-NR1	土師器	坏	口縁部～体部	20%	(14.6)	—	—	(4.8)	密	硬質	灰白	10YR8/2	灰白	7.5YR8/2	
13	T1-NR1	土師器	坏	口縁部～体部	20%	(16.0)	—	—	(4.9)	やや粗	軟質	にぶい橙	5YR7/4	灰白	7.5YR8/2	
14	T1-NR1	土師器	坏	口縁部～体部	10%以下	(16.2)	—	—	(2.8)	緻密	硬質	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	
15	T1-NR1	土師器	坏	口縁部	10%以下	(3.3)	(4.8)	(1.0)	—	密	硬質	灰白	10YR8/2	灰黄褐	10YR6/2	胎土：直径3mm以下の砂粒を微量含む
16	T1-NR1	土師器	壺	口縁部	10%以下	(28.8)	—	—	(3.3)	密	硬質	灰白	7.5YR8/1	灰白	7.5YR8/1	
17	T1-NR1	土師器	壺	口縁部～体部	10%以下	(18.6)	—	—	(10.8)	緻密	硬質	淡黄橙	7.5YR8/3	淡黄橙	7.5YR8/3	
18	T1-NR1	土師器	壺	口縁部	10%以下	(23.6)	—	—	(5.0)	緻密	硬質	灰白	10YR8/2	灰白	2.5Y7/1	
19	T1-NR1	土師器	壺	口縁部～体部	20%	(22.6)	—	—	(7.7)	密	やや硬質	灰白	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	胎土：直径2mm以下の砂粒を含む
20	T1-NR1	土師器	壺	口縁部	10%以下	(12.6)	—	—	(2.2)	密	硬質	橙	5YR6/6	にぶい橙	5YR7/4	
21	T1-NR1	土師器	壺	口縁部～頸部	10%以下	(16.0)	—	—	(6.1)	密	硬質	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	胎土：直径2mm以下の砂粒を少量含む
22	T1-NR1	土師器	壺	底部	10%以下	—	—	5.8	(1.6)	密	やや軟質	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/1	
23	T1-NR1	土師器	鍋	口縁部	10%以下	(4.2)	(6.7)	(1.0)	—	密	硬質	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR6/3	
24	T1-NR1	土師器	鍋	口縁部～体部	10%以下	(39.8)	—	—	(7.4)	緻密	硬質	明褐灰	5YR7/2	灰白	5YR8/2	
25	T1-NR1	土師器	壺	口縁部～体部	10%以下	(25.4)	—	—	(5.8)	緻密	やや硬質	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	
26	T1-NR1	土師器	壺	口縁部	10%以下	(26.2)	—	—	(3.0)	緻密	硬質	灰白	7.5YR8/2	灰白	5YR8/2	
27	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	25%	(9.0)	—	—	(3.1)	密	硬質	灰	N6/0	黄灰	2.5Y5/1	胎土：直径4mm以下の砂粒を少量含む
28	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	80%	(9.1)	—	—	3.2	密	硬質	灰	N6/0	灰	N5/0	胎土：直径3mm以下の砂粒を少量含む
29	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	20%	(9.4)	—	—	4.1	密	硬質	灰	N6/1	灰	N6/1	
30	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	25%	(9.9)	—	—	(5.6)	密	硬質	灰	N5/0	灰	N6/0	胎土：直径3mm以下の砂粒を少量含む
31	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	40%	(10.0)	—	—	3.3	密	硬質	黄灰	2.5Y6/1	暗灰黄	2.5Y5/2	胎土：直径5mm以下の砂粒を少量含む
32	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部	20%	(10.0)	—	—	(3.2)	密	硬質	黄灰	2.5Y6/1	暗灰黄	2.5Y4/2	
33	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	50%	(10.0)	—	—	3.5	密	硬質	暗青灰	5B4/1	灰	5Y6/1	
34	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	50%	(10.0)	—	—	3.5	密	硬質	灰	N5/0	灰	N6/0	
35	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	50%	(10.4)	—	—	3.9	密	硬質	灰白	2.5Y7/1	黄灰	2.5Y6/1	胎土：直径2mm以下の砂粒を含む
36	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	60%	(10.2)	—	—	3.7	緻密	硬質	暗青灰	5B4/1	青灰	5B5/1	内面付着物有。胎土：直径3mm以下の砂粒を微量含む
37	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	50%	(10.5)	—	—	3.6	密	硬質	灰	N5/0	灰	N6/0	
38	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	50%	(10.5)	—	—	3.1	密	硬質	灰	N7/0	灰	N6/0	胎土：直径2mm以下の炭化物を少量含む
39	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	80%	(10.8)	—	—	3.6	緻密	やや軟質	灰白	7.5Y7/1	灰	N7/0	胎土：直径1mm以下の炭化物を少量含む
40	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	40%	(10.6)	—	—	4.3	密	硬質	灰	10Y6/1	灰	7.5Y5/1	
41	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部	10%以下	(10.6)	—	—	(2.4)	密	硬質	黄灰	2.5Y6/1	暗灰黄	2.5Y4/2	
42	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	20%	(10.8)	—	—	(3.3)	密	硬質	青灰色	5B5/1	暗灰	5B6/1	
43	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	35%	(10.8)	—	—	(3.9)	密	硬質	灰	N5/0	灰	5Y4/1	
44	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	30%	(11.2)	—	—	3.3	密	硬質	灰	7.5Y5/1	灰	5Y5/1	
45	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	40%	(11.0)	—	—	4.1	密	硬質	灰	5Y5/1	にぶい褐色	7.5YR5/4	
46	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	90%	(11.1)	—	—	(3.4)	密	硬質	緑灰	10G5/1	青灰	5B5/1	胎土：直径3mm以下の砂粒を微量含む
47	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	50%	(11.4)	—	—	3.3	密	硬質	灰	N6/0	灰	N5/0	胎土：直径4mm以下の砂粒を微量含む
48	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	10%以下	(12.0)	—	—	(3.5)	密	硬質	灰	N6/0	灰白	N7/0	胎土：直径4mm以下の砂粒を微量含む
49	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	25%	(11.0)	—	—	(3.8)	密	硬質	灰	10Y5/1	黄灰	2.5Y5/1	
50	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	60%	(12.2)	—	—	3.4	密	やや軟質	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y6/2	胎土：直径2mm以下の砂粒を少量含む
51	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	50%	12.4	—	—	5.1	密	硬質	暗青灰	5B4/1	灰黄褐	10YR5/2	胎土：直径5mm以下の砂粒を少量含む
52	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	10%以下	(15.0)	—	—	(4.7)	密	硬質	灰	N4/0	灰	N5/0	胎土：直径5mm以下の砂粒を少量含む
53	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	25%	(9.8)	—	—	(3.1)	密	硬質	灰	N6/0	灰	7.5Y5/1	胎土：直径4mm以下の砂粒を少量含む
54	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	50%	(10.4)	—	—	2.7	密	硬質	灰	5Y6/1	灰	5Y5/1	

表 4 第 26 次調査区出土遺物一覧 (2)

掲載 No.	出土 地点	器種	器形	部位	残存率	法量 (cm)				胎土	焼成	色調				備考
						口径 (長さ)	最大径 (幅)	底部径 (厚さ)	器高			外面		内面		
55	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	25%	(10.6)	—	—	3.0	密	硬質	灰	N5/0	灰	10Y5/1	胎土：直径 4mm 以下の砂粒を少量含む
56	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	25%	(10.8)	—	(4.0)	3.0	密	硬質	灰	5Y5/1	黄灰	2.5Y4/1	胎土：直径 2mm 以下の砂粒を少量含む
57	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	95%	11.0	—	—	3.1	密	軟質	灰白	N7/0	灰	N6/0	胎土：直径 3mm 以下の砂粒を微量含む
58	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	80%	11.1	—	—	3.1	密	硬質	灰	5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	
59	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	30%	(11.1)	—	—	(3.9)	密	硬質	黄灰	2.5Y6/1	暗灰黄	2.5Y4/2	胎土：直径 2mm 以下の砂粒を少量含む
60	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～体部	50%	(11.2)	—	—	3.5	密	硬質	灰	7.5Y6/1	灰	7.5Y5/1	
61	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部	10%	(11.2)	—	—	(1.5)	密	硬質	灰	10Y6/1	灰	5Y6/1	
62	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	50%	(11.4)	—	—	(2.9)	密	硬質	灰	7.5Y6/1	灰黄	2.5Y6/2	
63	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	80%	11.2	—	—	3.3	密	硬質	灰	7.5Y5/1	灰	5Y5/1	
64	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	70%	11.4	—	—	3.3	密	硬質	灰	N4/0	灰	N5/0	胎土：直径 5mm 以下の砂粒を少量含む
65	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	30%	(11.3)	—	—	(3.0)	密	硬質	灰	N6/0	灰	5Y5/1	胎土：直径 3mm 以下の砂粒を少量含む
66	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	90%	11.4	—	—	3.1	密	硬質	灰	5Y6/1	灰	7.5Y6/1	胎土：直径 2mm 以下の砂粒、炭化物を少量含む
67	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	70%	11.5	—	—	3.3	密	軟質	灰	N7/0	灰	N4/0	胎土：直径 1mm 以下の砂粒を少量含む
68	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部	15%	(12.1)	—	—	(3.4)	密	硬質	灰	10Y5/1	灰	N6/0	
69	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	30%	(12.0)	—	(4.0)	3.7	密	硬質	灰	5Y5/1	灰	7.5Y5/1	胎土：直径 2mm 以下の砂粒を少量含む
70	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部	10%	(12.1)	—	—	(2.8)	密	硬質	黄灰	2.5Y6/1	暗灰黄	2.5Y5/2	胎土：直径 1mm 以下の砂粒を少量含む
71	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	15%	(12.1)	—	—	(3.4)	密	硬質	灰	N5/0	灰	10Y6/1	
72	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	25%	(14.0)	—	—	(4.2)	密	硬質	灰	7.5Y6/1	灰	10Y6/1	胎土：直径 2mm 以下の砂粒を少量含む
73	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	95%	(14.1)	—	—	(4.1)	密	硬質	灰	N5/0	灰	N6/0	胎土：直径 4mm 以下の砂粒を少量含む
74	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部	10%以下	(14.9)	—	—	(2.8)	密	硬質	灰	5Y5/1	灰	5Y4/1	胎土：直径 2mm 以下の砂粒を少量含む
75	T1-NR1	須恵器	坏蓋	口縁部～底部	50%	(12.1)	—	—	3.4	やや粗	硬質	灰	N4/0	灰	N4/0	内面にスス付着。胎土：直径 2mm 以下の砂粒を少量含む
76	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	90%	12.1	—	—	3.8	密	硬質	灰	N5/0	灰	N5/0	胎土：直径 3mm 以下の砂粒を微量含む
77	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	55%	12.3	—	—	3.9	密	硬質	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y4/1	内面に墨付着
78	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	50%	(12.4)	—	—	3.8	密	硬質	褐灰	10YR6/1	褐灰	10YR4/1	内面に墨付着
79	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	45%	(12.3)	—	—	3.8	密	硬質	黄灰	2.5Y6/1	黒褐	2.5Y3/1	内面に墨付着
80	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	45%	(13.4)	—	—	3.9	密	硬質	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y4/1	内面に墨付着
81	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	50%	(10.6)	—	—	2.7	密	硬質	灰	5Y6/1	灰白	5Y7/1	内面に漆付着
82	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	40%	(11.2)	—	—	(2.9)	密	硬質	灰白	N4/0	灰白	N5/0	内面に漆付着
83	T1-NR1	須恵器	坏身	口縁部～底部	40%	(11.2)	—	—	2.5	密	やや軟質	灰白	N7/0	灰白	N7/0	胎土：直径 3mm 以下の砂粒を微量含む
84	T1-NR1	須恵器	坏身	底部	10%以下	(7.1)	—	—	(1.3)	密	やや軟質	灰白	2.5Y7/1	灰白	10YR7/1	
85	T1-NR1	須恵器	高坏	口縁部～頸部	70%	10.3	—	—	6.3	密	硬質	灰	N5/0	灰	N6/0	胎土：直径 3mm 以下の砂粒を微量含む
86	T1-NR1	須恵器	高坏	基部～脚部	15%	—	—	—	(5.3)	密	やや軟質	灰白	10YR7/1	にぶい黄橙	10YR7/2	胎土：直径 3mm 以下の砂粒を少量含む
87	T1-NR1	須恵器	壺	口縁部～頸部	10%以下	(14.2)	—	—	(3.9)	密	硬質	灰	10Y6/1	灰	10Y5/1	
88	T1-NR1	須恵器	壺	口縁部～頸部	10%以下	(16.5)	—	—	(5.2)	密	硬質	灰	5Y4/1	灰	7.5Y4/1	
89	T1-NR1	須恵器	壺	口縁部～頸部	10%以下	(11.2)	—	—	(4.1)	密	硬質	灰	N6/0	灰	5Y5/1	
90	T1-NR1	須恵器	壺	口縁部	10%以下	—	—	—	(2.9)	密	硬質	灰	7.5Y4/1	灰	7.5Y4/1	
91	T1-NR1	須恵器	壺	口縁部～頸部	10%以下	—	—	—	(5.9)	密	硬質	黄灰	2.5Y6/1	灰黄	2.5Y6/2	胎土：直径 5mm 以下の砂粒を少量含む
92	T1-NR1	須恵器	鉢	底部	20%	—	—	(8.8)	(6.4)	密	硬質	灰白	N5/0	灰	N7/0	
93	T1-NR1	須恵器	鉢	口縁部	10%以下	(12.0)	—	—	(2.6)	密	硬質	灰	N5/0	灰	10Y5/1	
94	T1-NR1	須恵器	壺	口縁部	10%以下	—	—	—	(2.5)	密	硬質	灰	N5/0	灰	N5/0	
95	T1-NR1	山茶碗	小碗	口縁部～底部	20%	(8.4)	—	—	(4.7)	密	硬質	灰白	10YR7/1	黄灰	2.5Y4/1	内面に自然釉
96	T1-NR1	土師器	皿	口縁部～体部	50%	(8.0)	—	—	(1.5)	緻密	硬質	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	
97	T1-NR1	土師器	皿	口縁部	15%	(8.6)	—	—	(1.5)	密	やや軟質	灰黄	2.5Y7/2	灰白	2.5Y7/1	
98	T1-NR1	土師器	皿	口縁部～体部	10%以下	(8.8)	—	—	(1.5)	密	硬質	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	
99	T1-NR1	土師器	皿	口縁部～底部	10%	(9.2)	—	—	(1.1)	密	硬質	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	5YR7/6	
100	T1-NR1	土師器	皿	口縁部～体部	10%	(9.6)	—	—	(1.0)	緻密	硬質	灰白	7.5YR8/1	暗赤灰	2.5YR3/1	
101	T1-NR1	黒色土器	碗	口縁部	10%以下	(13.8)	—	—	(2.8)	緻密	硬質	灰	10YR8/2	黒	N15/0	
102	T1-NR1	土製品	土鏝	—	完形	5.2	2.4	2.3	—	密	硬質	灰	7.5Y4/1	—	—	
103	T1-NR1	木製品	不明	—	—	(14.4)	(12.9)	(5.2)	—	—	—	—	—	—	—	木材：不明
104	T1-NR1	木製品	火きり臼	—	—	(15.1)	(2.2)	(2.2)	—	—	—	—	—	—	—	木材：不明、木目：柃目
105	T2-SK1	須恵器	高坏	口縁部	10%以下	(14.6)	—	—	(2.3)	密	硬質	灰白	N7/0	明オリブ灰	2.5GY7/1	
106	T2-SP4	須恵器	高坏	脚部	10%以下	—	—	(11.2)	(1.5)	緻密	硬質	灰	N4/0	灰白	2.5GY7/0	
107	T3-NR1	土師器	坏身	不明	10%以下	—	(23.6)	—	(5.6)	緻密	やや軟質	灰白	5YR8/1	灰白	7.5YR8/2	

面で遺構（河道上面）を検出した。河道埋土と考えられるⅢ層は、粘質土と砂礫層が幾層にも互層状に堆積している。出土遺物は第1調査区に比べて少量であるが、土師器・須恵器などの細片が複数出土した。凶化に至ったのは須恵器の高坏（107）であった。第23次調査区の河道1ないし溝2につながる可能性がある。なお、第3調査区では河道の肩部などは検出されなかった。

#### （4）小結

第26次調査では、調査範囲が限られていたものの、河道や掘立柱建物、溝、土坑、小穴などの遺構・遺物が確認され、隣接で実施している第23次調査成果と補完しあう内容であった。特に、第1調査区の河道から出土した多量の7世紀代の遺物は、近隣での当該期の拠点的な集落の存在を想起させる資料である。

#### 参考文献

- 大崎哲人 1993「土師器甕の変遷とその背景 ―近江型土師器成立への諸段階―」『紀要』第6号財団法人滋賀県文化財保護協会
- 葛野泰樹・吉田秀則 1993「松原内湖遺跡出土の古墳時代後期以降の須恵器と土師器」『松原内湖遺跡発掘調査報告書I』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 田辺昭三 1981『須恵器体成』角川書店
- 彦根市教育委員会 2018『福満遺跡（第23次）発掘調査説明会資料』

## 第3章 第30次調査の成果

### 第1節 調査区の概要 (図14・15)

福満遺跡第30次調査は、彦根市スポーツ・文化交流センター（プロシードアリーナHIKONE）等建設付帯工事に伴い実施されたものである。具体的には雨水貯留槽建設工事と市道改良工事に伴い実施されたもので、それぞれ第1調査区（雨水貯留槽建設範囲）と第2調査区（市道改良工事に伴う拡幅範囲）とし本発掘調査を実施した。なお、同施設付帯工事である市道改良工事に伴う調査は、隣接地で第27～29次調査として3箇所実施（第27～29次調査は、本書とは別報告）している。以上のように、第27～30次調査は、調査原因を同じくする近隣の調査であったため、前述したとおりグリッド設定は共通で行い、調査の際もできる限り隣接調査地一帯での理解に努めた。

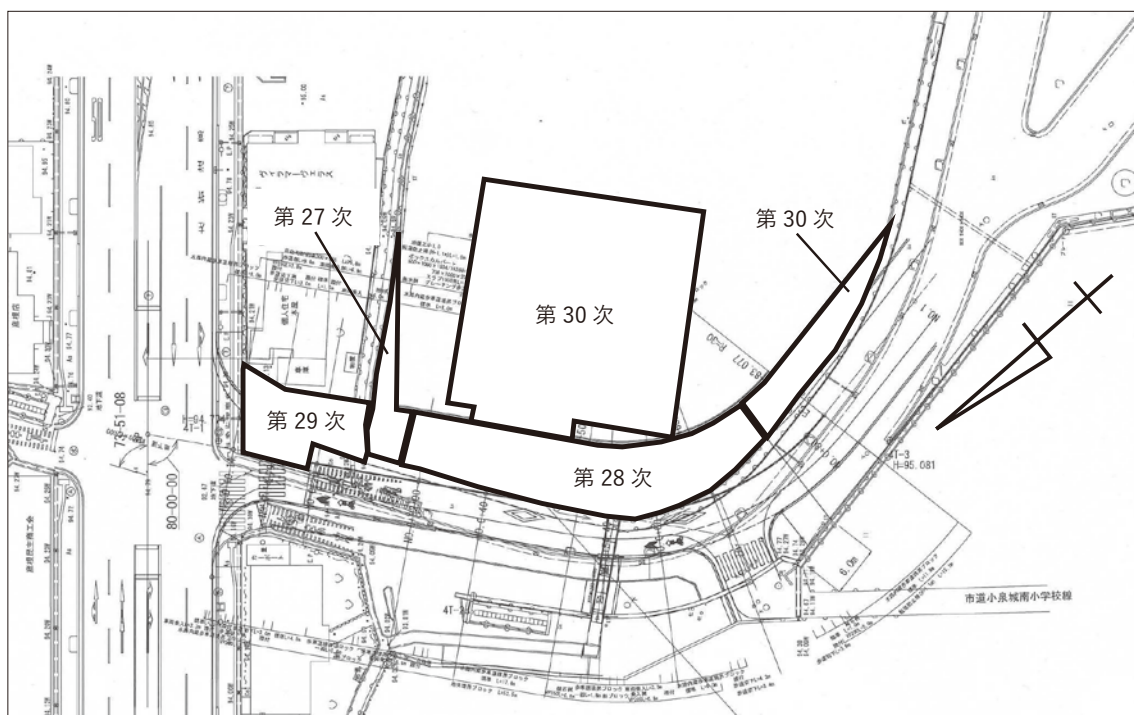


図14 福満遺跡第27～30次調査区位置図

### 第2節 基本土層 (図17・18・20、写真4～6)

福満遺跡第27～30次調査の基本層位は、Ⅰ～Ⅴ層に分類できる。Ⅰ層は褐灰色礫、Ⅱ層は灰黄褐色礫混じり粘質土で、Ⅲ層は暗緑灰色粘質土で、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層はいずれも近現代造成土である。Ⅳ層はオリーブ灰色粘質土で遺物包含層、Ⅴ層は黄褐色粘質土で基盤層である。Ⅴ層上面が遺構検出面となる。調査地一帯は、過去にバルブ関連の工場用地であったため、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層は、その工場用地とその後の土地利用の際のものと考えられる。



第27～30次の一連の調査区の地形は南東から北西に向かってわずかに下がっていることより、調査区南東側では、IV層がIII層造成時に削平を受けているため残存しておらず、地形が下がる北西側に向かうにつれて徐々に堆積が確認される状況である。

第30次第1調査区の基本層位は、上層から順にI～III・V層となっており、V層上面が遺構検出面となる。遺構検出面の標高は、調査区全域で約94.0mを測る。

第30次第2調査区の基本層位は、上層から順にI～V層となっており、V層上面が遺構検出面となる。遺構検出面の標高は、93.9mを測り、第1調査区と比較するとわずかに地形が下がっており、その為か本調査区ではIV層が確認される。



写真4 第1調査区北東壁(A-A')土層断面



写真5 第1調査区南東壁(B-B')土層断面



写真6 第2調査区東壁(A-A')土層断面

### 第3節 検出遺構と遺物

#### (1) 概要 (図15・16・19)

第30次調査は第1調査区と第2調査区にわけて実施し、両調査区全域で遺構・遺物が検出された。主なものは、竪穴建物、掘立柱建物、井戸、溝、土坑、小穴など集落関連遺構と道路遺構が確認された。ここでは遺構ごとに概要を述べる。

#### (2) 包含層出土遺物 (図32、表7)

基本土層でも触れたが、第2調査区は遺物包含層であるIV層の広がり確認された。包含層から出土した遺物は、弥生土器の器台(11)・有孔鉢(12)、土師器の甕(13・18・19)・皿(14)、須恵器の坏身(15～17)、灰釉陶器の椀(20)などで、時代・器種とも多種多様な様相である。

#### (3) 竪穴建物 (SH221)

##### SH221 (図21・32、表7)

第2調査区の北側で検出された竪穴建物である。調査区端にかかるため平面プラン全体を確認できたわけではないが、平面形は隅丸方形または長方形と推測される。およそ平面プランの半分ほどの検出となった。検出高は約93.9m、検出部での最大幅は約4.50m、深さは約0.13mを測る。建物の主軸は正南北方向を向いている。竪穴内部の施設であるが、支柱穴を2箇所確認しており、その平面形は円形と楕円形で、柱間は約2.75mを測る。また、竪穴内の北西隅には、2つの平面不整形の土坑を確認している。今回検出できた竪穴内部の範囲では炉やカマドが確認されなかったため、調査区外で未調査の東側に設置されていた可能性がある。また、壁際溝は検出されなかった。竪穴外については、竪穴と取り囲むように小穴が確認された。小穴は直径約0.1～0.3mと小規模なものだが、相互の間隔は非常に狭いため、垂木穴ないし垂木受けの小穴と推測される。竪穴の埋土は、1層が黒褐色粘質土、2層が黄灰色粘質土の2層である。掘立柱建物SB6を構成するSP219に切られている。

遺物は、土師器の甕(34～36)、須恵器の坏蓋(37)・坏身(33・38・39)・鉢(40)、土錘(41)が出土した。

遺構の時期は、出土遺物より概ね8世紀代と考える。

#### (4) 掘立柱建物 (SB1・SB2・SB3・SB4・SB5・SB6・SB7・SB8)

##### SB1 (図22・31、表5～7)

第1調査区の西端で検出された掘立柱建物である。調査区端にかかるため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では東西3間(約5.22m)以上×南北2間(約4.92m)の規模を持つ総柱建物で、建物の主軸はN-2°-Eの方位をとり、ほぼ正南北方向を向いている。柱間は東西側では約1.74m、南北側では約1.96mで床面積は

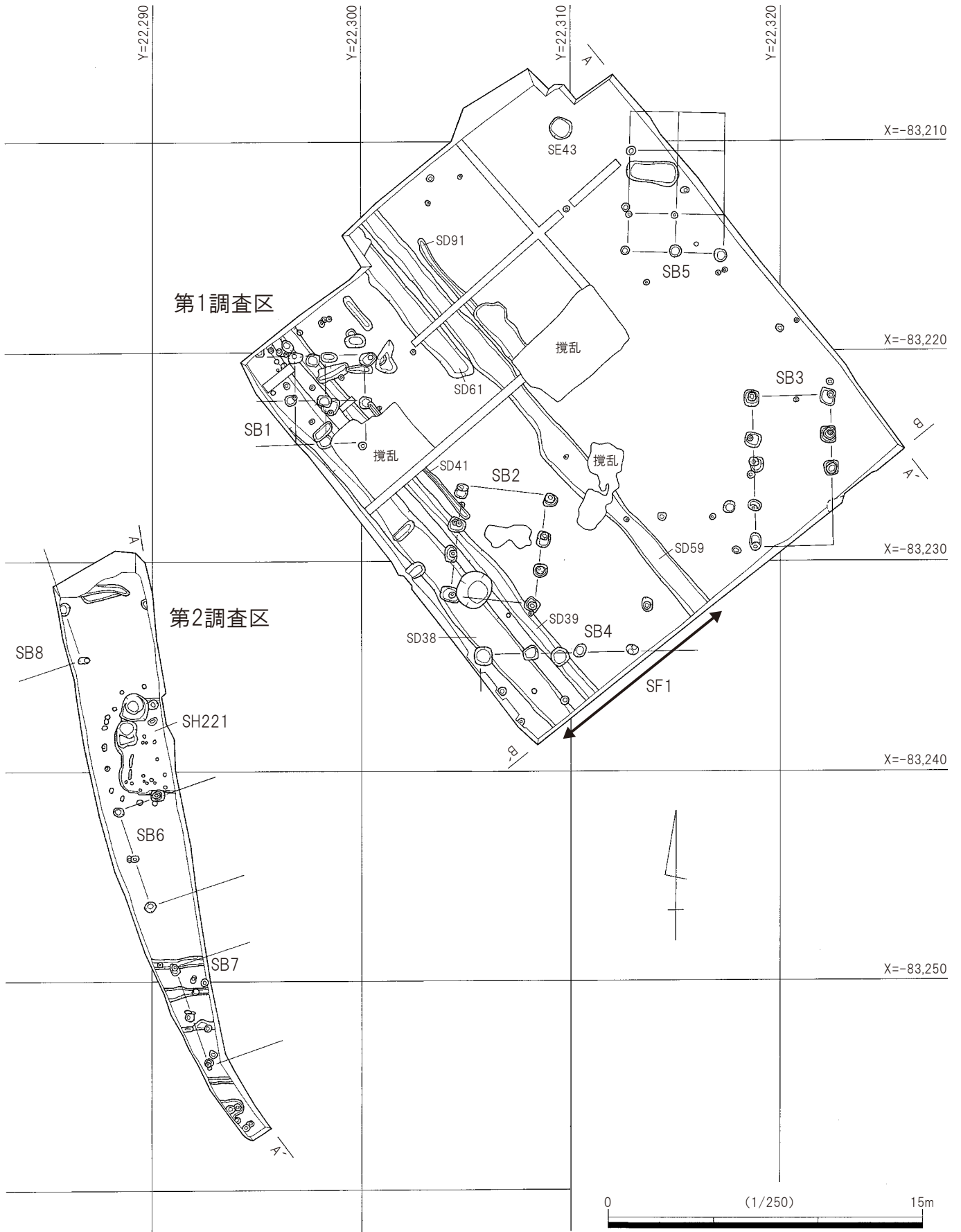


図 15 第 30 次第 1・2 調査区遺構全図



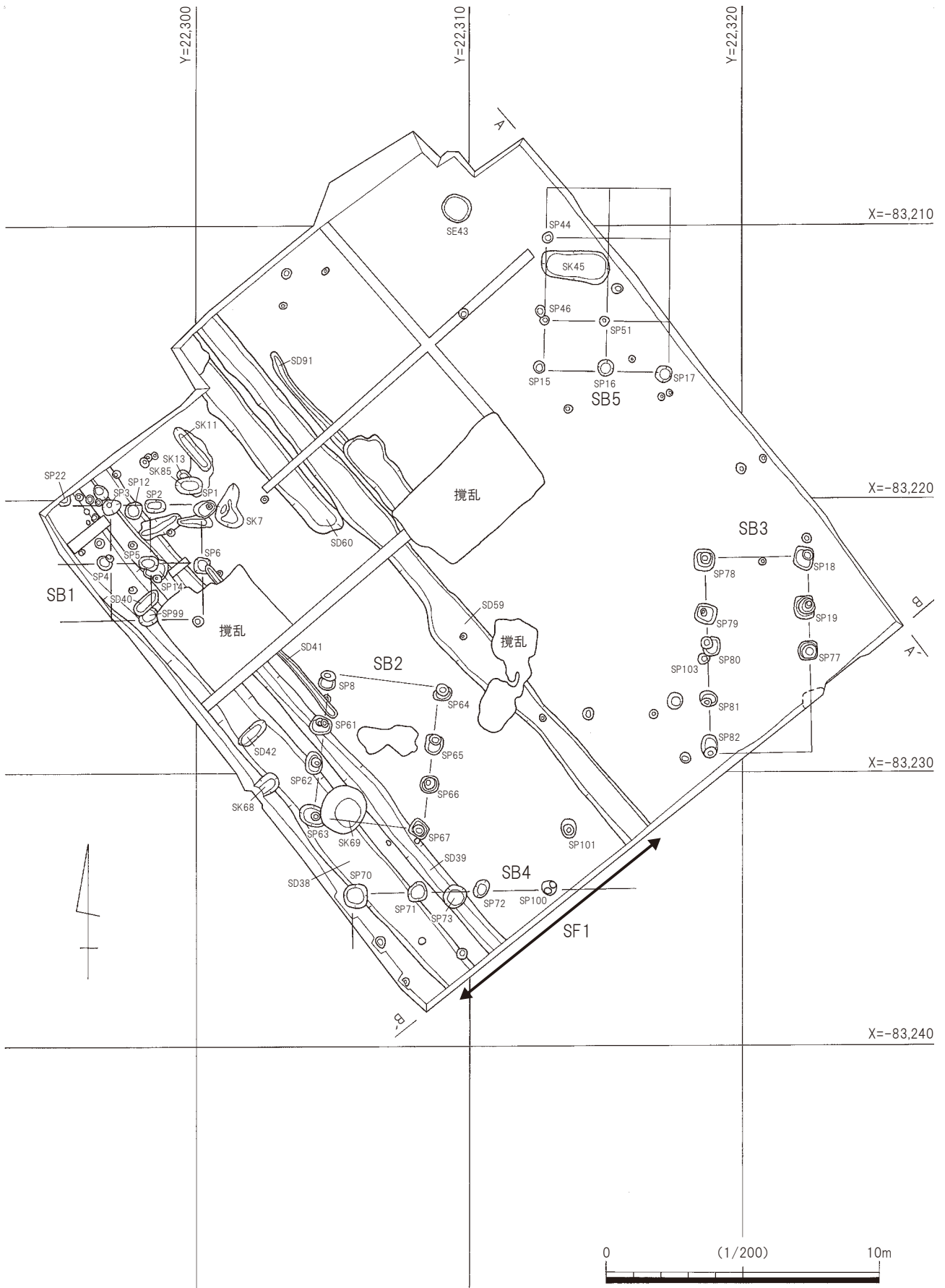
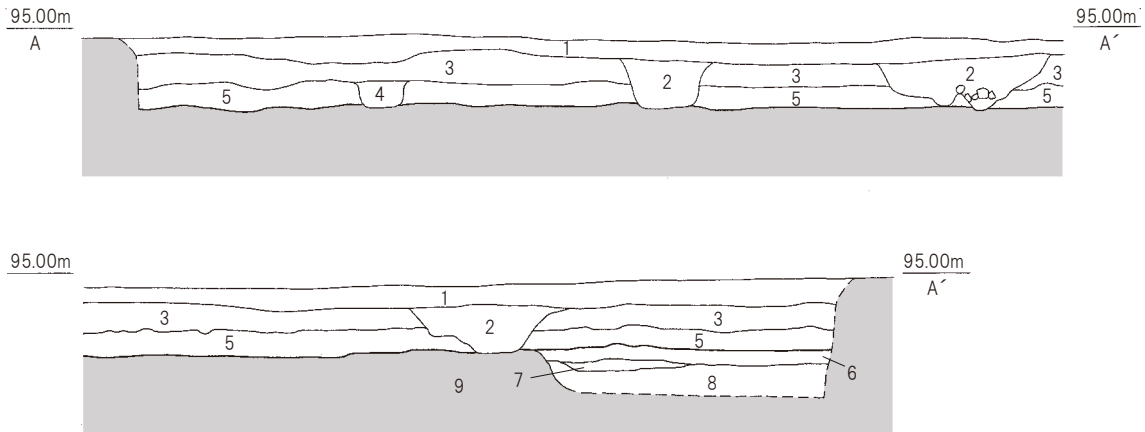


图 16 第 30 次第 1 調査区遺構全図



- A-A' 土層断面
1. 褐灰色礫【I層】(近現代造成土)
  2. 灰黄褐色砂礫混じり粘質土(近現代攪乱)
  3. 灰黄褐色礫混じり粘質土【II層】(近現代造成土)
  4. オリーブ褐色砂礫混じり粘質土(近現代攪乱)
  5. 暗緑灰色粘質土【III層】(造成土)
  6. 灰オリーブ色粘質土
  7. 黄褐色粘質土
  8. にぶい黄褐色粘質土
  9. 黄褐色粘質土【V層】(基盤層)



図 17 第 30 次第 1 調査区北東壁 (A-A') 土層断面図

約 20.46 m<sup>2</sup>以上を測る。柱穴は、SP1・SP2・SP3・SP4・SP5・SP6・SP20・SP99 で構成され、掘り方の平面形は隅丸方形や楕円形で、1 辺は約 0.45 ～ 0.89 m、深さは約 0.24 ～ 0.51 m を測る。SP3 で確認される柱痕は平面円形で直径約 0.20 m を測る。道路遺構 SF1 を構成する SD38・SD39 を切っている。

遺物は、SP6 から須恵器の坏身 (2)、SP10 から同じく須恵器の坏身 (10) が出土している。

遺構の時期だが、SB1 を構成する柱穴から時期を判別できる遺物の出土がないため、遺物からの時期は比定し得ないが、SB2・SB3・SB4・SB5・SH221 と建物の主軸方位がほぼ同じため、概ね近い時期と推定される。また、遺構の切り合い関係より、道路遺構 SF1 廃絶後であることは確かである。

#### SB2 (図 23、表 5・6)

第 1 調査区の南側で検出された掘立柱建物である。東西 1 間 (約 4.20 m) × 南北 3 間 (約 5.20 m) の規模を持つ掘立柱建物で、建物の主軸は N - 6° - E の方位をとり、ほぼ正南北方向を向いている。柱間は東西側では約 4.20 m、南北側では約 1.60 ～ 1.80 m で床面積は約 21.84 m<sup>2</sup> を測る。柱穴は、SP8・SP61・SP62・SP63・SP64・SP65・SP66・SP67 で構成され、

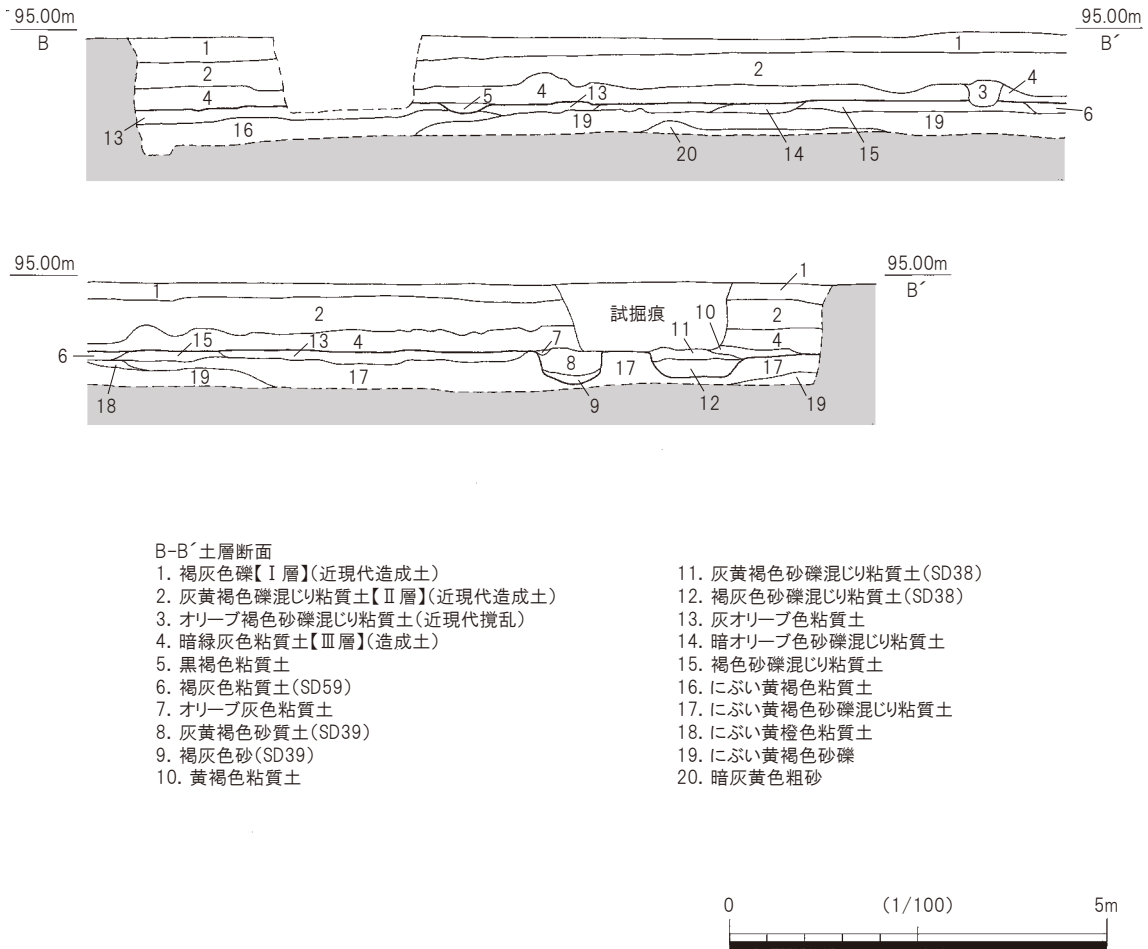


図 18 第 30 次第 1 調査区南東壁 (B-B') 土層断面図

掘り方の平面形は隅丸方形で、1 辺は約 0.51 ～ 0.91 m、深さは約 0.21 ～ 0.53 m を測る。道路遺構 SF1 を構成する SD38・SD39 を切っている。

時期を特定できる遺物の出土がないため、遺物からの時期を比定し得ないが、SB1・SB3・SB4・SB5・SH221 と建物の主軸方位がほぼ同じため、概ね近い時期と推定される。また、遺構の切り合い関係より道路遺構 SF1 廃絶後であることは確かである。

### SB3 (図 24・31、表 5～7)

第 1 調査区の東端で検出された掘立柱建物である。東西 1 間(約 3.76 m)×南北 4 間(7.12 m)以上の規模を持つ掘立柱建物で、建物の主軸は N-2°-W の方位をとり、ほぼ正南北方向を向いている。柱間は東西側では約 3.76 m、南北側では約 1.68 ～ 1.88 m で床面積は約 26.77 m<sup>2</sup> 以上を測る。柱穴は、SP18・SP19・SP77・SP78・SP79・SP81・SP82・SP103 で構成され、掘り方の平面形は隅丸方形と円形で、1 辺は約 0.35 ～ 0.84 m、深さは約 0.17 ～ 0.56 m を測る。

遺物は、SP78 から須恵器の坏身(8)が出土している。8 は 7 世紀代の遺物と考えられるが、遺物は柱廃絶後の混入土からの出土であるため混入の可能性も否定できない。やはり、

SB1・SB2・SB4・SB5・SH221などの主軸方向が同じ建物群との関係性で考える必要がある。

SB4 (図 25・31、表 5～7)

第1調査区の南端で検出された掘立柱建物である。調査区端にかかるため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では東西3間(約7.20m)以上×南北1間以上の規模を持つ掘立柱建物で、建物の主軸はN-3°-Wの方位をとり、ほぼ正南北方向を向いている。柱間は東西側では約2.20～2.50mを測る。柱穴は、SP70・SP71・SP72・SP100で構成され、掘り方の平面形は隅丸方形で、1辺は約0.46～0.84m、深さは

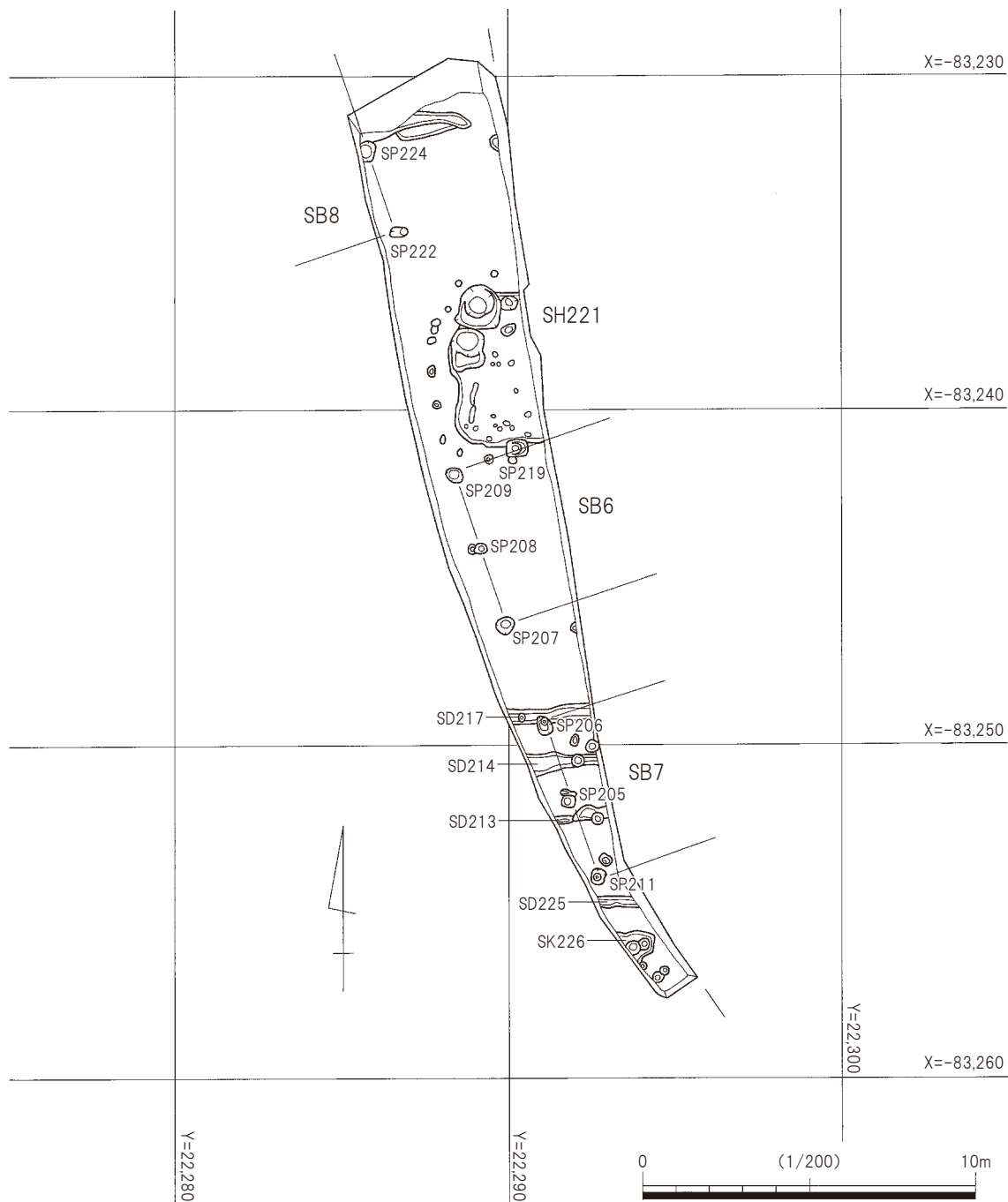


図 19 第 30 次第 2 調査区遺構全図

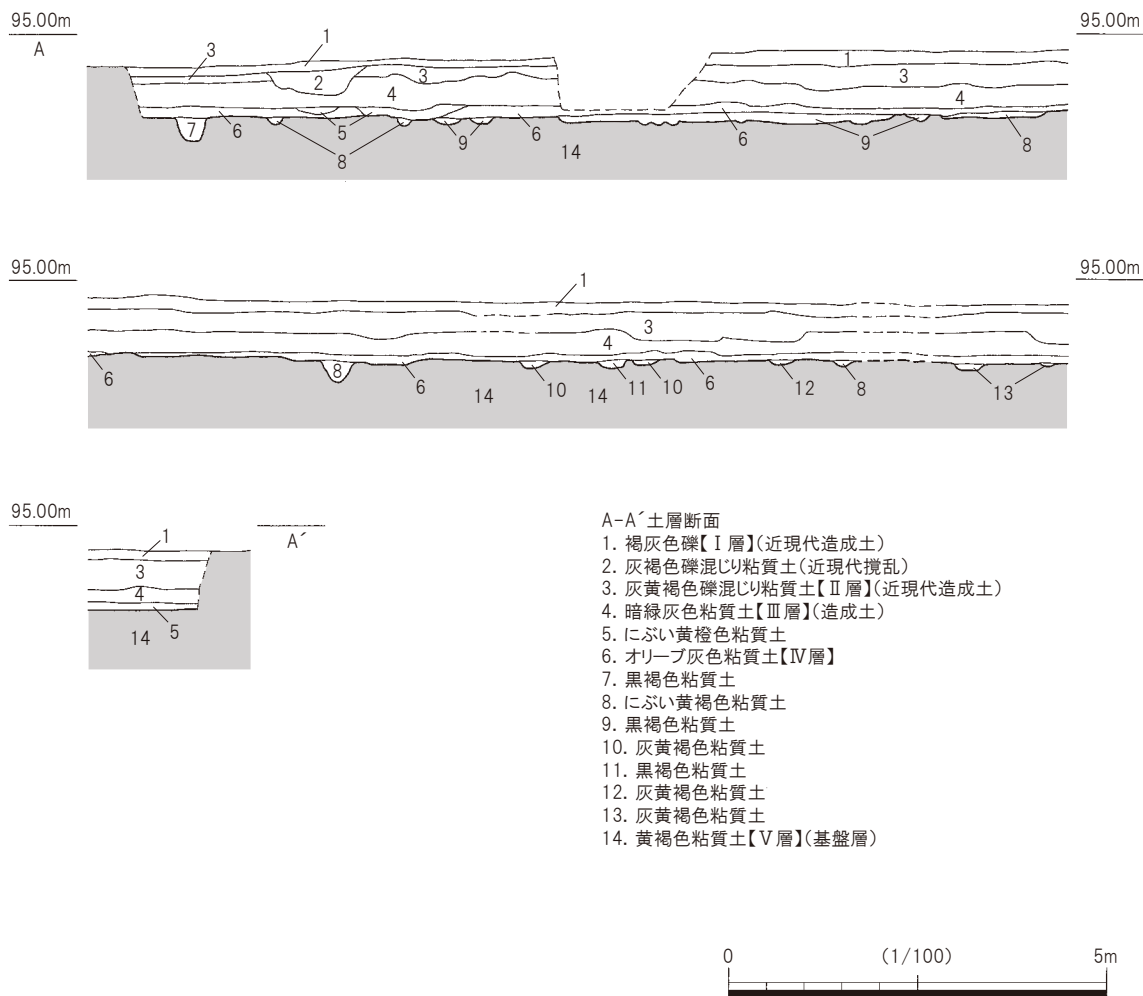


図 20 第 30 次第 2 調査区北東壁 (A-A') 土層断面図

約 0.14 ~ 0.40 m を測る。道路遺構 SF1 を構成する SD38・SD39 を切っている。

遺物は、SP70 から山茶碗の碗 (7) が出土している。

遺構の時期だが、SB3 と同様、SB1・SB2・SB5・SH221 などの主軸方向が同じ建物群との関係性で考える必要がある。遺構の切り合い関係より道路遺構 SF1 廃絶後であることは確かである。

### SB5 (図 26、表 5・6)

第 1 調査区の北端で検出された掘立柱建物である。調査区端にかかるため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では東西 2 間 (約 4.60 m) 以上×南北 2 間 (約 4.70 m) 以上の規模を持つ掘立柱建物で、建物の主軸は N-2°-E の方位をとり、ほぼ正南北方向を向いている。柱間は東西側では約 2.30 m、南北側では約 1.90 ~ 2.80 m で床面積は約 21.62 m<sup>2</sup> を測る。柱穴は、SP15・SP16・SP17・SP44・SP46・SP51 で構成され、掘り方の平面形は隅丸方形と円形で、1 辺は約 0.31 ~ 0.56 m、深さは約 0.10 ~ 0.29 m を測る。掘立柱建物の内部に位置する土坑 SK45 は、平面隅丸方形で、長辺は約 2.35 m、短辺は約 1.10 m、深さは約 0.19 m を測り、主軸もほぼ正南北方向を向いている。遺構の

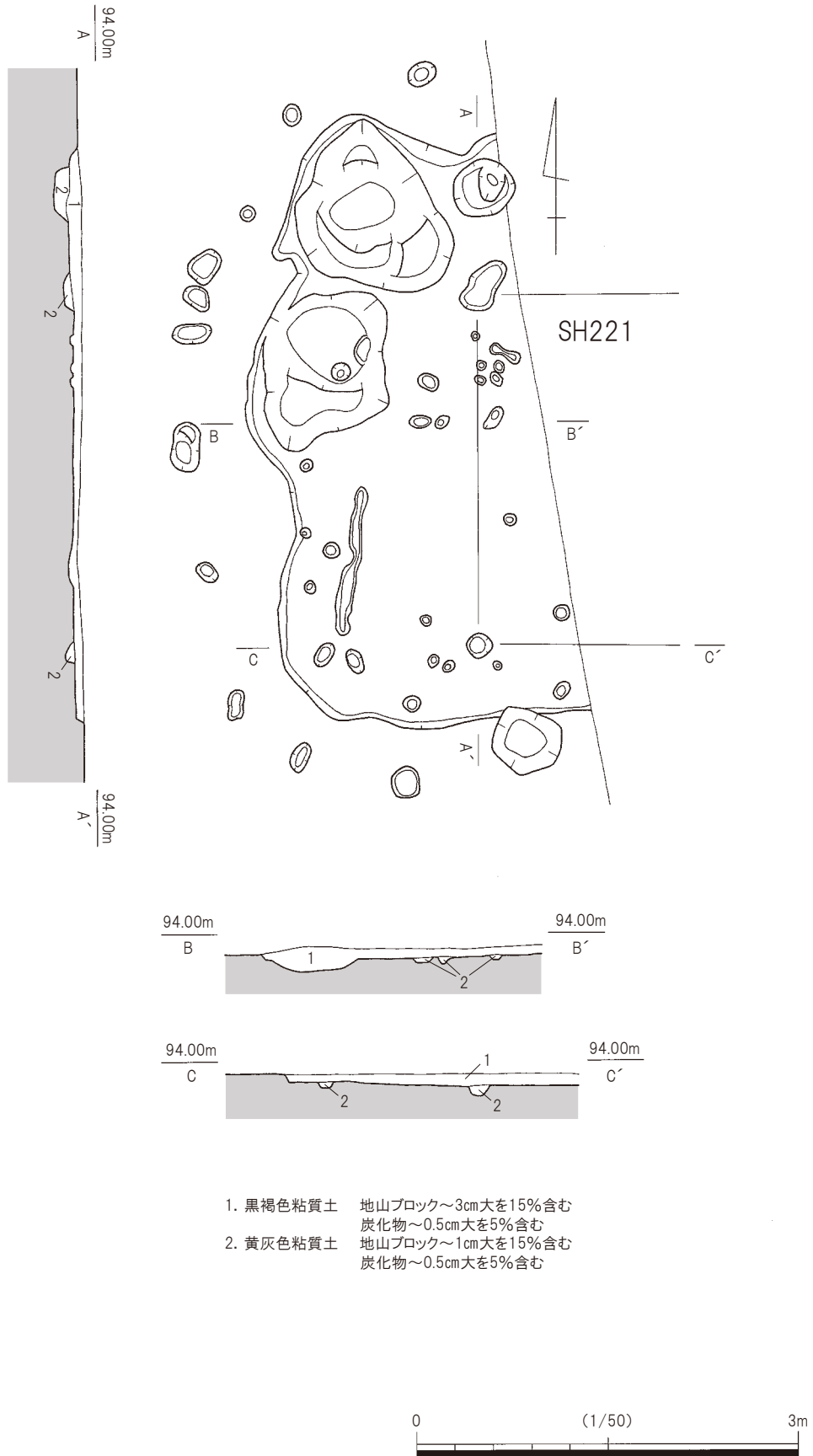


図 21 第 30 次第 2 調査区竪穴建物 (SH221) 平面図・断面図

位置や主軸方向を同じくする点などより、SB5 と一体のものである可能性が高いと考える。すなわち、SB5 は SK45 と一体の竪穴付掘立柱建物の可能性がある。

遺物は、柱穴からは出土していないが、SK45 からは土師器の細片が出土している。時期を特定できる遺物の出土がないため、遺物からの時期を比定し得ないが、SB1・SB2・SB3・SB4・SH221 と建物の主軸方位がほぼ同じため、概ね近い時期と推定される。

#### SB6 (図 27・32、表 5～7)

第 2 調査区の中央付近で検出された掘立柱建物である。調査区端にかかるため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では東西 1 間 (約 1.90 m) 以上×南北 2 間 (約 4.80 m) の規模を持つ掘立柱建物で、建物の主軸は N-20°-W の方位をとる。柱間は東西側では約 1.90 m、南北側では約 2.40 m で床面積は約 9.12 m<sup>2</sup> 以上を測る。柱穴は、SP207・SP208・SP209・SP219 で構成され、掘り方の平面形は楕円形と円形で、1 辺は約 0.36～0.55 m を測る。SP219 が竪穴建物 SH221 を切っている。

遺物は SP209 から黒色土器の椀 (27)、山茶椀の椀 (28・29)、土師器の坏 (30) が出土している。遺物は、概ね 12 世紀代と考えられる。

SB7・SB8 と建物の主軸方位がほぼ同じため、概ね近い時期と推定される。また、遺構の切り合い関係より竪穴建物 SH221 廃絶後である。

#### SB7 (図 28・32、表 5～7)

第 2 調査区の中央付近で検出された掘立柱建物である。調査区端にかかるため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では東西 1 間以上×南北 2 間 (約 4.80 m) の規模を持つ掘立柱建物で、建物の主軸は N-21°-W の方位をとる。柱間は南北側で 2.40 m を測る。柱穴は、SP205・SP206・SP211 で構成され、掘り方の平面形は楕円形で、1 辺は約 0.46～0.63 m を測る。

遺物は SP205 から黒色土器の椀 (22～25)、SP206 から山茶椀の椀 (26)、SP211 から土師器の坏 (31) が出土している。遺物は、概ね 12 世紀代と考えられる。

SB6・SB8 と建物の主軸方位がほぼ同じため、概ね近い時期と推定される。

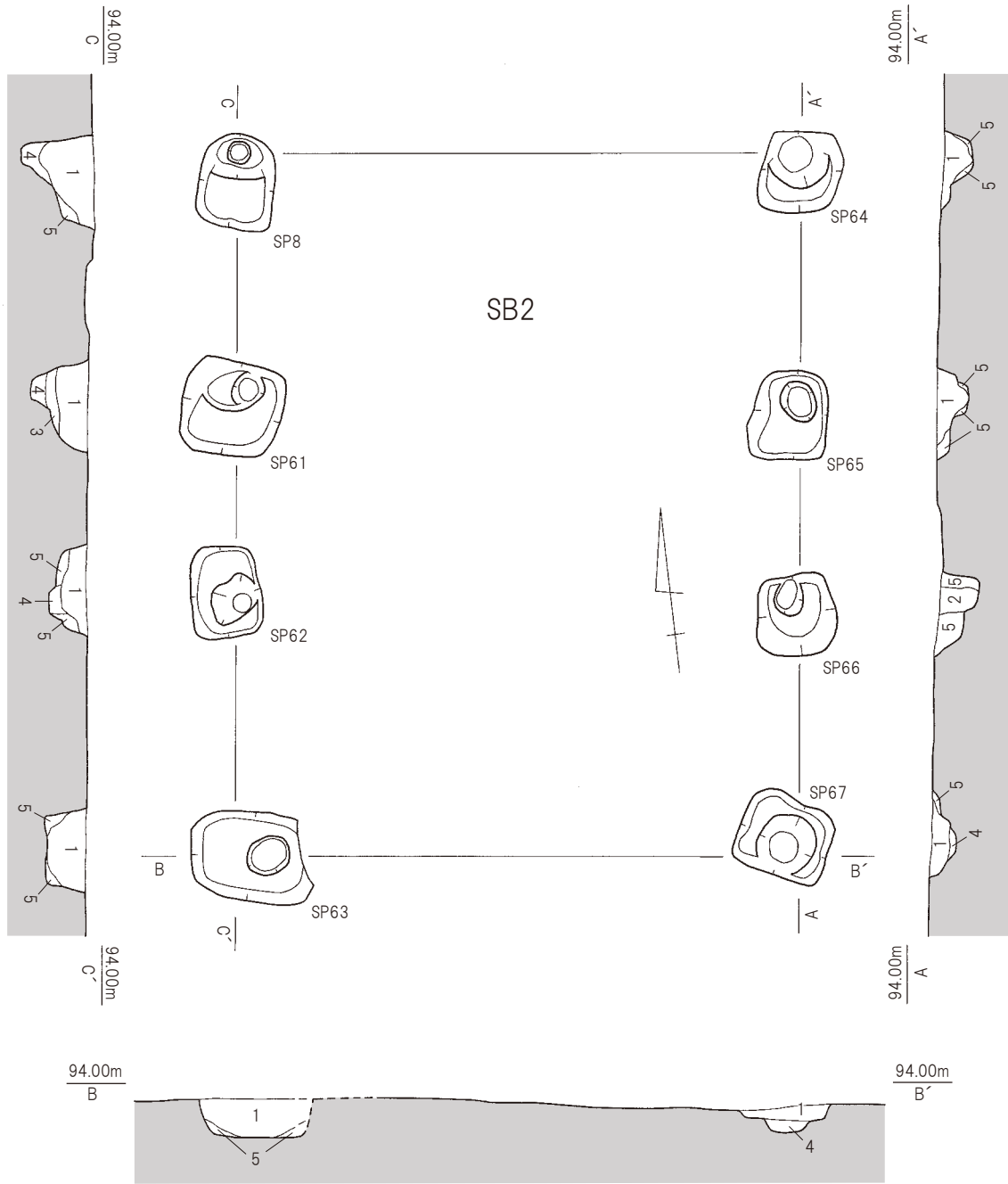
#### SB8 (図 28、表 5・6)

第 2 調査区の中央付近で検出された掘立柱建物である。調査区端にかかるため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では東西 1 間以上×南北 1 間 (約 2.60 m) 以上の規模を持つ掘立柱建物で、建物の主軸は N-27°-W の方位をとる。柱間は南北で約 2.60 m を測る。柱穴は、SP222・SP224 で構成され、掘り方の平面形は楕円形で、1 辺は約 0.33～0.69 m、深さは約 0.31～0.42 m を測る。

遺物は出土していない。



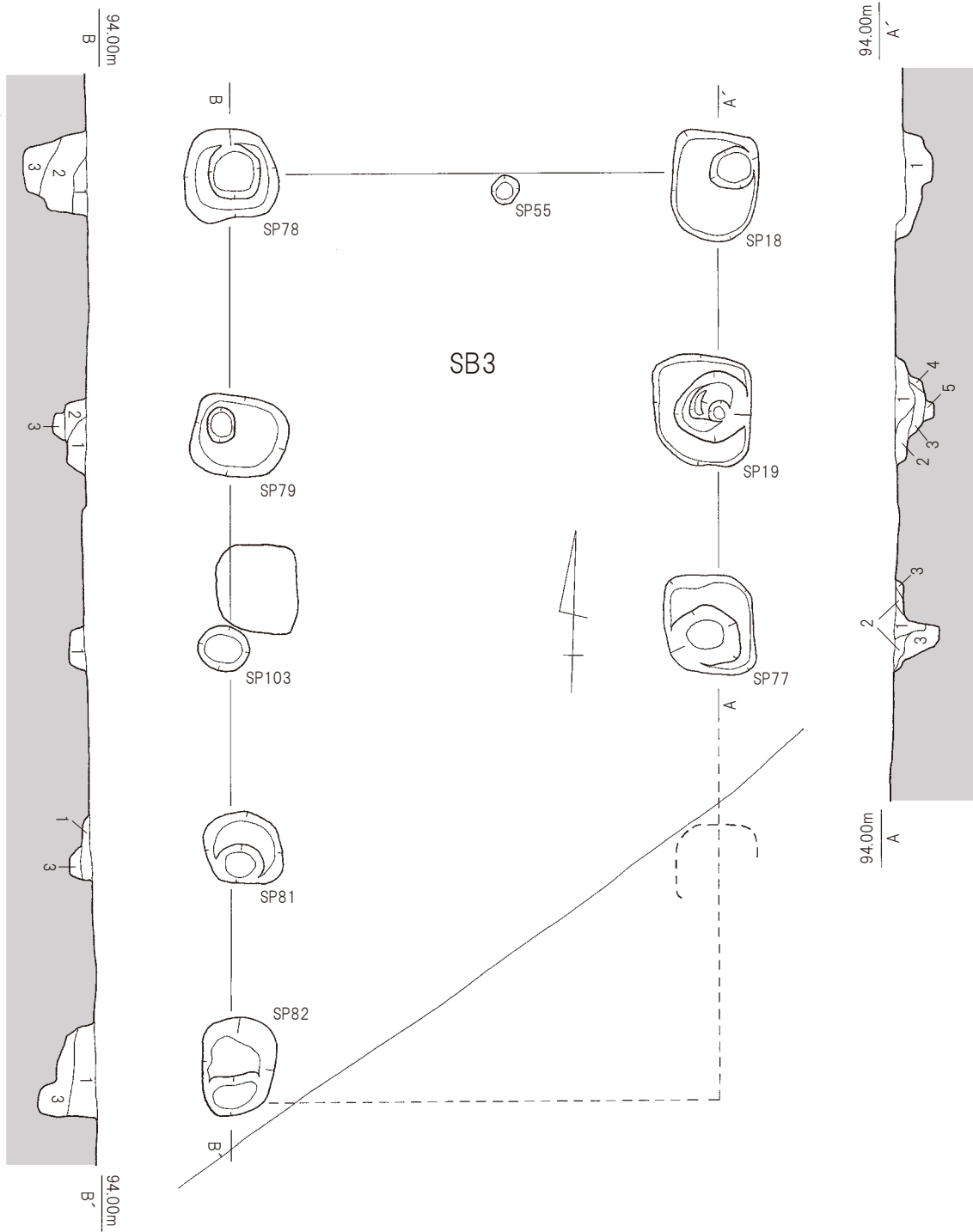




- |  |   |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 灰黄褐色粘質土</li> <li>2. オリーブ黒色粘質土</li> <li>3. にぶい黄褐色粘質土</li> <li>4. 暗灰黄色粘質土(粘性強い)</li> <li>5. 黄褐色砂礫混じり粘質土</li> </ol> | <p>地山ブロック~3cm大を20%含む<br/>炭化物~0.5cm大を5%含む</p> <p>地山ブロック~3cm大を10%含む<br/>炭化物~0.5cm大を10%含む</p> <p>地山ブロック~3cm大を30%含む<br/>炭化物~0.5cm大を10%含む</p> <p>地山ブロック~3cm大を40%含む<br/>炭化物~0.5cm大を10%含む</p> <p>地山ブロック~2cm大を30%含む<br/>炭化物~0.5cm大を5%含む</p> |
|--|---|



図 23 第 30 次 第 1 調査区掘立柱建物 (SB2) 平面図・断面図



- |  |   |   |   |
|--|---|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 黒褐色粘質土</li> <li>2. 灰黄褐色粘質土</li> <li>3. 黒褐色粘質土</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>地山ブロック～5cm大を20%含む<br/>炭化物～0.5cm大を5%含む</li> <li>地山ブロック～5cm大を40%含む<br/>炭化物～0.5cm大を5%含む</li> <li>地山ブロック～2cm大を10%含む<br/>炭化物～0.5cm大を5%含む</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>4. 褐灰色粘質土</li> <li>5. 暗灰黄色粘質土(粘性強い)</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>地山ブロック～3cm大を30%含む<br/>炭化物～0.5cm大を5%含む</li> <li>地山ブロック～3cm大を40%含む<br/>炭化物～0.5cm大を10%含む</li> </ul> |
|--|---|---|---|



図 24 第 30 次 第 1 調査区掘立柱建物 (SB3) 平面図・断面図

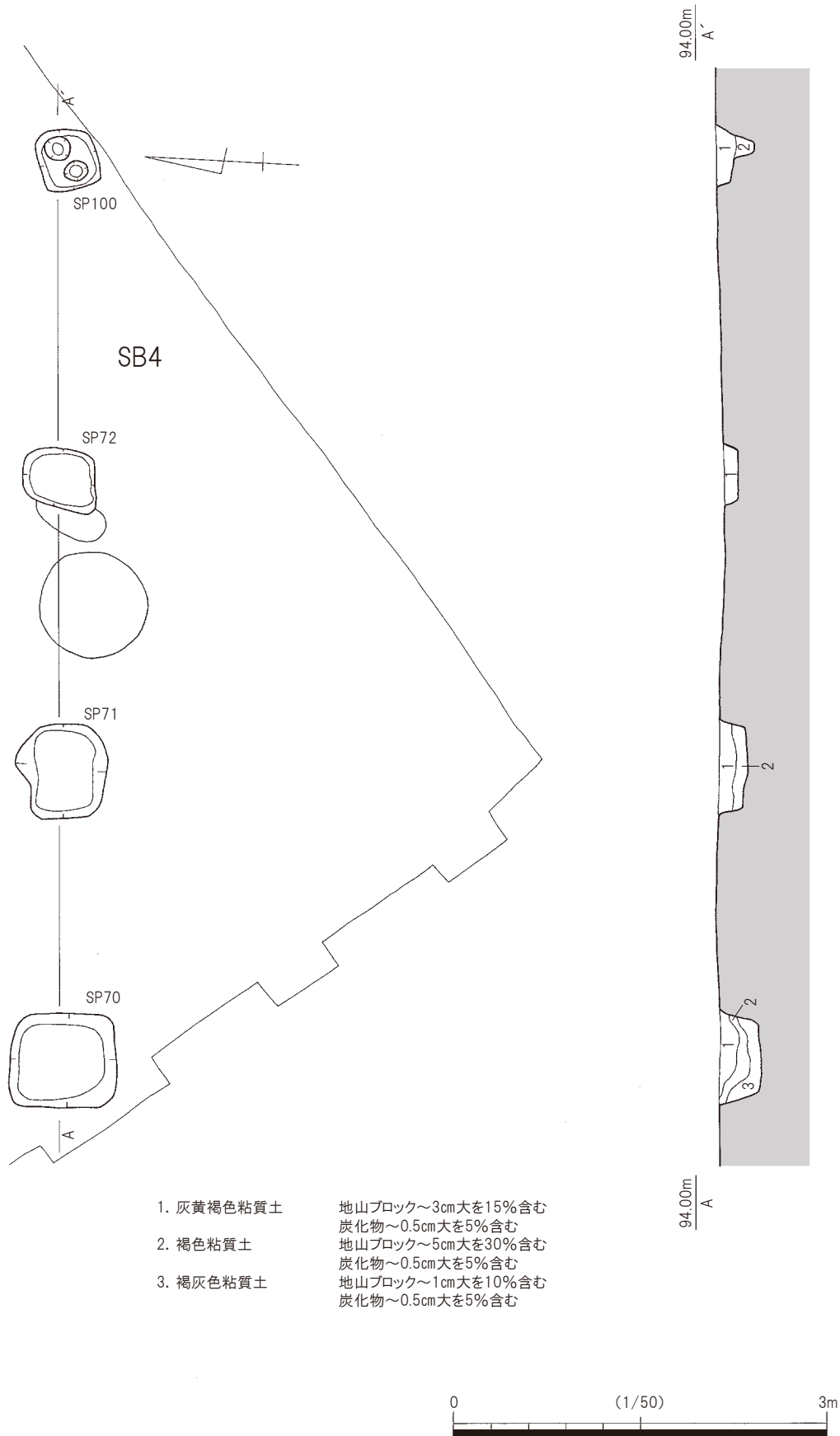


図 25 第 30 次第 1 調査区掘立柱建物 (SB4) 平面図・断面図

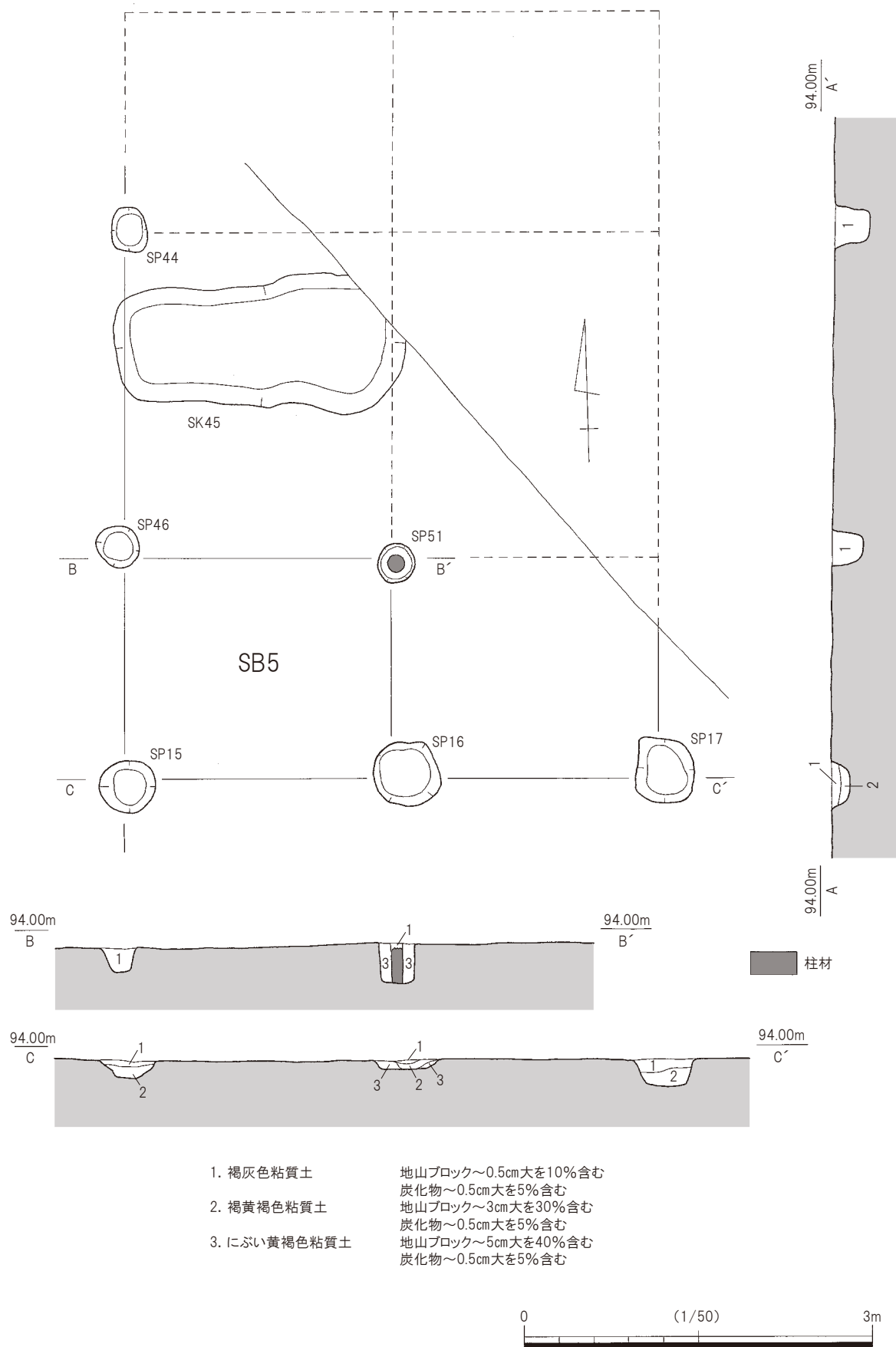
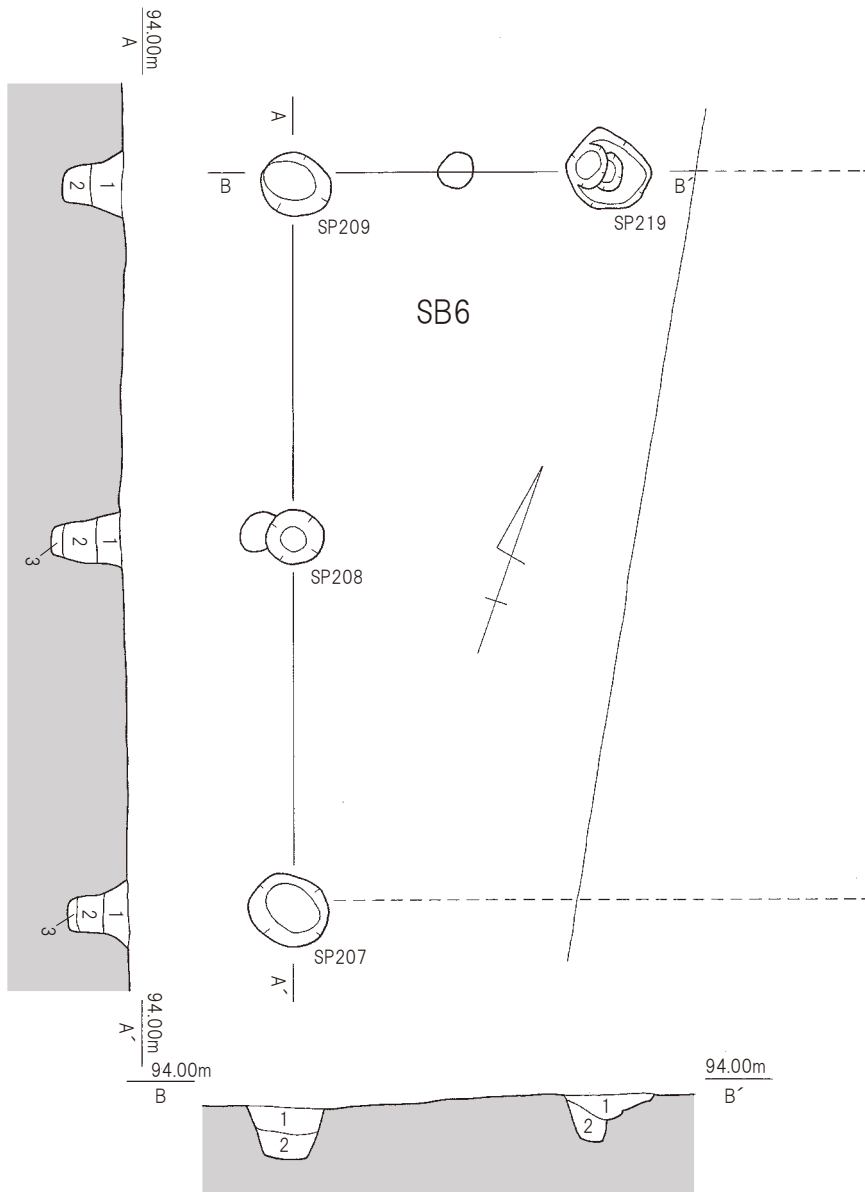


図 26 第 30 次第 1 調査区掘立柱建物 (SB5) 平面図・断面図





- |            |                                       |
|------------|---------------------------------------|
| 1. 褐灰色粘質土  | 地山ブロック～3cm大を10%含む<br>炭化物～0.5cm大を5%含む  |
| 2. 暗灰黄色粘質土 | 地山ブロック～5cm大を30%含む<br>炭化物～0.5cm大を10%含む |
| 3. 灰色粘土    | 炭化物～0.5cm大を5%含む                       |

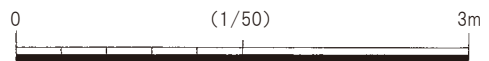
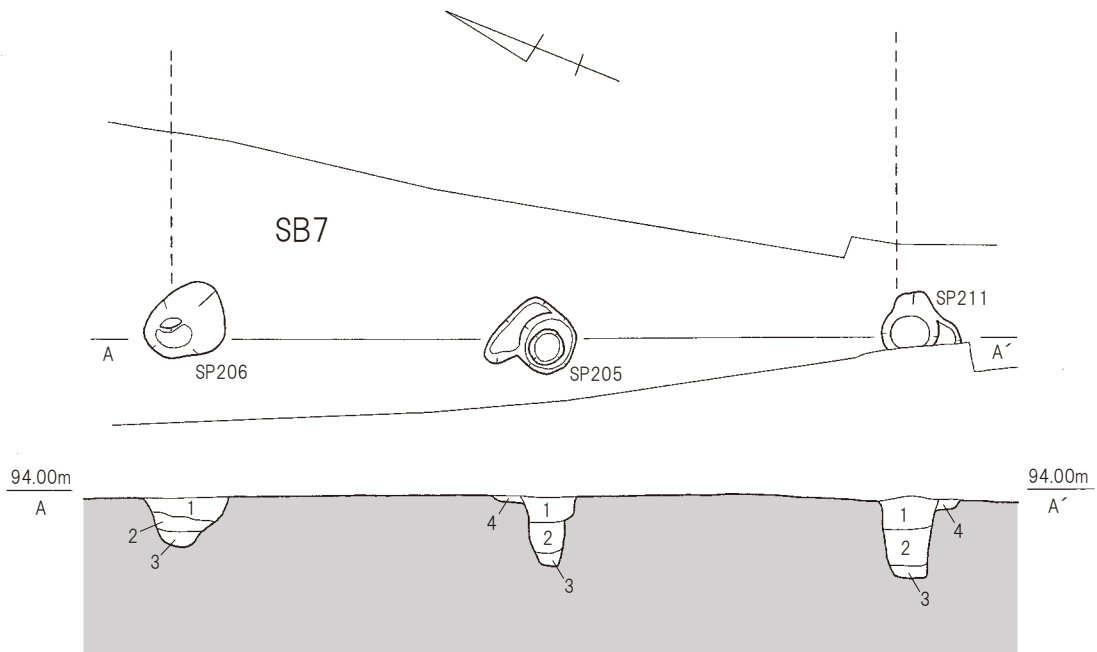
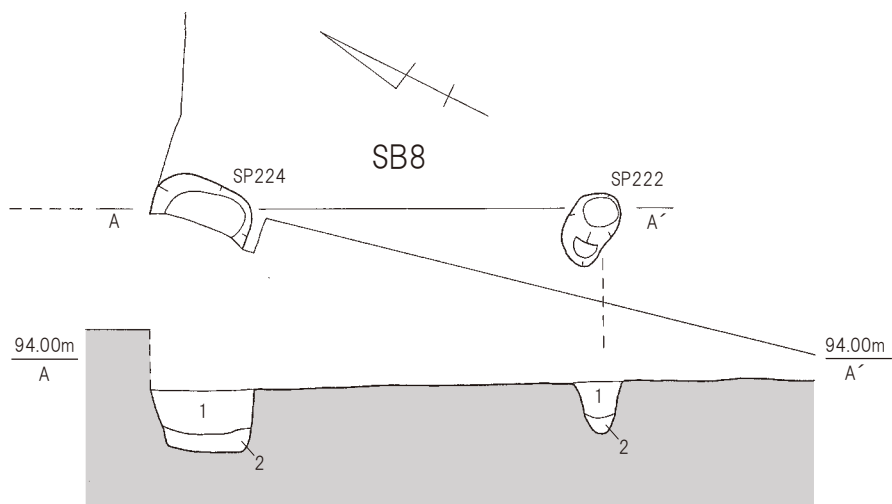


図 27 第 30 次第 2 調査区掘立柱建物 (SB6) 平面図・断面図



- |            |                                       |
|------------|---------------------------------------|
| 1. 褐灰色粘質土  | 地山ブロック～3cm大を10%含む<br>炭化物～0.5cm大を5%含む  |
| 2. 暗灰黄色粘質土 | 地山ブロック～5cm大を30%含む<br>炭化物～0.5cm大を10%含む |
| 3. 灰色粘土    | 炭化物～0.5cm大を5%含む                       |



- |            |                                       |
|------------|---------------------------------------|
| 1. 黒褐色粘質土  | 地山ブロック～1cm大を10%含む<br>炭化物～0.5cm大を5%含む  |
| 2. 暗灰黄色粘質土 | 地山ブロック～5cm大を20%含む<br>炭化物～0.5cm大を10%含む |



図 28 第 30 次第 2 調査区掘立柱建物 (SB7・8) 平面図・断面図

表5 第30次調査区掘立柱建物一覧

建物	梁行×桁行(間)	梁行長(m)	桁行長(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	主軸方位	挿図	写真 図版
SB1	2×3(以上)	3.92	5.22(以上)	20.46(以上)	N-2°-E	22	6
SB2	1×3	4.20	5.20	21.84	N-6°-E	23	5
SB3	1×4(以上)	3.76	7.12	26.77(以上)	N-2°-W	24	6
SB4	1(以上)×3(以上)	—	7.20(以上)	—	N-3°-W	25	6
SB5	2(以上)×2(以上)	4.6(以上)	4.70(以上)	21.62(以上)	N-2°-E	26	6
SB6	1(以上)×2	1.90(以上)	4.80	9.12(以上)	N-20°-W	27	8
SB7	1(以上)×2	—	4.80	—	N-21°-W	28	8
SB8	1(以上)×1(以上)	—	2.60(以上)	—	N-27°-W	28	—

表6 第30次調査区掘立柱建物柱穴一覧

建物	遺構	平面形	規模(m)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
			長さ(長幅)	幅(短幅)	深さ				
SB1	SP1	楕円	0.89	0.58	0.51			22	1
	SP2	楕円	0.80	0.45	0.50			22	1
	SP3	隅丸方	0.59	0.51	0.49		SD39を切っている。	22	1
	SP4	隅丸方	0.59	0.49	0.26		SP32に切られている。	22	1
	SP5	隅丸方	0.66	0.46	0.30		SP14を切っている。	22	1
	SP6	隅丸方	0.61	0.50	0.37	須恵器(2)	SD41に切られている。	22	1
	SP20	隅丸方	0.51	(0.24)	0.34			22	1
SB2	SP99	隅丸方	(0.49)	0.65	0.24	須恵器(10)	SD40に切られている。	22	1
	SP8	隅丸方	0.69	0.56	0.53			23	5
	SP61	隅丸方	0.76	0.70	0.51		SD39を切っている。	23	5
	SP62	隅丸方	0.69	0.51	0.43		SD38を切っている。	23	5
	SP63	隅丸方	0.91	0.67	0.45		SD38を切っている。SK69に切られている。	23	5
	SP64	隅丸方	0.61	0.60	0.23			23	5
	SP65	隅丸方	0.67	0.58	0.26			23	5
SB3	SP66	隅丸方	0.61	0.60	0.32			23	5
	SP67	隅丸方	0.69	0.58	0.21		SD39を切っている。	23	5
	SP18	隅丸方	0.84	0.66	0.40			24	6
	SP19	隅丸方	0.84	0.76	0.44			24	6
	SP77	隅丸方	0.75	0.68	0.33			24	6
	SP78	隅丸方	0.71	0.68	0.56	須恵器(8)		24	4・6
	SP79	隅丸方	0.73	0.62	0.27			24	6
SB4	SP103	円	0.40	0.35	0.13			24	6
	SP81	円	0.67	0.59	0.17			24	6
	SP82	隅丸方	0.75	0.56	0.48			24	6
	SP70	隅丸方	0.84	0.74	0.40	山茶椀(7)	SD38を切っている。	25	6
SB4	SP71	隅丸方	0.74	0.72	0.30		SD38を切っている。	25	6
		隅丸方	0.57	0.46	0.14		SP94を切っている。	25	6
	SP100	隅丸方	0.50	0.47	0.31			25	6
SB5	SP15	円	0.51	0.44	0.14			26	6
	SP16	隅丸方	0.56	0.54	0.10			26	6
	SP17	隅丸方	0.56	0.50	0.29			26	6
	SP44	隅丸方	0.37	0.31	0.23			26	6
	SP46	円	0.38	0.35	0.20			26	6
SB6	SP51	円	0.36	0.31	0.24		柱材残存	26	6
	SP207	楕円	0.54	0.46	0.41			27	8
	SP208	円	0.40	0.36	0.54		SP210を切っている。	27	8
	SP209	円	0.48	0.42	0.44	山茶椀(28・29)、黒色土器(27)、土師器(30)		27	8
SB7	SP219	楕円	0.55	0.50	0.34		SH221を切っている。	27	8
	SP205	楕円	0.63	0.52	0.60	黒色土器(22~25)		28	8
	SP206	楕円	0.56	0.46	0.42	山茶椀(26)	SD217を切っている。	28	8
SB7	SP211	楕円	0.52	(0.35)	0.49	土師器(31)		28	8
	SP222	楕円	0.52	0.33	0.31			28	—
SB8	SP224	楕円	0.69	(0.33)	0.42			28	—

( )内は残存長、又は復元数値

## (5) 道路遺構 (SF1)

### SF1 (図 29)

第1調査区の南西側で検出された道路遺構である。平行な4本の溝 SD38・SD39・SD59・SD60 で構成され、主軸はN-40°-Wの方位をとる。SD38・SD39 は道の南西側溝、SD59・SD60 は道の北東側溝であり、その両サイドの側溝間を路面として利用したと考えられる。両サイドにそれぞれ2本の側溝があることより、本遺構は本来2時期あった可能性も推測されるが、確かな確証はない。道幅は、SD39 と SD60 が組み合う時が1番狭く約5.30 m、SD38 と SD59 組み合う時が1番広く約8.50 mを測る。前述したとおり、本遺構が2時期あるのかも、どの溝が組み合うかも判然としないため、現段階では、道幅はこの範囲でおさまるといふことしか言えない。路面は、後世の削平などの影響もあるためか、硬化面や構築状況を示すものは特に認められなかった。4本の側溝の埋土だが、いずれも上下2層確認された。それぞれ、SD38 は上層：灰黄褐色砂礫混じり粘質土、下層：褐灰色砂礫混じり粘質土、SD39 は上層：灰黄褐色砂質土、下層：褐灰色砂、SD59・SD60 は上層：灰黄褐色粘質土、下層：褐灰色粘質土である。いずれの溝も常時水が流れていた状況は認められなかった。

いずれの溝からも遺物は出土していないため、遺構の時期を比定し得ないが、正南北方向の掘立柱建物 SB1・SB2・SB4 に本遺構が切られていることより、建物群に先行することは確かである。なお、SD41 と SD91 も、道路遺構に関連する可能性がある。

## (6) 溝 (SD40・SD42・SD213・SD214・SD217・SD225)

### SD40 (図 16)

第1調査区の西側で検出された溝である。長さは約1.10 m、幅は約0.38 m、深さは約0.34 mを測り、断面U字状を呈す。溝の主軸はN-46°-Eの方位をとる。埋土は褐灰色粘質土の1層である。同じ主軸方向の溝にSD42がある。

遺物は、出土していない。

### SD42 (図 16)

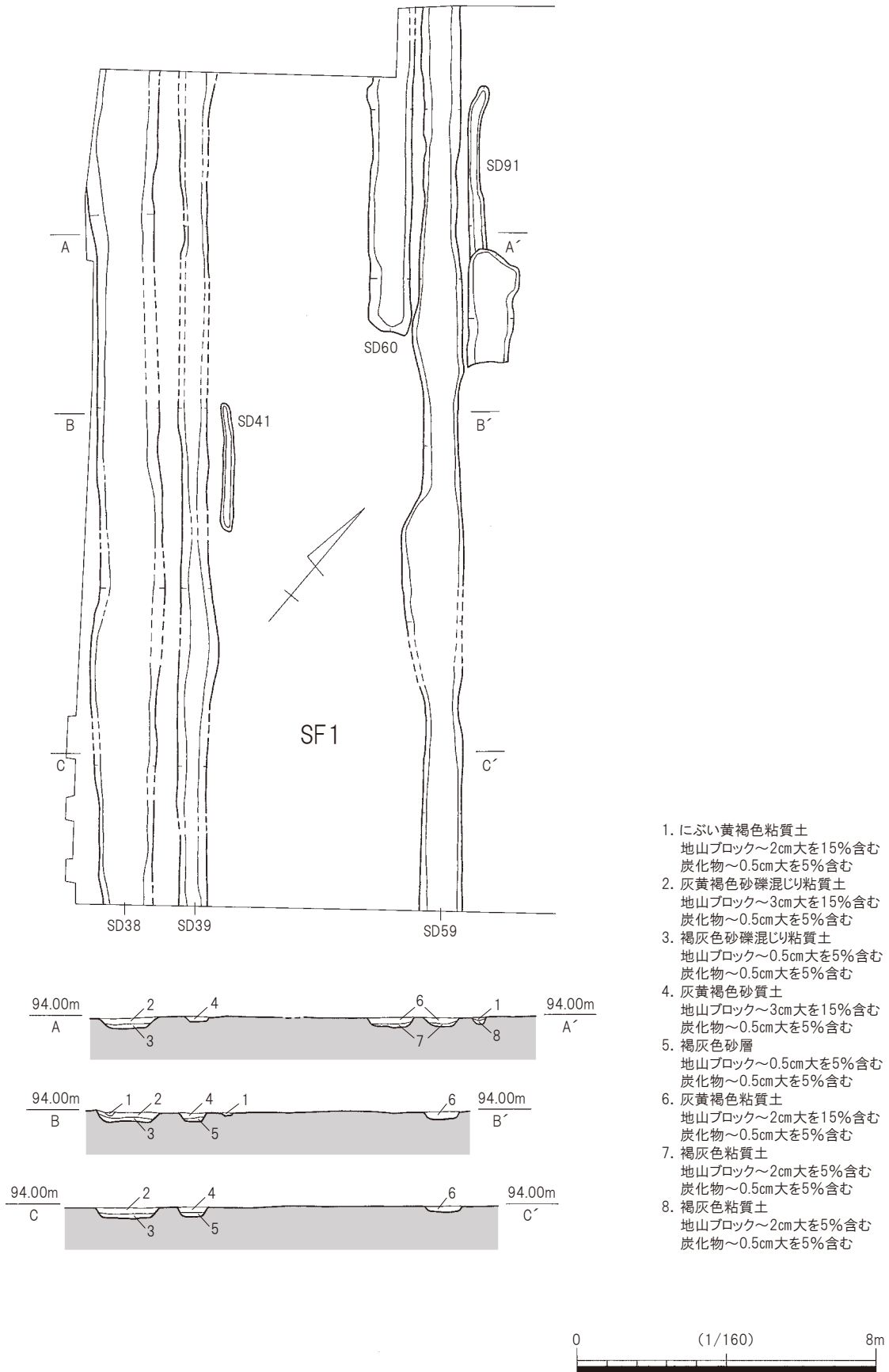
第1調査区の南西側で検出された溝である。長さは約1.12 m、幅は約0.43 m、深さは約0.37 mを測り、断面U字状を呈す。溝の主軸はN-46°-Eの方位をとる。埋土は褐灰色粘質土の1層である。同じ主軸方向の溝にSD40がある。

遺物は、出土していない。

### SD213・SD214・SD217・SD225 (図 19)

第2調査区の南側で検出された平行する4条の溝である。調査区の幅が狭いため溝の全容は不明であるが、幅は約0.31～0.50 m、深さは約0.07～0.08 mを測り、断面U字状を呈す。埋土はいずれも灰褐色粘質土である。溝の主軸はN-86°-Wでほぼ正南北方向に直交する。





1. にぶい黄褐色粘質土  
地山ブロック~2cm大を15%含む  
炭化物~0.5cm大を5%含む
2. 灰黄褐色砂礫混じり粘質土  
地山ブロック~3cm大を15%含む  
炭化物~0.5cm大を5%含む
3. 褐灰色砂礫混じり粘質土  
地山ブロック~0.5cm大を5%含む  
炭化物~0.5cm大を5%含む
4. 灰黄褐色砂質土  
地山ブロック~3cm大を15%含む  
炭化物~0.5cm大を5%含む
5. 褐灰色砂層  
地山ブロック~0.5cm大を5%含む  
炭化物~0.5cm大を5%含む
6. 灰黄褐色粘質土  
地山ブロック~2cm大を15%含む  
炭化物~0.5cm大を5%含む
7. 褐灰色粘質土  
地山ブロック~2cm大を5%含む  
炭化物~0.5cm大を5%含む
8. 褐灰色粘質土  
地山ブロック~2cm大を5%含む  
炭化物~0.5cm大を5%含む

図 29 第 30 次第 1 調査区道路遺構 (SF1) 平面図・断面図

遺物は、出土していない。

時期を特定できる遺物の出土がないため、遺物からの時期を比定し得ないが、主軸が正南北方向の竪穴建物 SB221 や掘立柱建物 SB1・SB2・SB3・SB4・SB5 と主軸方位がほぼ同じため、概ね近い時期と推定される。

#### (7) 井戸 (SE43)

##### SE43 (図 30・31、表 7)

第 1 調査区の北端で検出された井戸である。直径約 1.04 m の平面円形の素掘りの井戸で、深さは約 0.80 m で湧水層である灰オリーブ色粘質土層に達している。垂直の竪坑状で、井戸枠の部材も井戸枠の痕跡も確認できなかった。当初から素掘りであったと考えられる。埋土は、1 層：灰黄褐色粘質土で地山ブロックを多く含む、2 層：暗灰黄色礫混じり粘質土で大型の礫が集積している、3 層：黄灰色粘土、4 層：灰オリーブ色砂混じり粘質土、5 層：灰色粘土（粘性が強い）の 5 層が確認されている。3～5 層は自然堆積層、1・2 層は地山ブロックも多量に混じる上、大型の礫も集積していることより人為的な堆積と考える。この大型の礫は、他所から運びこまれた可能性と、機能時に井戸枠などで使用されていたものが、廃絶時に崩されて集積した可能性などが考えられる。

遺物は、3 層の上面で、完形の山茶碗の碗 (5) が割れた状態で出土した。

3 は、高台が高く「ハ」の字状に開く。体部は丸みをもち、口縁部は外反する。口縁部には、指またはヘラ状工具による 4 ヶ所に燐火が施される。高台端部に靱殻痕は認められない渥美湖西型の山茶碗と考えられる。11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

遺構の年代であるが、掘り方がないため構築時期は不明である。井戸廃絶後と考えられる 3 層上面で山茶碗 (5) が出土したため、廃絶時期の上限は 11 世紀後半～12 世紀前半と考える。

#### (8) 土坑 (SK9・SK10・SK11・SK13・SK45・SK69・SK85)

##### SK9・SK10・SK11・SK13・SK85 (図 16)

第 1 調査区の西端で纏まって検出された土坑群である。SK9・SK10・SK11・SK13・SK85 と確認されており、長さは約 0.95～2.09 m、幅は約 0.39～0.72 m、深さは約 0.33～0.87 m を測り、長細い形状の土坑である。土坑内には、鉄線を巻きつけた丸太が残されていたことより、近現代の電信柱関係の土坑と考えられる。

##### SK45 (図 26)

第 1 調査区の北東端で検出された土坑である。調査区端にかかるため全体を検出できていないが、平面形が隅丸長方形を呈する。長辺約 2.35 m、短辺約 1.10 m、残存深度約 0.19 m を測り、主軸はほぼ正南北方向を向いている。前述したとおり、遺構の位置や主軸方向を同じくする点などより、SB5 と一体のものである可能性が高いと考える。

遺物は、土師器の細片が出土した。

SK69 (図 16・31、表 7)

第 1 調査区の南側で検出された土坑である。平面形は円形で、直径約 1.60 m、深さは約 0.60 m を測る。埋土は、1 層：明褐灰色礫混じり粗砂、2 層：褐灰色礫混じり粗砂の 2 層である。

遺物は、灰釉陶器の皿 (6) が出土した。

(9) 小穴 (SP36・SP95・SP202・SP220)

SP36 (図 16・31、表 7)

第 1 調査区の西側で検出された小穴である。直径は約 0.26 m、深さは約 0.15 m の平面円形の小穴である。埋土は灰褐色粘質土の 1 層である。

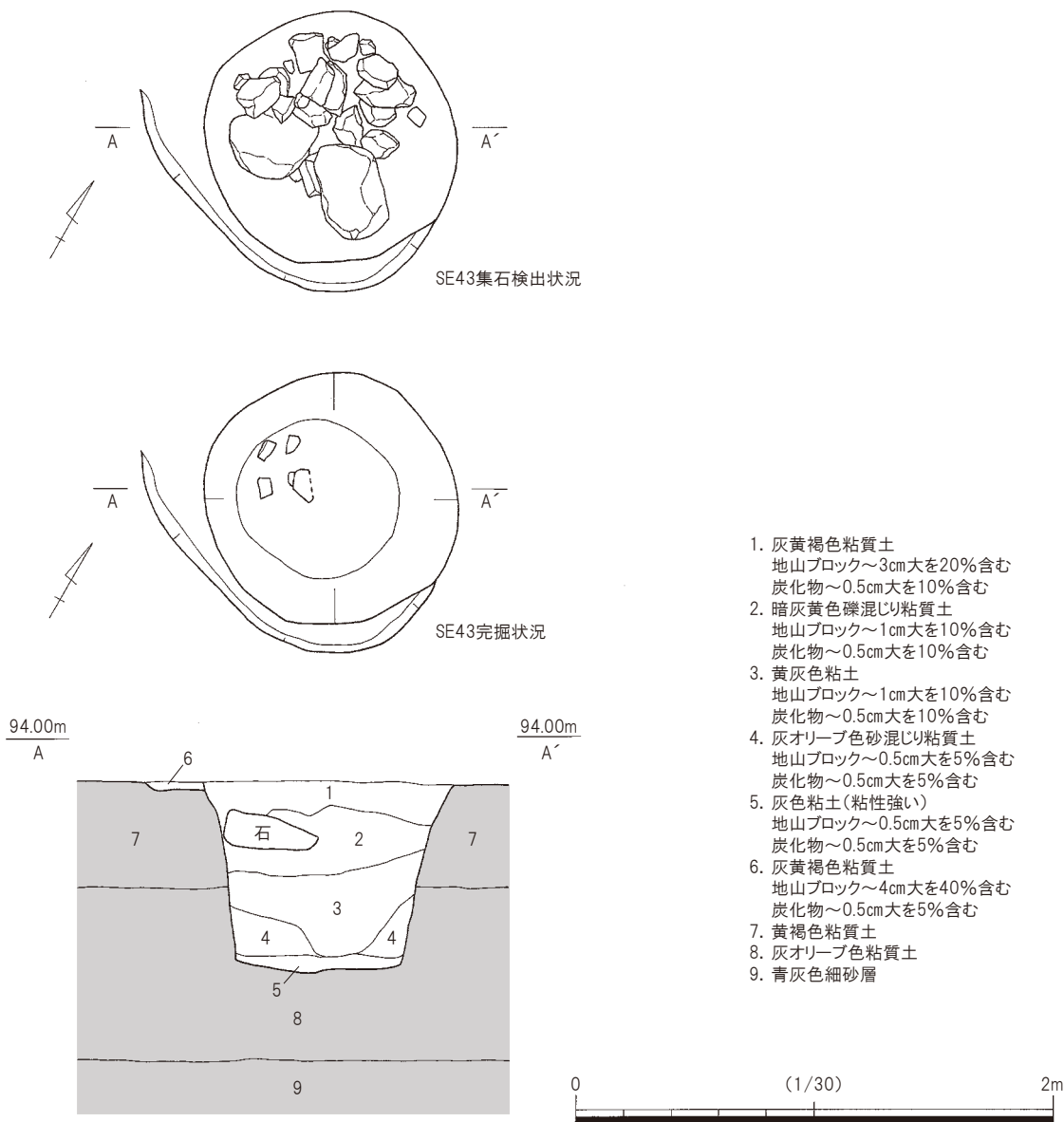


図 30 第 30 次 第 1 調査区 (SE43) 平面図・断面図

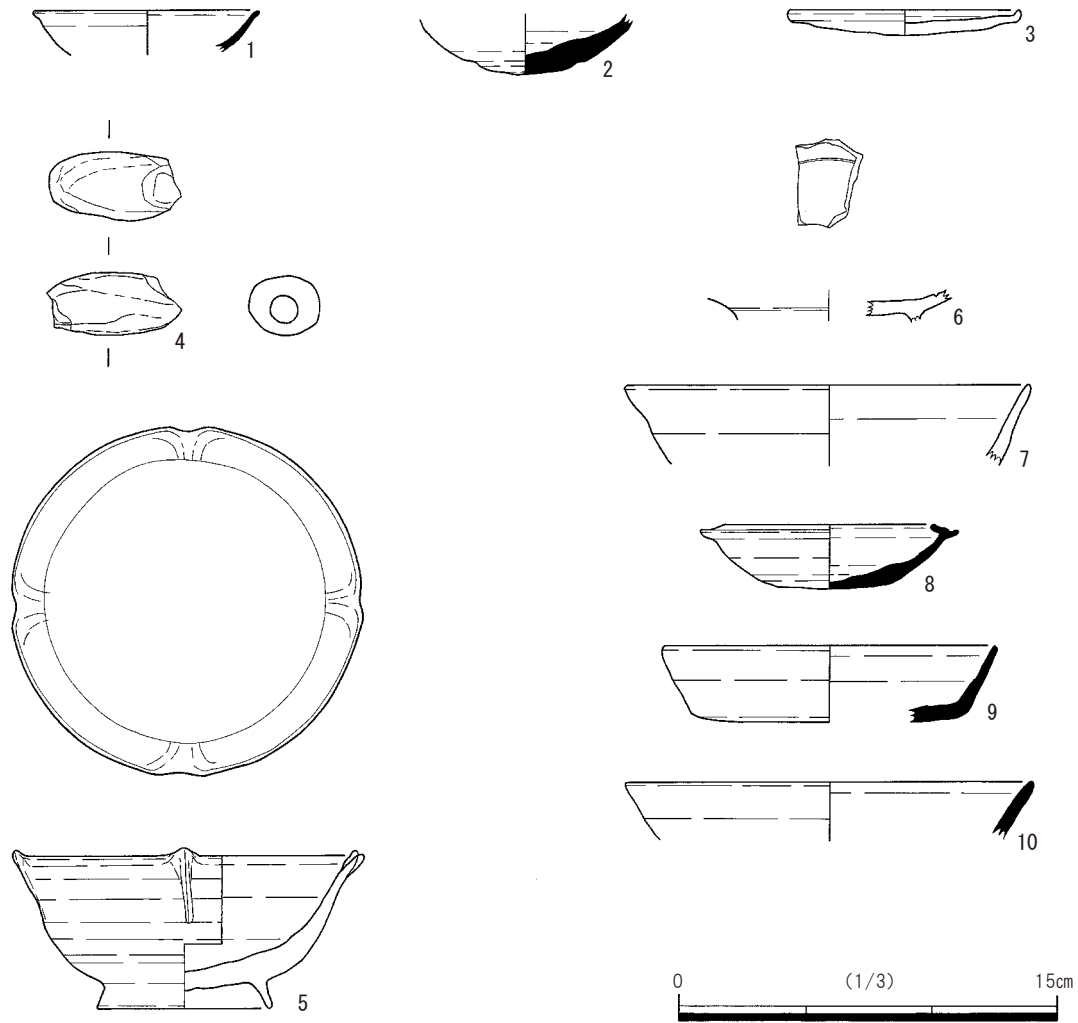


図 31 第 30 次第 1 調査区出土遺物実測図

遺物は、土師器の皿（3）と土錘（4）が出土した。

SP95（図 16・31、表 7）

第 1 調査区の東側で検出された小穴である。直径は約 0.56 m、深さは約 0.30 m の平面円形の小穴である。埋土は、黒褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、須恵器の坏身（9）が出土した。

SP202（図 19・32、表 7）

第 2 調査区の南東端で検出された小穴である。直径は約 0.22 m、深さは約 0.11 m の平面円形の小穴である。埋土は、褐灰色粘質土の 1 層である。

遺物は、土師器（21）が出土した。

SP220（図 19・32、表 7）

第 2 調査区の南東側で検出された小穴である。直径は約 0.34 m、深さは約 0.20 m の平面円形の小穴である。埋土は、褐灰色粘質土の 1 層である。



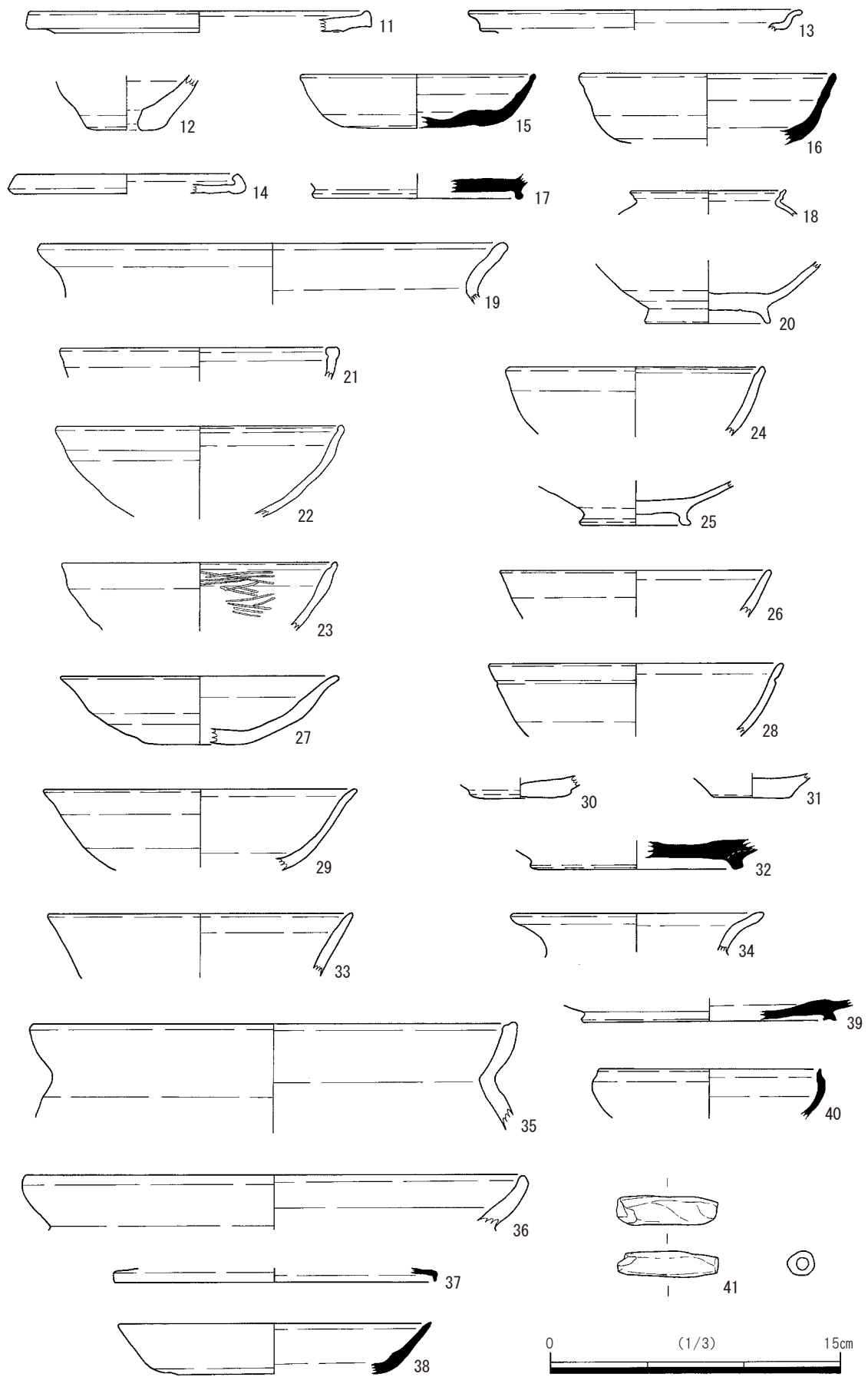


图 32 第 30 次第 2 調査区出土遺物実測図

表 7 第 30 次調査区出土遺物一覧

掲載 No.	出土地点	器種	器形	部位	残存率	法量 (cm)				胎土	焼成	色調				備考	
						口径	最大径	底部径	器高			外面		内面			
						(長さ)	(幅)	(厚さ)									
1	T1 包含層	須恵器	坏身	口縁部	10%以下	(8.6)	—	—	(1.8)	密	硬質	暗青灰	5B4/1	暗青灰	5B5/1		
2	T1-SP6	須恵器	坏身	底部	10%	—	—	—	(2.4)	やや粗	硬質	暗青灰	5PB5/1	暗青灰	5PB4/1	胎土：直径 1mm 大の砂粒を含む	
3	T1-SP36	土師器	皿	口縁部～底部	40%	(9.0)	—	—	(1.0)	緻密	硬質	灰白	7.5YR8/1	灰白	7.5YR8/1		
4	T1-SP36	土製品	土唾	—	90%	2.8	2.3	—		密	やや硬質	橙	5YR7/6	—	—		
5	T1-SE43	3層	山茶碗	碗	口縁部～高台	95%	(14.0)	—	—	(6.0)	密	硬質	灰白	N8/0	灰白	N8/0	胎土：直径 3mm 大の砂粒を含む
6	T1-SK69		灰釉陶器	皿	底部～高台	10%以下		—	—	(1.2)	密	硬質	灰白	N7/0	灰白	N7/0	
7	T1-SP70	2層	山茶碗	碗	口縁部	10%以下	(15.6)	—	—	(3.1)	緻密	硬質	灰白	N7/0	灰白	N7/0	
8	T1-SP78	1層	須恵器	坏身	口縁部～底部	20%	(8.2)	—	—	(2.5)	緻密	硬質	明青灰	5PB7/1	明青灰	5PB7/1	
9	T1-SP95	1層	須恵器	坏身	口縁部～底部	10%	(13.0)	—	—	(3.0)	密	やや軟質	灰白	N7/0	灰白	N8/0	
10	T1-SP99	1層	須恵器	坏身	口縁部	10%以下	16.0	—	—	(2.3)	密	硬質	灰白	N7/0	灰白	N7/0	
11	T2 包含層	弥生土器	器台	口縁部	10%以下	(17.4)	—	—	(1.1)	やや粗	やや軟質	浅黄橙	7.5YR8/4	淡橙	5YR8/3	胎土：直径 3mm 大の砂粒を含む	
12	T2 包含層	弥生土器	有孔鉢	底部	10%以下	—	—	(4.0)	(2.8)	やや粗	やや軟質	浅黄橙	7.5YR8/4	橙	5YR7/6	胎土：直径 3mm 大の砂粒を含む	
13	T2 包含層	土師器	壺	口縁部	10%以下	(17.0)	—	—	(1.0)	やや粗	やや軟質	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	胎土：直径 1mm 大の砂粒を含む	
14	T2 包含層	土師器	皿	口縁部～底部	10%以下	(11.4)	—	—	(1.0)	緻密	硬質	浅黄橙	7.5YR8/4	灰白	7.5YR8/2		
15	T2 包含層	須恵器	坏身	口縁部～底部	20%	(12.0)	—	—	(2.8)	密	硬質	灰白	N8/0	灰白	N8/8		
16	T2 包含層	須恵器	坏身	口縁部～体部	10%以下	(13.0)	—	—	(3.7)	やや粗	やや軟質	灰白	N7/0	灰白	N7/0	胎土：直径 3mm 大の砂粒を含む	
17	T2 包含層	須恵器	坏身	底部～高台	10%以下	—	—	(10.8)	(1.3)	密	硬質	明青灰	5PB7/1	明青灰	5PB7/1		
18	T2 包含層	土師器	壺	口縁部	10%以下	8.0	—	—	(1.3)	緻密	やや硬質	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2		
19	T2 包含層	土師器	壺	口縁部	10%以下	23.8	—	—	(3.1)	やや粗	硬質	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	胎土：直径 1mm 大の砂粒を含む	
20	T2 包含層	灰釉陶器	碗	底部～高台	20%	(6.2)	—	—	(3.2)	緻密	硬質	灰白	5Y8/1	灰白	2.5Y8/1		
21	T2-SP202	土師器	坏	口縁部	10%以下	(14.2)	—	—	(1.7)	密	硬質	黒	2.5Y2/1	黒	2.5Y2/1	胎土：細かい砂粒を含む	
22	T2-SP205	黒色土器	碗	口縁～体部	40%	(14.6)	—	—	(4.7)	密	やや軟質	灰白	10YR8/1	黒	10YR2/1	内面黒色	
23	T2-SP205	1層	黒色土器	碗	口縁～体部	10%以下	(14.0)	—	—	(3.5)	密	硬質	浅黄橙	10YR8/2	黒	7.5Y8/1	内面黒色
24	T2-SP205	3層	黒色土器	碗	口縁～体部	10%以下	(13.0)	—	—	(3.5)	やや粗	硬質	灰白	7.5YR8/2	黒	7.5YR8/1	内面黒色
25	T2-SP205	3層	黒色土器	碗	底部～高台	10%以下		—	(5.6)	(2.2)	密	やや軟質	灰白	10YR8/2	黒	2.5GY2/1	内面黒色
26	T2-SP206	1層	山茶碗	碗	口縁部	10%以下	13.8	—	—	2.5	緻密	硬質	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y8/1	
27	T2-SP209	1層	土師器	高坏	口縁部～体部	10%	(14.0)	—	—	(3.5)	やや粗	軟質	灰白	7.5YR8/2	灰白	7.5YR8/2	胎土：直径 1mm 大の砂粒を含む
28	T2-SP209	1層	山茶碗	碗	口縁部～体部	10%以下	(15.0)	—	—	(3.6)	緻密	硬質	灰白	5Y8/1	灰白	5Y8/1	
29	T2-SP209	1層	山茶碗	碗	口縁部～体部	10%	(16.0)	—	—	(4.1)	緻密	硬質	灰白	N8/0	灰白	5Y8/1	
30	T2-SP209	1層	土師器	坏	底部	10%以下	—	—	(4.8)	(1.1)	やや粗	硬質	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	胎土：直径 1mm 大の砂粒を含む
31	T2-SP211	2層	土師器	坏	底部	10%	—	—	(4.1)	(1.2)	密	硬質	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	
32	T2-SP220	1層	須恵器	坏身	底部	10%以下	—	—	(11.0)	(1.5)	密	硬質	灰白	10Y7/1	灰白	N7/0	
33	T2-SH221	1層	須恵器	坏身	口縁部	10%以下	15.6	—	—	(3.3)	やや粗	軟質	灰白	N7/0	灰白	N8/0	非常に軟質、胎土：直径 1mm 大の砂粒を含む
34	T2-SH221	1層	土師器	壺	口縁部	10%以下	(13.0)	—	—	(2.0)	やや粗	やや軟質	浅黄橙	7.5YR8/3	灰白	7.5YR8/2	胎土：直径 2mm 大の砂粒を含む
35	T2-SH221	1層	土師器	壺	口縁部	10%以下	(24.6)	—	—	(5.5)	やや粗	やや軟質	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/1	胎土：砂粒を多く含む
36	T2-SH221	2層	土師器	壺	口縁部	10%以下	(25.6)	—	—	(2.9)	密	硬質	灰白	10YR8/2	灰白	7.5YR8/2	
37	T2-SH221	1層	須恵器	坏蓋	口縁部	10%以下	(16.6)	—	—	(0.7)	密	硬質	灰	N6/0	灰白	N7/0	
38	T2-SH221	1層	須恵器	坏身	口縁部～底部	10%以下	(16.0)	—	—	(2.5)	密	硬質	灰白	N7/0	灰白	N7/0	
39	T2-SH221	1層	須恵器	坏身	底部～高台	10%	—	—	(13.0)	(1.1)	密	硬質	明オリブ灰	2.5GY7/1	灰白	N7/0	
40	T2-SH221	1層	須恵器	鉢	口縁部	10%以下	(11.4)	—	—	(2.5)	密	硬質	青灰	5PB6/1	青灰	5PB6/1	
41	T2-SH221	1層	土製品	土唾	—	90%	5.2	1.4	—	—	密	硬質	灰白	7.5YR8/1	—	—	

(10) 小結

第 30 次調査区では、竪穴建物 1 軒 (SH221) と掘立柱建物 8 棟 (SB1・SB2・SB3・SB4・SB5・SB6・SB7・SB8)、井戸 1 基 (SE43)、複数の溝や土坑、小穴などの集落関連遺構と道路遺構 (SF1) を確認した。

これらの遺構群は、切り合い関係などより、概ね 3 時期にわかる。

まず、最初に時期は不明だが、道路遺構（SF1）が構築される。

その後、主軸方向がほぼ正南北方向を向く遺構群がひろがるが、これらは竪穴建物1軒（SH221）、掘立柱建物5棟（SB1・SB2・SB3・SB4・SB5）、4条の溝（SD213・SD214・SD217・SD225）などで構成される。竪穴建物と掘立柱建物の前後関係の有無などは判断しかねるが、お互いの主軸方向が同一である点より、現段階では同時期、すなわち竪穴建物と掘立柱建物で構成される集落と評価しておきたい。また、掘立柱建物も総柱建物や竪穴付掘立柱建物など多様性のある建物構成を有しており、拠点的な集落であったと想定される。出土遺物が少ないため時期の判断は難しいが、SH221 や SB3 の出土遺物より、現段階では7世紀～8世紀の中で理解しておきたい。

最後に、主軸方向がやや西傾（N-20～27°-W）する遺構群がひろがるが、これらは掘立柱建物3棟（SB6・SB7・SB8）、井戸1基（SE43）などで構成される。時期は、12世紀代と考える。

#### 参考文献

- 大崎哲人 1993「土師器甕の変遷とその背景——近江型土師器成立への諸段階——」『紀要』第6号財団法人滋賀県文化財保護協会
- 葛野泰樹・吉田秀則 1993「松原内湖遺跡出土の古墳時代後期以降の須恵器と土師器」『松原内湖遺跡発掘調査報告書I』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 田辺昭三 1981『須恵器体成』角川書店

## 第4章 総括

### 第1節 第26～30次調査の成果と課題

#### (1) はじめに

今回、彦根市が計画した彦根市スポーツ・文化交流センター（プロシードアリーナHIKONE）等建設付帯工事に伴い福満遺跡26～30次発掘調査を実施した。本書は、そのうち26・30次発掘調査を対象としたものである。本章では、26・30次発掘調査について振り返るとともに、26～30次発掘調査全体を概観しまとめとしたい。

#### (2) 第26・30次調査の成果

今回の発掘調査では、第26次調査区で掘立柱建物や溝、土坑、小穴など集落関連遺構と河道を、第30次調査区で竪穴建物や掘立柱建物、井戸、溝、土坑、小穴など集落関連遺構と道路遺構をそれぞれ確認した。

それぞれの調査区の主な成果だが、第26次調査区では、第1・3調査区で河道ないし溝を確認した。これらは第23次調査区で確認されている河道や溝に接続すると推定され、特に第1調査区の河道(NR1)は7世紀代を中心とする遺物が多量に出土した。第2調査区では、時期は判然としないが主軸がやや西傾(N-22°-W)する掘立柱建物(SB1)を確認した。

第30次調査区では、概ね3時期の遺構を確認した。以下、時期が古い順番に記述する。まず、時期は判然としないが、主軸がN-40°-Wをとる道路遺構(SF1)である。次に、時期は7～8世紀と推測される主軸方向がほぼ正南北方向に向く遺構群で、竪穴建物1軒(SH221)、掘立柱建物5棟(SB1・SB2・SB3・SB4・SB5)、4条の溝(SD213・SD214・SD217・SD225)などで構成される。最後に、時期は12世紀代と推測される主軸方向がやや西傾(N-20～27°-W)する遺構群で、掘立柱建物3棟(SB6・SB7・SB8)、井戸1基(SE43)などで構成される。第30次調査区では、以上3時期の遺構の変遷が確認された。

#### (3) 第26～30次調査成果の整理と今後の課題

最後に、第26～30次調査区で確認された遺構群について、時代順に5期に分けて整理・検討し、課題を抽出したい

まず1期目、今回確認された遺構群で最も古く位置付けられるのは、第28次SH14の弥生時代後期～終末期と考えられる平面多角形（五角形ないし六角形）の竪穴建物である。同様の遺構は、近江地域では野洲川流域を中心とする南部地域に集中する傾向がある。彦根市域では、南部の稲部遺跡や稲部西遺跡で確認されているが、福満遺跡が位置する市域中央の犬上川流域では今回が初めての確認となる。調査地周辺の当該期の遺構だが、近隣では竪穴建物は確認されておらず、少し離れた第23次調査で平面方形の竪穴建物2棟が、第5・8・18次調査で弥生時代後期～古墳時代初頭とみられる方形周溝墓が散見される状況

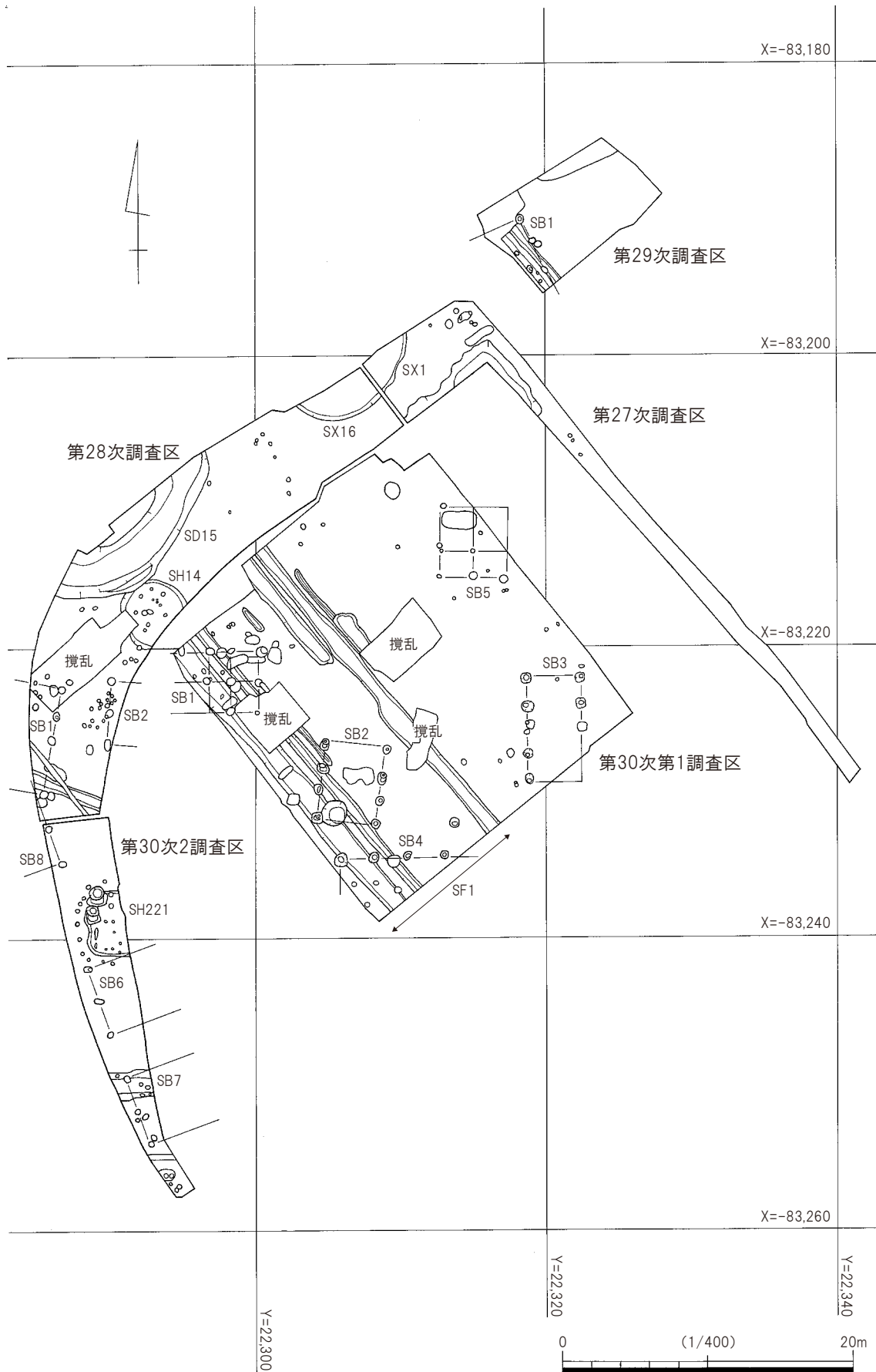


図 33 福満遺跡第 27~30 次遺構全図



である。現段階では、第 28 次 SH14 の多角形建物の集落内での位置や性格、また当該期の集落域や墓域、生産域の広がりなどは判然としておらず、今後の調査の課題と言える。

次の 2 期目に位置付けられるのは、第 27 次 SX1 や第 28 次 SD15・SX16 など、これらは古墳時代後期の古墳の周濠（周溝）と推測した。当該遺構から約 70 m 北西で実施された第 18 次調査でも当該期の古墳が確認されており、第 27・28 次調査区から北西に墓域が広がっていた可能性がある。集落域だが、第 23 次調査で竪穴建物を中心とする集落関連遺構が確認されており、当該期の集落域の中心を形成していた可能性がある。生産域については不明である。福満遺跡の古墳時代後期の遺構の広がりに関しては、以上のような傾向をみることができる。今後、更なる調査成果の積み重ねにより、より詳細な状況の整理と分析が課題となっていく。

次の 3 期目に位置付けられると推測されるのは、第 30 次 SF1 で、これは詳細な時期は判然としない道路遺構である。遺構の切り合い関係などよりこの段階に位置づけた。周辺での道路遺構の検出は今回初めてで、また詳細な時期も不明であるため、今後、同様の遺構の更なる確認と時期の判断が課題となっていくと考えられるが、福満遺跡や品井戸遺跡、竹ヶ鼻廃寺遺跡など古代の拠点集落が広がっていたと推測される遺跡群は、当該期の官道である東山道から少し琵琶湖側の離れたところに位置するため、あるいは今回検出された道路遺構はこれら拠点集落と東山道をつなげる性格のものであったかもしれない。

次の 4 期目に位置づけられるのは、主軸がほぼ正南北方向をとる遺構群である。これらは、7～8 世紀と推測される竪穴建物（第 30 次 SH221）や掘立柱建物（第 28 次 SB1・SB2、第 30 次 SB1・SB2・SB3・SB4・SB5）などで構成される集落関連遺構である。今回の一連の調査で最も遺構の広がり・密度などが高く、建物規模も大きく多様な建物で構成されていることより拠点集落と考えられる。また、第 26 次調査では、墨や漆が付着した須恵器を含む 7 世紀代の遺物が多量に出土する河道なども検出されており、近隣における拠点集落の存在を補完する調査成果を得ている。

最後の 5 期目に位置付けられるのは、主軸がやや西傾する遺構群である。これらは、12 世紀代と推測される掘立柱建物（第 26 次 SB1、第 29 次 SB1、第 30 次 SB6・SB7・SB8）、井戸（第 30 次 SE43）などで構成される集落関連遺構である。

以上が、福満遺跡第 26～30 次発掘調査における調査成果と課題である。今回の一連の調査で、遺構の時期も性格も多種・多様な成果を得ることができた。ただ、前述したように、新たな課題が見えてきたことも確かである。今後も、これらの課題を意識した調査を継続し、更なる資料の充実を図りたい。

#### 参考文献

- 伴野幸一 2003「伊勢遺跡の構成と五角形住居 ―結びこかえて―」『伊勢遺跡 75 次発掘調査報告書』  
守山市教育委員会



第26次:第1調査区全景〔南から〕



第26次:第2調査区調査前風景〔北東から〕



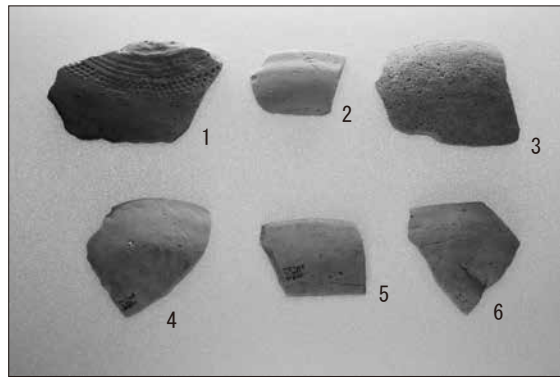
第26次:第2調査区全景〔北東から〕



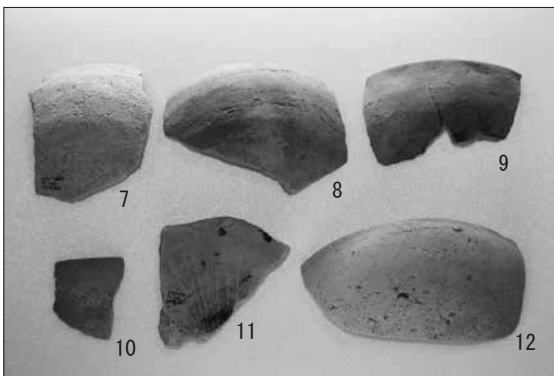
第26次:第3調査区調査前風景〔北西から〕



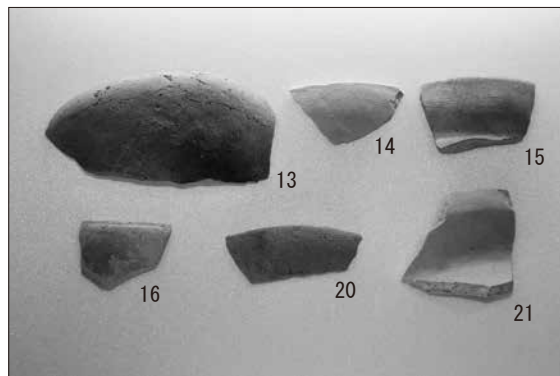
第26次:第3調査区全景〔北から〕



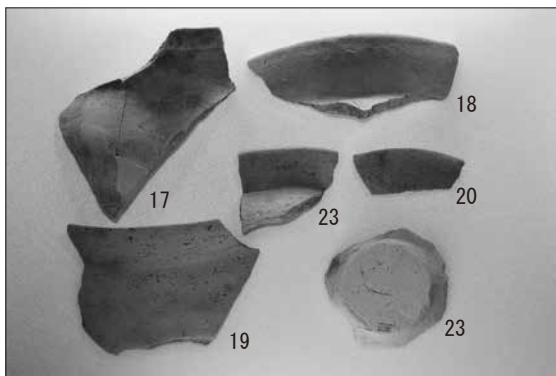
第26次:第1調査区NR1出土遺物



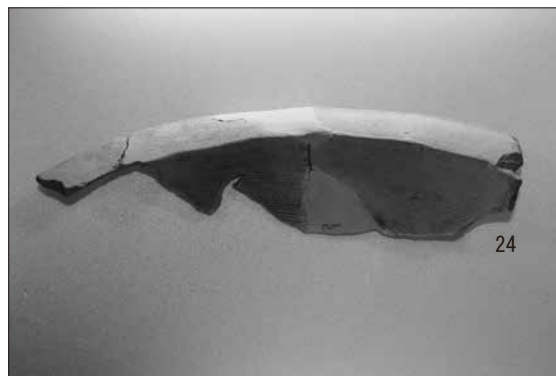
第26次:第1調査区NR1出土遺物



第26次:第1調査区NR1出土遺物



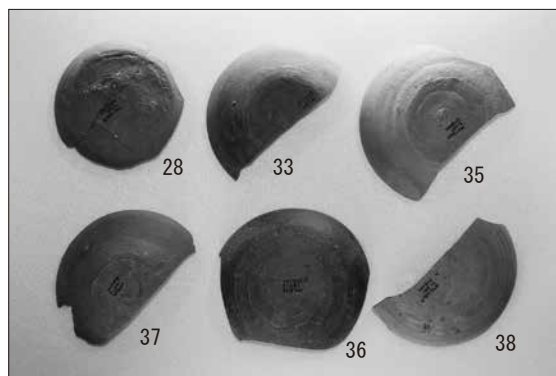
第26次：第1調査区NR1出土遺物



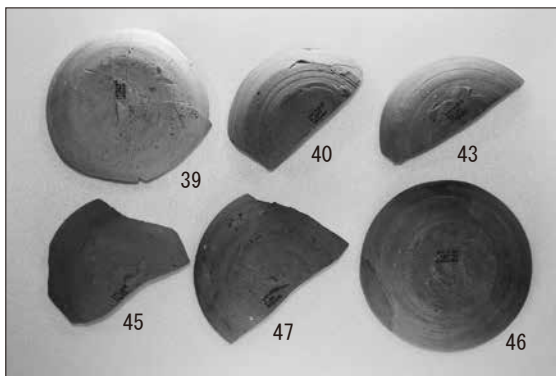
第26次：第1調査区NR1出土遺物



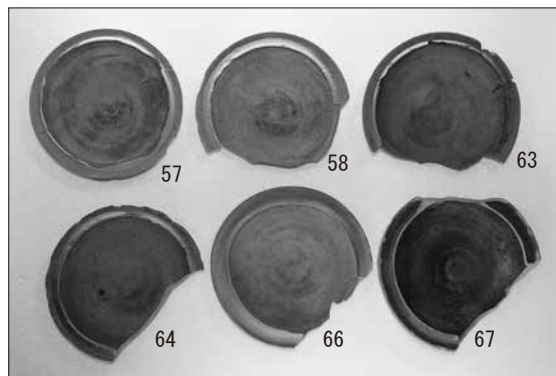
第26次：第1調査区NR1出土遺物



第26次：第1調査区NR1出土遺物



第26次：第1調査区NR1出土遺物



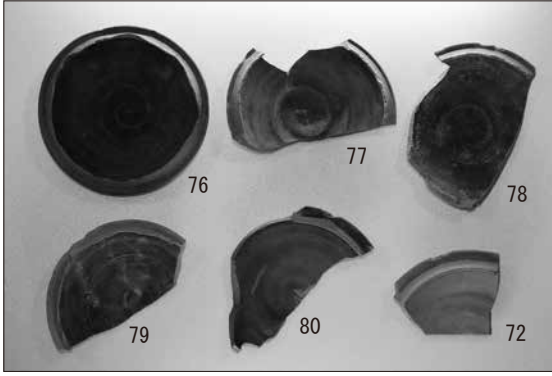
第26次：第1調査区NR1出土遺物



第26次：第1調査区NR1出土遺物



第26次：第1調査区NR1出土遺物



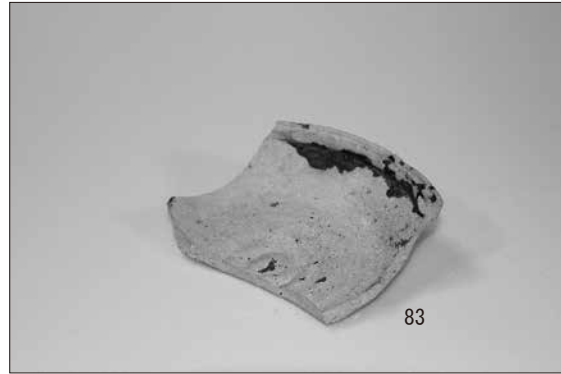
第26次：第1調査区NR1出土遺物



第26次：第1調査区NR1出土遺物



第26次：第1調査区NR1出土遺物



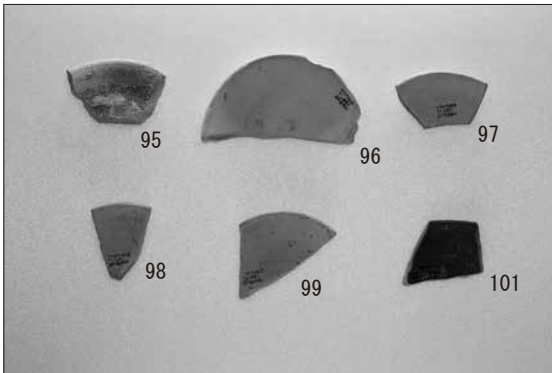
第26次：第1調査区NR1出土遺物



第26次：第1調査区NR1出土遺物



第26次：第1調査区NR1出土遺物

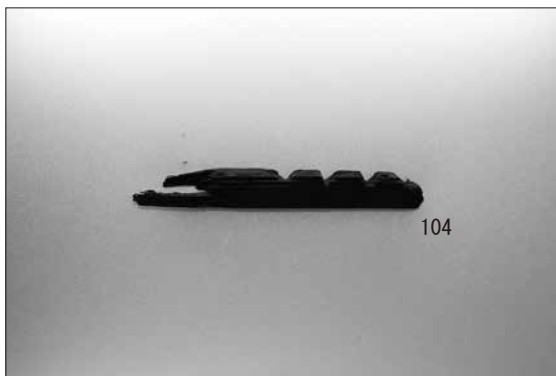


第26次：第1調査区NR1出土遺物



第26次：第1調査区NR1出土遺物





第26次:第1調査区NR1出土遺物



第30次:第1調査区調査前風景[南から]



第30次:第1調査区全景[南から]



第30次:第1調査区全景[南東から]



第30次:調査区全景[北から]



第30次:第1調査区全景[南から]



第30次:小穴(SP36)完掘状況[南から]



第30次:小穴(SP78)異物出土状況[西から]

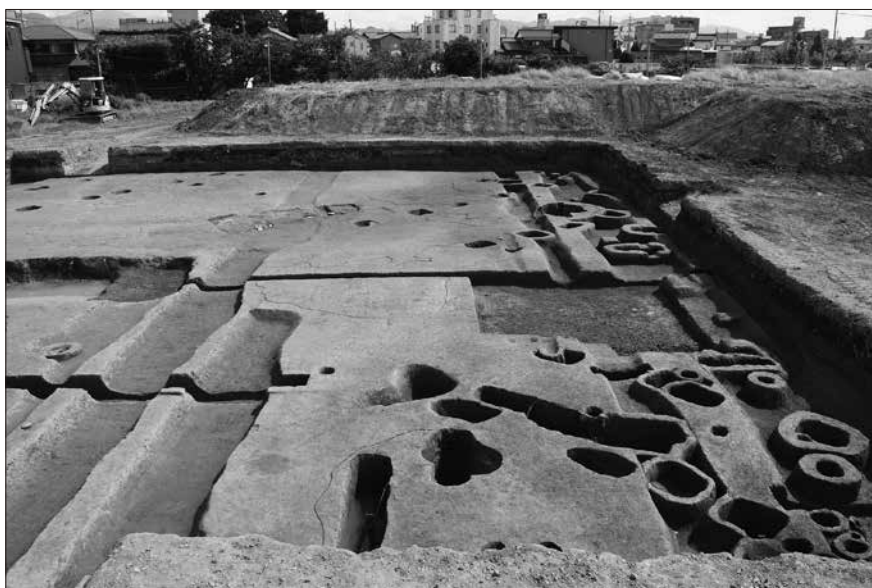




第30次：  
竪穴建物(SH221)  
完掘状況〔西から〕



第30次：  
掘立柱建物(SB2)  
完掘状況〔北から〕



第30次：  
道路遺構(SF1)  
完掘状況〔北西から〕



第30次:掘立柱建物(SB1)完掘状況[北から]



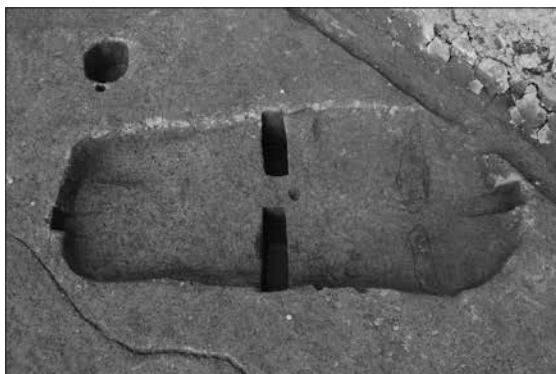
第30次:掘立柱建物(SB3)完掘状況[北から]



第30次:掘立柱建物(SB4)完掘状況[東から]



第30次:掘立柱建物(SB5)完掘状況[南から]



第30次:土坑(SK45)完掘状況[南から]



第30次:井戸(SE43)礫検出状況[南東から]



第30次:井戸(SE43)土層断面[南東から]



第30次:井戸(SE43)異物出土状況[南東から]





第30次: 道路遺構(SF1)完掘状況[南東から]



第30次: 溝(SD38)完掘状況[北西から]



第30次: 溝(SD39)完掘状況[北西から]



第30次: 溝(SD59)完掘状況[北西から]



第30次: 溝(SD60)完掘状況[北西から]



第30次: 土坑(SK9・SK10)完掘状況[北から]



第30次: 第2調査区調査前風景[北から]



第30次: 小穴(SP36)遺物出土状況[南から]



第30次: 竪穴建物(SH221)完掘状況〔西から〕



第30次: 竪穴建物(SH221)土層断面〔西から〕



第30次: 掘立柱建物(SB6・SB7)完掘状況〔北から〕



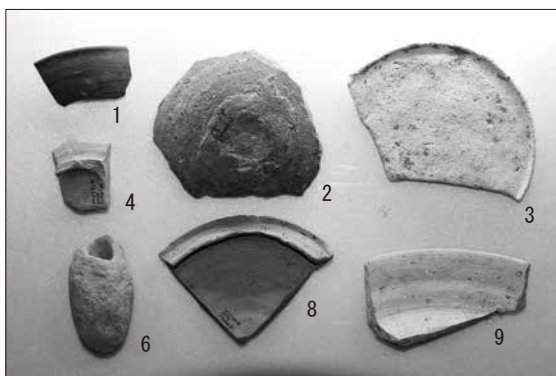
第30次: 小穴(SP209)遺物出土状況〔北西から〕



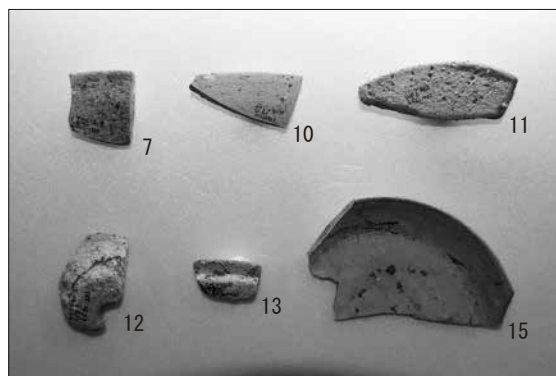
第30次: 小穴(SP205)遺物出土状況〔南から〕



第30次: 小穴(SP205)遺物出土状況〔東から〕



第30次: 各遺構出土遺物

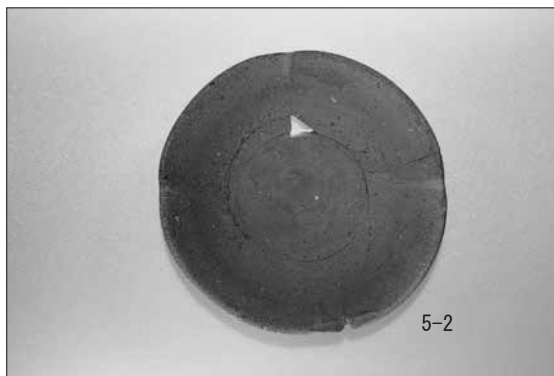


第30次: 包含層・各遺構出土遺物

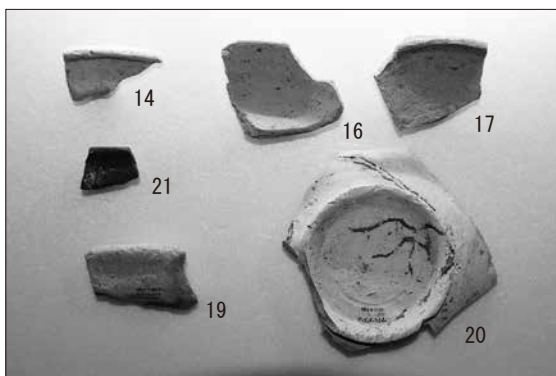




第30次:SE43 出土遺物



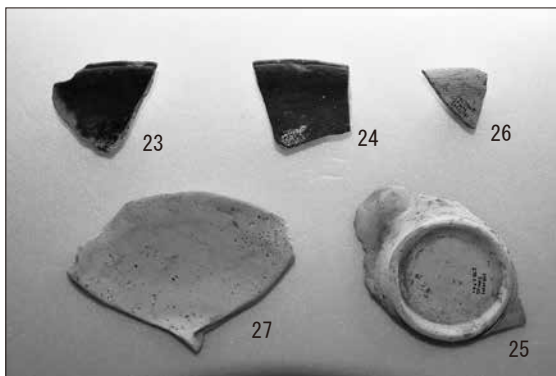
第30次:SE43 出土遺物



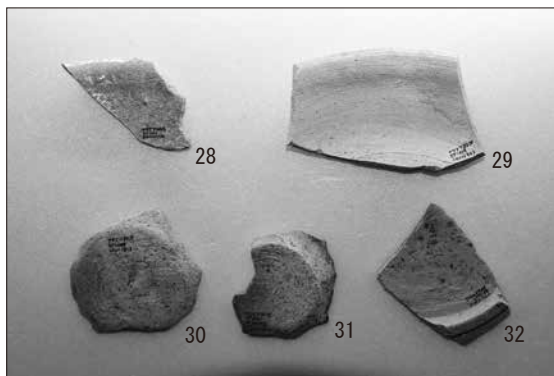
第30次:包含層・各遺構出土遺物



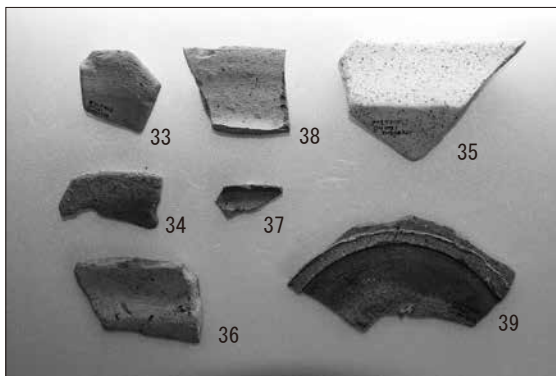
第30次:SP205 出土遺物



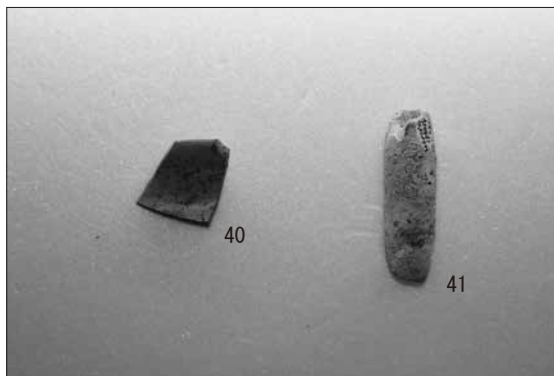
第30次:各遺構出土遺物



第30次:各遺構出土遺物



第30次:SH221 出土遺物



第30次:SH221 出土遺物



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ふくみついせきだい26・30じはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	福満遺跡第26・30次発掘調査報告書							
副書名	彦根市スポーツ・文化交流センター等建設付帯工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	92							
編著者名	林 昭男							
編集機関	彦根市 観光文化戦略部 文化財課							
所在地	〒522-8501 彦根市元町4番2号 TEL 0749-26-5833							
発行年月日	20240331							
しよしゅういせき 所収遺跡	しよざいち 所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ふくみついせき 福満遺跡	ひこねし 彦根市 にしいまち 西今町 こいづみち 小泉町 地先	252026	202-015	35度 14分 51秒	136度 15分 35秒	66 m <sup>3</sup> (26次)	20180901 ～ 20190131	彦根市スポーツ・文化交流センター等建設付帯工事
						641 m <sup>3</sup> (30次)	20200413 ～ 20201130	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福満遺跡 (26次)	集落	飛鳥時代～奈良時代	掘立柱建物 溝、土坑、 小穴、河道	弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、山茶碗、土製品、木製品		第30次調査区で、古墳時代～平安時代にかけて、道路遺構、正南北軸建物群、やや西傾軸建物群の遺構の変遷が確認された。		
福満遺跡 (30次)	集落 交通	古墳時代～平安時代	堅穴建物、掘立柱建物 井戸、溝、土坑、小穴、 道路遺構	弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器、山茶碗、土製品				
要約	<p>犬上川右岸の自然堤防あるいは氾濫平野に位置する福満遺跡における第26・30次調査である。第26次調査では、飛鳥時代～奈良時代の遺物を中心に多様な時期の遺物が包含される河道や集落関連遺構が確認された。第30次調査では、古墳時代～平安時代にかけて、概ね3時期に分かれて集落関連遺構が変遷していく状況が確認された。すなわち、1期目で詳細な時期は不明ながら道路遺構が確認され、2期目で7～8世紀の主軸を正南北方向にとる建物群、3期目で12世紀の主軸をやや西傾させる建物群である。具体的な開発の変遷・状況を確認できたことは、当該地周辺における古代の地域社会像を考える上でも重要な成果と言える。</p>							

彦根市埋蔵文化財調査報告書第92集  
福満遺跡第26・30次発掘調査報告書

令和6年(2024年)3月31日発行

編集・発行：彦根市観光文化戦略部文化財課  
彦根市元町4番2号  
TEL 0749-26-5833

印刷・製本：株式会社デジ・プリント滋賀  
滋賀県彦根市平田町776-1

# **FUKUMITSU SITE**

**2024**